

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (2)  
— 『キエフ年代記集成』 (1118 ~ 1146 年)

中沢 敦夫, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 62 号抜刷

2015年2月

## 『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (2) — 『キエフ年代記集成』 (1118 ~ 1146 年)

中沢 敦夫, 藤田英実香

6626 [1118] 年

ヤロスラフ・スヴァトボルコヴィチ [B32] がヴラジミルから<sup>1)</sup>ハンガリー人のもとへ<sup>2)</sup>逃げ出した<sup>3)</sup>。かれの貴族たちもかれから去って行った<sup>4)</sup>。

---

1) 12世紀初頭、城市ヴラジミルを含むヴォルィニ地方は、スヴァトボルク大公 [B3] 一族の所領となり、その子ヤロスラフ [B32] は 1100 年からヴラジミルの公として支配していた。その後、ヤロスラフはノヴゴロドへの領地替えを望むがノヴゴロド側から拒否される。キエフ大公の父スヴァトボルクの死後 (1113 年)、かれはキエフの大公位の継承を望むが、大公位はウラジーミル・モノマフ [D1] の手に落ち、ヤロスラフはそのままヴラジミルの支配公をつとめた。ウラジーミル・モノマフ [D1] は大公位を脅かすヤロスラフを排除するため、自分の長子ムスチスラフ [D11] の娘とヤロスラフとの政略結婚が成立した (1112 年) ([イパーチイ年代記 (1): 注 46] 参照) ことを契機に、城市ヴラジミルの略取を画策する。ヤロスラフはモノマフ一族との対決を決意し、1118 年に妻を離縁して戦争を準備した。同年、ウラジーミル・モノマフ公 [D1] はガーリチ地方在地の公であるヴォロダリ・ロスチスラヴィチ [A12]、ヴァシリコ・ロスチスラヴィチ [A13] 等と連合して城市ヴラジミルを攻撃した。おそらく小規模な戦闘のすえにヤロスラフ [B32] はほとんど単身でヴラジミルを脱出したと思われる。

なお、本連載で「ヴラジミル」と表記するときには、ポーランドへ流れるブーク川沿いの城市「ヴラジミル・ヴォルィンスキイ」(Владимир-Волынский) を指し (1154 年の記事まで)、人名の場合の表記「ウラジーミル」と区別している。

2) 原語は単に угры だが、これは「～へ」を示す前置詞 в の欠落と考えられる。

3) 『ラヴレンチイ年代記』 6627(1119)年に並行記事があり、そこでは「ヤロスラヴェツ・スヴァトボルチチがヴラジミルからリャビ (ポーランド人) のもとに逃げた」となっており、ハンガリー行のことは触れられていない。これは、ヤロスラフ公 [B32] は 1118 年 (もしくは 1119 年) に三番目の妻であるムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] の娘を離縁したが (上注 1 参照)、これによるモノマフ一族との関係悪化を恐れたことによるのだろう。ヤロスラフ公 [B32] の最初の結婚相手はハンガリー王ラースロー一世 (聖王) の娘であり、縁故があった。その後まもなく、やはり縁故をたどってポーランドに身を移した (かれの二番目の結婚相手はヴワディスワフ 1 世ヘルマンの娘)。

15 世紀後半の歴史家ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』(Historiae Polonicae libri xii) の 1118 年の記事によれば、ヤロスラフは二番目の妻の兄であるポーランド大公ボレスワフ三世 (曲唇公) (大公自身、ヤロスラフの妹であるズプィスラヴァと結婚していた) の庇護を求め、快く受け入れられたとしている [Щавелева 2004: C. 148-149, 300-301]。

4) ヴラジミルでヤロスラフ [B32] の配下にいた在地の高官貴族が、ウラジーミル・モノマフ一族の側についていたことを指している。

この年にロマン・ウラジーミロヴィチ [D14] が逝去した<sup>5)</sup>。1月6日だった<sup>6)</sup>。そして、ウラジーミル [D1] は別の息子アンドレイ [D18] をヴラジミルへ公として支配させるために派遣した。

6627 [1119] 年

ウラジーミル [D1] はミンスクをグレーブ・フセスラヴィチ [L5] から攻め取った。そして、グレーブ自身をキエフに連行した。

この年にグレーブ・フセスラヴィチ [L5] がキエフで逝去した。9月13日だった<sup>7)</sup>。

6628 [1120] 年

ユーリイ・ウラジーミロヴィチ [D17]<sup>8)</sup> がヴォルガのブルガール人を攻める遠征を行った。多くの捕虜を獲り、かれらの部隊に打ち勝ち、掠奪<sup>9)</sup> したあげく、無事に榮譽と栄光をもって<sup>10)</sup> 帰還した。

その頃、ウラジーミル [D1] は、ポーランド人を攻めるために、アンドレイ [D18] を異教の者<sup>11)</sup> どもとともに派兵した<sup>12)</sup>。[その兵たちは] かれらから掠奪をおこなった。

その年、ダヴィド [C3] の息子のロスチスラフ [C33] が逝去した。

---

5) 記述の流れや、『ラヴレンチイ年代記』6627(1119)年の記事に「ヤロスラヴェツ [B32] がポーランド人(リャヒ)のもとに逃げた。そこでウラジーミル [D1] は息子のロマン [D14] を公としてヴラジミルに派遣した」[スズダリ年代記訳注 [I]: 18 頁]とあることからみて、ロマン公 [D14] は、ヴラジミルを去ったヤロスラフ公 [B32] のあとにヴラジミルの公として派遣されて、すでに支配公となっていたと考えられる。

6) ユリウス暦で1119年1月6日に相当する。なお死去の日は、ラヴレンチイ年代記の6627年の並行記事では、1月15日に[スズダリ年代記訳注 [I]: 18 頁]、ヤン・ドゥウゴシュの『歴史』では1月14日 [Щавелева 2004: C. 149, 301] になっている。

7) 1119年9月13日に相当する。連行直後の死は、当然謀殺が疑われる。

8) ユーリイ手長公 (Юрий Долгорукий)[D17] のこと。イパーチイ年代記の原文では Георгий と表記されている。本稿では、この人名の訳語を「ユーリイ」で統一する。

9) 本稿で「攻め取る」「掠奪する」「略取る」と訳した воевати は年代記に頻出する語で、掠奪を行い捕虜や戦利品を獲得することを意味している。

10) 「榮譽と栄光をもって」(с честью и славой) は中世年代記の定型表現だが、ここでは「榮譽」は戦利品をあらわし、「栄光」とは司令官としての名声を意味している。ともに遠征の目的を示している。

11) 年代記の用語法から見て、「異教の者」(поганый) とは、ポロヴェツ人を指している。

12) アンドレイ公はヴラジミルにおり、そこからブグ川を遡ってポーランド領内へ攻め込んだのだろう。派兵先が記されていないことから、城市攻略を必ずしも目的としない掠奪遠征だったと考えられる。

6629 [1121] 年

ウラジーミル[D1]がベレンディ人<sup>13)</sup> (берендичи)をルーシから追い払った。トルク人<sup>14)</sup> (торци)とペチェネグ人<sup>15)</sup> (печенеги)はみずから逃げていった。

その年、ヤロスラフ[B32]がポーランド人を引き連れてチェルヴェン<sup>16)</sup> へ向かって来た<sup>17)</sup>。[チェルヴェンに]フォマ・ラティボリチ<sup>18)</sup>が代官<sup>19)</sup>として赴任していたときのことである。[ヤロスラフは] なにも得るものもなく、再び戻った。

その年、キエフで府主教ニキフォルが逝去した。4月だった。

---

13) 「ベレンディ人」(беренди)は、年代記では берендичи, берендии とも表記され、トルク人から分かれたとされるテュルク系部族。やはりポロヴェツの圧迫を受けて、11世紀には大草原で遊牧を行っていた。『原初年代記』には1097年の記事にはじめてその名が見える。1116年の記事にあるように、一部の住民がモノマフの庇護を受け、傭兵としてつとめていた。おそらくかれらに何らかの違反行為があり、これをキエフから追放したと思われる。

14) トルク人(торки)は、オグズ(Oghuz), ウズ(Uz), トゥルクマーン(Turkmen)などの呼称があり、カスピ海の北・東岸に居住していたテュルク系の部族で、10世紀以降、黒海北岸の大草原地帯展開し、一部は11世紀にはポロヴェツ人に圧迫されて南下、ドニエプル下流域で遊牧生活を行い、ルーシと接触するようになった。『原初年代記』985年の記事にウラジーミル聖公のブルガール遠征に従軍したとして初めて登場し、1060年にはルーシ諸公連合の遠征によってほぼ壊滅させられたとしている。ここに記されているのは、残存した住民のことだろう。

15) ペチェネグ人(печенеги)人は、8世紀から9世紀にかけてカスピ海北岸一帯で形成されたテュルク系部族連合で、9世紀末にハザール人に圧迫されて黒海北岸の大草原に移り、10世紀にはルーシ、ブルガリア、ハンガリー、ビザンティン帝国などと接触、摩擦を起こした。『原初年代記』では、968年に大軍でキエフを包囲し、あわや陥落させるエピソードで初めて言及され、972年にはスヴァトスラフ[03]を殺害するなど、ルーシ諸公にとっては手強い勢力だった。11世紀末に、遊牧民のポロヴェツの圧迫を受けてドナウ川を越え、ビザンティン領内へ移住している。ここに記されているのはその残存勢力だろう。

16) ブーク川の支流のフチヴァ川(Huczwa)左岸に建てられたと推定されている城砦。遺構は確認されていない。ヴォルィニのヴラジミルにほど近い(約60km)、当時はウラジーミル・モノマフ一族の支配地であった。

17) ポーランドのプウォーツクで義兄のボレスワフ三世(曲唇公)大公の庇護を受けていたヤロスラフ公[B32]は捲土重来を期してポーランド兵を引き連れてブグ川を遡行し、近場のモノマフ一族の城砦を攻めたと思われる。

18) フォマ・ラティボリチ(Фома Рагиборич)はキエフの千人長(軍司令官)。1116年にはヴァチエスラフ[D16]とともにビザンティン遠征に参加している(『イパーチイ年代記』(1):262頁, 注109)。

19) 「代官」(посадник)とは、公族と従士団を派遣して支配できないような状況のとき、あるいは小さな城市の場合に、公が側近貴族を派遣して統治をさせる一種の行政官である。フォマはウラジーミル・モノマフ公[D1]によってキエフから派遣されたと考えられる。

同じ月に太陽と月にしるしがあった<sup>20)</sup>。

そして、ムスチスラフ [D11] の公妃<sup>21)</sup> が死んだ。1月18日のことである<sup>22)</sup>。

その年、〔ウラジーミル・モノマフ大公 [D1] が〕〔キエフの〕コピレフ区<sup>23)</sup> で聖ヨハネ教会を定礎した。

#### 6630〔1122〕年

ムスチスラフ [D11] の公女がギリシア人のところへ、皇帝のもとへ輿入れした<sup>24)</sup>。

そして、府主教ニキータ<sup>25)</sup> がギリシア人のところからやってきた。

そして、ユーリエフ (Гурьговъский) の主教ダニロフが死んだ<sup>26)</sup>。

そして、ヴラジミルの主教アンフィロフイ (Анфилофий) が死んだ。

そして、大地が少し揺れた<sup>27)</sup>。

そして、ポーランド人 (ляхи) たちが計略によって、ヴァシリコ [A13] の兄のヴォロダリ [A12]

---

20) 『ラヴレンチイ年代記』では6630(1122)年の記事に太陽と月のしるしについて書かれており、それぞれ3月10日と3月24日という日付が付されている。これは天体現象の計算とも一致する〔スズダリ年代記訳注 [I]: 19頁〕〔日食・月食・星食情報データベース〕。『イバーチイ年代記』ではこれが「同じ月」すなわち1121年4月に起こったということになるが、おそらく『ラヴレンチイ年代記』と同じ現象を指しており、日付については編集上の誤認もしくは誤記と考えるべきだろう。

21) ムスチスラフ公 [D11] が1095年に結婚した最初の妻でスウェーデン王インゲー世 (Inge Steinkelsson) の娘クリスチナのこと。〔Russian genealogy〕

22) 1122年1月18日に相当する。

23) コピレフ区 (Копырев коньць) はキエフの丘の「ヤロスラフ区」の北西に隣接する城区で「ユダヤ門」(жидовские ворота) で結ばれていた。

24) タティーシチェフによれば、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチの娘のドロデヤ (Добродея) のこと。当時のコムネノス朝の東ローマ皇帝アンドロニコス一世 (1118年～1185年) が四歳のときに政略結婚で嫁いだという〔Тагищев Т. П., 1995: С.135〕。また、カラムジンは、「もう一人の三女〔イリーナ (ドロデヤ)〕はビザンチンの皇子に嫁いだという。この皇子は皇帝ヨハネス二世の子アレクシオス〔アンドロニコス・コムネノス〕であろう。ビザンチンの年代記ではこの皇子の妃の名も出身も伝えられていない」としている。〔Карамзин 1991: С. 281〕

25) ビザンチン (おそらくコンスタンチノポリス) 渡来のギリシア人。この年1122年10月15日にキエフ及び全ルーシの府主教として着任し、1126年5月19日 (一説では3月9日) に没するまでその職にあった。

26) タティーシチェフによれば、1121年9月9日に死去したとしている。〔Тагищев Т. П., 1995: С.135〕

27) 『ラヴレンチイ年代記』1122年に並行記事がある。タティーシチェフによれば、これは1122年9月9日にキエフで発生した地震を指している〔Тагищев Т. П., 1995: С. 135〕。

を捕らえた<sup>28)</sup>。

同じ年にノヴゴロドから、ムスチスラフ[D11]<sup>29)</sup>の後妻として、ザヴィドの孫娘でドミートリイ<sup>30)</sup>の娘が連れてこられた<sup>31)</sup>。

6631〔1123〕年

ダヴィド・スヴァトスラヴィチ[C3]がチェルニゴフで逝去した。そして、かれの代わりに、弟のヤロスラフ[C5]が座した<sup>32)</sup>。

その年にペレヤスラヴリの主教セリヴェストルが逝去した。また、チェルニゴフの主教フェオクティストが逝去した<sup>33)</sup>。

その年にセメオンがヴラジミルの主教に叙任された。

この年にヤロスラフ・スヴァトポルコヴィチ[B32]がハンガリー人、ポーランド人、チェコ

---

28) ヤン・ドゥウゴシュ『歴史』の1122年の記事によれば、ベレムィシェリの公ヴォロダリ・ロスチスラヴィチ[A12]は国境を侵して掠奪を繰り返していたため、ボレスワフ三世(曲唇公)が部隊を派遣してヴォロダリを捕らえてクラクフに連れ去り、投獄した。それからしばらくして、弟のヴァシリコ[A13]と息子のウラジミル[A121]が銀貨二万マルクを支払って買い戻す約束をし、ヴォロダリはボレスワフ大公と和解して、この年の7月22日にベレムィシェリに帰還した[Щавелева 2004: С. 149-150, 301-302]。おそらくこの際に、兄弟はポーランド側に味方することを約束したものと考えられ、1123年の記事に見るように、ふたりはヤロスラフ[B32]の「失地回復戦」のときにはかれの味方になっている。

29) ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ(Мстислав Владимирович)はウラジーミル・モノマフ大公[D1]の長子ムスチスラフ[D11]のこと。当時、およそ47歳だった。その後、1125年に父モノマフ公の死去にともない、50歳でキエフの大公位を継ぐことになる。

30) 市長官ドミートリイ・ザヴィドヴィチ(Дмитрий Завидович)は1118年に死んでおり[Новгородская первая летопись: С. 204]、その娘のリュバーヴァは1122年に結婚した当時は孤児であった。

31) ムスチスラフは1222年に最初の妻でスウェーデン王インゲ一世の娘クリスチナを失っている[Новгородская первая летопись: С. 205 (под 6630(1222) г.)]。すぐに再婚の話がととのい、同じ年にノヴゴロドの市長官(посадник)、ドミートリイ・ザヴィドヴィチ(Дмитр Завидич)の娘のリュバーヴァ(Любава)がノヴゴロドから、当時ムスチスラフの領国であったベルゴロドへ輿入れした。ムスチスラフの再婚相手、リュバーヴァの名については、タティーシチェフの『ロシア史』本文の6630(1122)年の項に「ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチはノヴゴロドで結婚した。市長官ドミートリイ・ダヴィドヴィチの娘リユバヴァを娶った」[Тагищев Т. П., 1995: С. 135]とあるが、現存の年代記にはその名は見えず、タティーシチェフが依拠した史料が何であるかも不明である。

ムスチスラフ[D11]は1095年から息子フセヴォロド[D111]にノヴゴロドの公位を譲る1117年まで、ノヴゴロド公として長年統治しており、この城市とのつながりは深かった。自分の再婚相手に市長官の娘を選んだのは、ノヴゴロドとの関係を維持するためと考えられる。

32) ダヴィド[C3]の死については『ラヴレンチイ年代記』に並行記事があるが、ヤロスラフ[C5]の就位については記されていない。

33) 『ラヴレンチイ年代記』にはセリヴェストルの逝去が1123年4月12日、フェオクティストの逝去が8月6日とそれぞれ日付が書かれている。

人たちを引き連れ、ヴォロダリ [A12]、ヴァシリコ [A13] とともに<sup>34)</sup>、ヴラジミルの城市へ襲来した<sup>35)</sup>。彼らのところには多数の軍兵がおり、城市ヴラジミルを包囲した。そのとき、アンドレイ [D18] は城内にいたが、ウラジーミル [D1] はキエフから、その息子ムスチスラフ [D11] とともに駆けつけるのが間に合わなかった。

そして、日曜日<sup>36)</sup>が近づき、ヤロスラフ [B32] は城市〔ヴラジミル〕に接近し、日曜日の早朝、〔配下の者と〕三人で城壁に近づいた。そして、城壁のもとに押し寄せると、〔城市の〕民とアンドレイ [D18] 公を威嚇した。大軍を擁していることを驕り高ぶっていたのである。そして、アンドレイ公と城市の民に向かってこう言った。「これはわしの城市である。もしお前たちが城門を開いて、城外に出て、拝礼をしないのならば<sup>37)</sup>、明日は城に突撃し、占領するであろう」。

アンドレイ公は、人々とともに、神に大いなる望みをかけていた。また、父の祈り<sup>38)</sup>に望みをかけていた。ヤロスラフがさらに城壁に近づいたとき、二人のポーランド人<sup>39)</sup>が跳ね橋のところに出てくると、身を伏せてその場に隠れた。ヤロスラフがさらに城壁のところまで近づき、大声で呼びかけて、城壁から離れて跳ね橋を渡ろうとして、まだヤロスラフが橋の上にいるときに、ポーランド人は、跳ね橋のところへ移動して、かれを捕まえて手槍<sup>40)</sup>で刺した。ヤロスラフは息絶え絶えで逃げのびたが、その夜に絶命した。

このようにして、これほどの大軍と一緒にいながら、その大いなる傲慢さのゆえにヤロスラフはひとりで死んでしまった。それは、かれが神に望みをかけず、多数の軍兵に望みをかけていたからである。

〔ヤロスラフとともに従軍していた〕ハンガリー人、ポーランド人、ヴォロダリ [A12]、ヴァシリコ [A13] はそれぞれ自分たちの場所に戻って行った。そして、〔キエフにいる〕ウラジー

34) ヴォロダリ・ロスチスラヴィチ [A12] はポーランド国境地方のペレムィシエリの公であり、1118年にヤロスラフ [B32] がヴォルィニ地方の城市ヴラジミルから逃げ出したときには、兄弟のヴァシリコ・ロスチスラヴィチ [A13] とともに、かれを排除したウラジーミル・モノマフ大公 [D1] の味方をしていた。その後、上の註28に示したようにヤロスラフの支援に回っている。

35) タティーシェフによると、1123年5月15日にあたる [Тагищев Т. П, 1995: С. 135]。なお、ヤン・ドゥウゴシュ『歴史』の1118年の記事にヤロスラフはポーランドに4年間滞在したとあり、かれの失地回復戦の時期と一致している [Щавелева 2004: С. 149, 301]。

36) タティーシェフによれば、1123年5月20日に相当する。

37) 城市から出て拝礼するとは、降伏の意志を示す儀礼をあらわしている。

38) コマローヴィチによれば、「父の祈り」(отца своего молитва)とは、キリスト教の文脈で理解すべきではなく、大地信仰に源流を発する、公一族が保持してきた祖先崇拜に基づいているという [Комарович 1960: С. 90-92]。

39) この「二人のポーランド人」(два ляха)は記述の流れからみると、ヴラジミル城市防衛側の兵士と解釈できるが、ヤロスラフはポーランド軍団を率いていたことから、味方の裏切り者と理解する説もある。 [Толочко 2014: С. 15]

40) 手槍(оскъпъ)とは、ポーランド語 oszczep, チェコ語 oštěp に相当する短い槍のこと。

ミル[D1]のもとには、献上品をもった使者たちが依頼のために派遣された。〔そのような使者を通じて〕、ウラジーミルは、このような神の奇蹟と神の助けを賛美して〔次のように伝えさせた〕。

「どのようにして傲慢に打ち克ったかを見るがよい、そして正しくへりくだる者は、心を再び正しくするであろう。これについては聖書が『心が驕っている者は神の前で汚れている』<sup>41)</sup>と言うとおりである。さて、従士たちよ、兄弟たちよ、お前たちは考えてみるがよい、神は誰の味方なのか、驕れる者の味方なのか、へりくだる者の味方なのか」<sup>42)</sup>。

なぜなら、まだキエフにいたときウラジーミル[D1]は、多くの軍兵を集めながらも、神にヤロスラフの強引な振る舞いと驕り〔を拉ぐようにと〕祈ったからである。そして、〔ウラジーミル公〕は自分より前に、ムスチスラフ[D11]に小勢を率いさせてヴラジミルの城市へと派遣する他はなく、自分はそのあとで全軍を率いて行軍しようと考えていたからである。ところが、大いなる神の助けが篤信のウラジーミル[D1]公とその息子たちに対してなされた。これは、かれの誠実な生活のゆえであり、かれのへりくだりのゆえなのである。

他方、かの〔ヤロスラフ〕は、まだ若いころに、自分の叔父に対して驕りたかぶったことがあり<sup>43)</sup>、さらに〔今回は〕自分の義父であるムスチスラフ[D11]に向かっても驕り高ぶったのである。

「兄弟たちよ、おまえたちは見るがよい。幸いにして慈しみ深い神は、なんとへりくだる者と義しい者を配慮し、愛しんでくれることか。『主なる神は驕れる者にはその力をもって嘲り、へりくだる者には恵みを与えるのである』<sup>44)</sup>」<sup>45)</sup>。

6632〔1124〕年

大地がわずかに揺れ、ペレヤスラヴリの〔大天使〕聖ミハイル首座教会が崩落した。5月10

---

41) 出典は旧約聖書『箴言』第16章5節。

42) 文体から見て、「どのようにして」からここまでは、ウラジーミル・モノマフ公の言葉の引用と考えるべきだろう。

43) これは、『イパーチイ年代記』6625(1117)年記事(『イパーチイ年代記(1):264～265頁』)にある、ウラジーミル・モノマフのヤロスラフ懲罰のためのヴラジミル攻めを引き起こした「ヤロスラフの悪行」(злобы)(モノマフ『教訓』の言葉)を指しており、「自分の叔父」とはモノマフ公を指している。その場合「若い頃」といっても6年前に過ぎない。本来、*стрый, строй*は父方の伯叔父を指すが、年代記ではより広い意味でも用いられている。ヤロスラフ[B32]にとってモノマフ[D1]は祖父の弟の子供、すなわち「従伯叔父(いとこおじ)」だが、やはり *стрый* と呼ばれおり、同様の用法は1117年の記事の中にも見える。

44) 出典は旧約聖書『箴言』第3章34節。

45) 括弧内の「兄弟たちよ」からここまでの文言は、上(注42)に引き続いてモノマフ公の言葉(おそらく、使者を通じて配下の一族に伝えさせた)の直接引用と考えることができる。



日<sup>46)</sup>のことだった。この教会は福者たる主教エフレム<sup>47)</sup>が建立し、壁画を描かせたものだった<sup>48)</sup>。

この年、フセヴォロド・ダヴィドヴィチ [C32]<sup>49)</sup>との結婚のために、ムーロムにポーランド女<sup>50)</sup>が連れてこられた。

この年、ヤロスラフ・スヴャトスラヴィチ [C5]の妃が亡くなった<sup>51)</sup>。

この年、旱魃があった。

その頃、〔キエフの〕ポドーリエ地区が全焼した。洗礼者にして前駆者聖ヨハネの誕生の日の前日であった<sup>52)</sup>。その翌日には、丘の上が焼けた。丘の上、城内にあったすべての修道院<sup>53)</sup>が焼失した。ユダヤ人たち〔も焼け死んだ〕<sup>54)</sup>。

---

46) 1124年5月10日に相当する。

47) 主教エフレムは、イジャスラフ・ヤロスラヴィチ公 [B]の貴族だったが、公の意に反して、キエフ洞窟(ベチェルスキイ)修道院に行き、ニコンの手で修道士となった。のちに、コンスタンティノポリスで修行をして、ストゥディオス修道院から修道院規則を持ち帰った。1070年からペラヤスラヴリの主教(府主教)に叙任され、フェオドシイの移葬式にも立ち会っている。かれはペラヤスラヴリの首座教会である聖ミハイル聖堂を1080年代後半～1090年代初めに建立している。1097年頃(もしくは1105年)に逝去し、この聖堂に埋葬された。

48) 『ラヴレンチイ年代記』の6631年に並行記事がある。そこでは、崩落の原因が地震であることについては指摘がなく、その時については「晩課の前のこと」(передъ вечернею)とより詳細な指摘がされている。

49) フセヴォロド・ダヴィドヴィチ [C32]は、1123年頃に叔父のヤロスラフ・スヴャトスラヴィチ [C5]がチェルニゴフに移ったあとを受けてムーロム公となった。1127年にヤロスラフが再びムーロム公になったことから見て、この年に死去したと思われる。

50) ピヤスト王家のボレスワフ三世(曲唇公)とスヴャトボルク二世 [B3]の娘スプイスラヴァとの間の娘のマリアのこと。生年が1111年だから、結婚のときは14歳だったことになる。

51) 原文は Ярославля Святославлича だが、諸説では、この前に княгыни の語が脱落していると解釈して、「ヤロスラフ・スヴャトスラヴィチの妃」と理解している。ヤロスラフ公の聖人伝によると、妃の名前はイリーナ。1124年にムーロムで没し、この都市の受胎告知(ブラゴヴェシチェンスキイ)首座教会に埋葬され、聖人として地方的な崇敬を受けていた。前のムーロム関連記事とはひとつながりになっている。

52) これは1124年6月23日に相当する。キエフの大火については、『ラヴレンチイ年代記』にも並行記事があり、「二日にわたり」「教会だけでも600近くが焼け落ちた」とより詳細に記されている[スズダリ年代記訳注 [I]: 21頁]。

53) 「丘の上」(на Горе), 「城内」(в граде)の丘とは、キエフでは、ドニエプル=ポチャイナ河岸の低地に位置するポドリエ(Подолье)地区との対比で、高い丘の上の一角を広く指している。城壁に囲まれた城市(град)もまた丘の上に位置していたことから、「城内」の語は、「丘」の上の位置をより限定して示したにすぎないと考えられる。なお『ラヴレンチイ年代記』では、「ポドリエ帯と丘の上の一角が(燃えた)」[スズダリ年代記訳注 [I]: 21頁]となっており、ポドリエ地区にも延焼したとされている。

54) 「ユダヤ人たち」(жидове)については、『ラヴレンチイ年代記』の記事にはない。『イパーチイ年代記』のキエフ在住のユダヤ人についての関心は、6621(1113)年の記事([イパーチイ年代記 (1)]: 254頁注59)にも認めることができる。

この年、太陽にしるしがあつた。午後からあたかも小さな月〔新月〕のごとくになり、大きさを測ることができないほどだつた。8月11日のことである<sup>55)</sup>。

この年、ヴァシリコ・ロスチスラヴィチ[A13]が死んだ。そのあとで、かれの兄であるヴォロダリ[A12]も亡くなつた<sup>56)</sup>。

6633〔1125〕年

スヴァトボルク[B3]の妃<sup>57)</sup>が亡くなつた。2月28日<sup>58)</sup>のことであつた。

6634〔1126〕年

篤信にしてキリストを愛する全ルーシの大公ウラジーミル・モノマフ[D1]が逝去した。公のルーシの地を照らすこと、あたかも太陽が光線を放つがごときであつた。その名声はあらゆる諸国に達し、異教徒どもには最大の脅威であつた。兄弟を愛し、貧者を愛し、ルーシの地のため労苦をいとわない良き人であつた<sup>59)</sup>。

その逝去は5月19日<sup>60)</sup>であつた。その遺骸を布で巻き<sup>61)</sup>、聖ソフィア〔大聖堂の〕父フセヴォロド[D]の〔棺の〕傍らに安置した。そして、かれについて通常の聖歌が歌われた。主教たち

---

55) この1124年8月11日の日食はデータベースで確認できる。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には「午後のことであつた」(по полуденьи)の語句がある。『ノヴゴロド第一年代記(新編)』の並行記事では「晩課の前に」(перед вечернею)とあり、暗くなって月や星が見えたこと、ノヴゴロド市民の恐れと回復したときの喜びなどが詳しく記されている。[日食・月食・星食情報データベース]

56) 『ラヴレンチイ年代記』に並行記事がある。

57) スヴァトボルク[B3]の三番目の妻で、1104年に結婚したバルバラのこと。コムネノス王朝のビザンティン皇帝アレクシオス一世(在位1081年～1118年)の娘。当時は未亡人だつた。

58) スヴァトボルクの公妃が逝去した日付はこれまでの記事が採用していた「3月暦(3月1日から新年が始まる)」で計算すれば、創世紀元6633年は1126年の2月28日となるが、Бережковの研究によれば、イパーチイ年代記では、本記事である6633年から6640年までの記事は「超3月式」の暦法で記されているという[Бережков 1963: C. 130]。「超3月式」で記された創世紀元を西暦になおすには、1月、2月の場合は5508年を差し引くことになるので、記事のバルバラの没年6633年は、西暦1125年になり、かの女は、1125年2月28日に逝去したことになる。[スーズダリ年代記訳注 [I]: 22頁(註51)]。

59) 『ラヴレンチイ年代記』の死亡記事では、モノマフへの讃詞がはるかに長く語られている。

60) 「超3月式」の暦法によれば、創世紀元6634年5月19日は、1125年5月19日に相当する。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、モノマフ公の死去は6633年の記事に記されているが、これは『ラヴレンチイ年代記』が「3月式」の暦法を採用していることによる[スーズダリ年代記訳注 [I]: 22頁(註52)]。

61) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、モノマフが逝去した場所は「リト川のほとりのその愛する教会の傍らで」とあり、そこで葬儀のために遺体に布を巻く儀礼を行い、櫓でキエフまで運んだものと思われる。

は、無念に思い、神聖にして善良な公を想って泣いた。すべての民もすべての家来<sup>62)</sup>たちも、かれのことを思って泣いた。あたかも、子供が父あるいは母を想って泣くが如きであった。かれを想って泣いたのはすべての家来たちであり、また、かれの息子たち、すなわちムスチスラフ [D11]、ヤロポルク [D15]、ヴァチェスラフ [D16]、ユーリイ [D17]、アンドレイ [D18]、および、かれの孫たちであった。こうして、すべての家来たちは、大いなる無念を抱いて別れ散った。息子たちもそれぞれが大いに泣きながら、おのれの領地<sup>63)</sup>へと別れ散っていった。その領地はかつて、〔モノマフ公が〕息子たち各人に分け与えたものであった<sup>64)</sup>。

ムスチスラフ [D11]のキエフにおける公支配のはじまり

かれ〔モノマフ公〕の最年長の子であるムスチスラフ [D11]が、自分の父親の代わりに、キエフの公座に就いた。5月20日だった。

敵のポロヴェツ人たちはウラジーミル [D1]の死のことを聞くと、「かれらのトルク人たちを捕虜にしよう」と言って、バルーチ (Баручь)<sup>65)</sup>〔の城砦〕へと押し寄せた。ヤロポルク [D15]のところにその報がとどいた<sup>66)</sup>。〔ヤロポルクは〕、家来たちとトルク人をバルーチおよびその他の城砦内へと追い込むように命じた。敵どもは急襲を仕掛けてきたが、〔神の〕配慮によって何を得ることもできなかった。そして、ベレヤスラヴリにヤロポルク [D15]がいることを知ると、スーラ川沿岸 (Посулье)で掠奪するために方向を変えた<sup>67)</sup>。ヤロポルク公は武装を固めると、かれらのあとを追い、神助を得て、兄〔ムスチスラフ [D11]〕からも他の〔公たちからの〕援助をも待たずに、ベレヤスラヴリ人だけを引き連れて、かれらに追いついた。〔敵どもは〕そ

62) 原語は людие。この語は広い意味での従属民を指すことが多いが、ここでは文脈からみて、キエフや所領都市で公の宮廷に仕えている人々を広く指す言葉と理解して「家来」と訳した。

63) 「領地」は волость の訳語で、相続、合意、協定などを経て特定の公が公座を置き、徴税などを行っている支配地を指す。

64) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、葬儀の描写は『イバーチイ年代記』よりも短い。

65) バルーチ (Баручь) は、ベレヤスラヴリから北に 20km ほどに位置する公領の辺境の城砦都市で、ベレヤスラヴリから家来 (люди) が派遣され、モノマフ一族の庇護下におもにトルク人が居住していた [Славянская энциклопедия 1]。ポロヴェツはモノマフの死を知って、城砦の守備が弱体化すると考え、捕虜掠奪の襲撃を試みたと考えられる。

なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には「バルーチ」のあとに、「またプロニ・クニャジ (и ко Бронь княжю) へ」ともう一つの城砦名が書かれている。この年代記資料における追加文言だが、その所在は不明。

66) モノマフは、1113年の自身のキエフ公座就位にともない、それまでいたベレヤスラヴリの公座に就かせた息子スヴァトスラフ [D13]が1114年3月に死んだ後すぐに、次の息子ヤロポルク [D15]に公座を継がせている。それから1132年までのあいだ、ヤロポルクはベレヤスラヴリの公座に就いていた。

67) ヤロポルクの反撃が予想されたので、ポロヴェツたちはバルーチを迂回して、スーラ川河岸にある城砦で捕虜掠奪を行う方針に転換したのである。

の数が少ないことを見ると<sup>68)</sup>、再び方向を変え、隊列を整えて対抗してきた。

そのとき、この篤信の公〔モノマフ〕の根にして篤信なる枝であるヤロボルク[D15]は、神の名と自らの父の名を呼び、自らの従士団とともに果敢に〔戦った〕。両軍が戦闘を行ったすえに、打ち負かされたのは異教徒どもだった。これは、尊い十字架の力と、聖なる〔大天使〕ミハイルによる<sup>69)</sup>ものだった。かれらの一部は打ち殺され、一部は川で溺れた。かれ〔ヤロボルク[D15]〕を神とかれの父の祈りが助けたのである。家来たちはみなこのような賜(たまもの)と援助を受けたことについて、神を賛美した。

この年、聖なる聖母の洞窟修道院の典院プロホルが逝去した。11月15日だった。

6635〔1127〕年<sup>70)</sup>

府主教ニキータが逝去した<sup>71)</sup>。

この年、ウラジーミル[D1]の公妃<sup>72)</sup>が逝去した。7月11日<sup>73)</sup>だった。

同じ年、大地が揺れた。8月2日だった<sup>74)</sup>。

---

68) ヤロボルク軍の数が少なかったことについては『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはない。「神助により寡をもって衆を制する」ことは、1123年のヤロスラフ[B32]討伐戦の記事にもあり、『イパーチイ年代記』の記者が好む主題だったと思われる。

69) 「聖なるミハイルによる」(святымъ Михаиломъ)の文言は『イパーチイ年代記』にだけにあり、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはない。これは両者の共通資料に、『イパーチイ年代記』の記事編者が追加したと思われるが、この天使の助力へのこだわりは、同年代記の1110年追加部分、1111年サルニツァの戦いの描写とそれに続く長い天使論と共通している。この部分にも「追加記事編者」の手が入っていると考えてよいのではないか。

70) この6635年の出来事は、『イパーチイ年代記』の暦法によれば、1126年の出来事ということになる。

71) 府主教ニキータはギリシア人で1122年にキエフに着任し、没年は1126年5月19日(一説では3月9日)とされている。

72) この時期に「ウラジーミル」の名を持つ公はウラジーミル・モノマフ[D1]以外にはなく、『ニコン年代記』には「モノマフの」(Манамака)の語が書き加えられている。その妃(княгиги)とは、1070年代半ばに結婚したアングロ・サクソン王ハロルド二世の娘ギダが1107年に亡くなったあとに、モノマフが50代後半になってから娶った女性と考えられる。タティーシチェフはこれを「アンナ」(Анна)という名としているがその典拠は不明[Тагищев Т. П., 1995: С. 137]。

73) なお、『ラヴレンチイ年代記』6634年の並行記事には、逝去した日付が「6月11日」とある。『イパーチイ年代記』の諸写本はすべて「7月11日」となっており、どちらが正しいかは定めがたい。

74) 地震については、『ラヴレンチイ年代記』の6634年に並行記事があり、「8月1日の夜の第8時」(месяца августа въ 1 день и въ час 8 ночи)と異なる日付で時間までが書かれている。上注73の場合もそうだが、共通史料の編集・転写の過程でどちらかの写本系統で誤写が生じたことによると考えられるが、どちらが正しいかは定めがたい。

6636〔1128〕年

フセヴォロド・オリゴヴィチ〔C41〕<sup>75)</sup>が自分の父方の叔父のヤロスラフ〔C5〕をチェルニゴフで捕まえた。かれを襲撃して、かれの従士団を斬り殺し、〔財産を〕強奪したのである。ムスチスラフ〔D11〕はヤロポルク〔D15〕と軍兵を引き連れて、ヤロスラフ〔C5〕の味方をするためにフセヴォロド〔C41〕討伐の遠征を發した。

フセヴォロド〔C41〕はポロヴェツ人に援軍を要請する使者を遣り、ヤロスラフ〔C5〕をムーロムに追放した。セレルク(Селелукъ)<sup>76)</sup>に率いられた7000のポロヴェツ人が到来し、ヴィリ(Вырь)<sup>77)</sup>の先にあるラチミールの森に布陣して、フセヴォロド〔C41〕に宛てて使者たちを遣った。ところが、ロクナ川(на Локнь)<sup>78)</sup>沿いでヤロポルク〔D15〕の代官たちがこれを捕らえ、ヤロポルクのところに連行してきた。〔そこには〕ヤロポルク〔D15〕の代官がいたからである<sup>79)</sup>。〔そのために〕ポロヴェツ人は〔フセヴォロド〕・オリゴヴィチ〔C41〕から返事を受けることができず、引き返した<sup>80)</sup>。

ムスチスラフ〔D11〕はフセヴォロド〔C41〕を強く責めて、かれに〔使者を通じて〕こう言った。「そなたはポロヴェツ人を引き入れたが、何もうまくはいかなかったではないか」。フセヴォロドは〔C41〕はムスチスラフに懇願をし始めた。また、かれ〔ムスチスラフ〕の貴族たちにもひそかに働きかけ、かれらに献上品を与えて、かれらに頼み込んだ。夏中このような状態であり、冬になった<sup>81)</sup>。

すると、ヤロスラフ〔C5〕がムーロムからムスチスラフ〔D11〕のもとにやって来て、かれに拝

75) タティーシチェフによれば、当時フセヴォロド〔C41〕はトムタラカンの公で、1127年にそこから叔父のヤロスラフ〔C5〕が公として統治していたチェルニゴフに攻め上ったことになる。[Тагичев Т. П., 1995: С. 138-139]

76) このポロヴェツ人の首長の名は『ラヴレンチイ年代記』では「セルク」(Селукъ), 『ラヂヴィール年代記』では「オセルク」(Оселукъ)となっている。なお、この両写本にはこの他に「タシユ」(Ташь)という名の首長もいたことになっているが、『イパーチイ年代記』のテキストとの校合によれば、この人物名は編集、転写の過程での誤記に発している可能性が高い。

77) この「ヴィリ」(Вырь)はセイム川(Сейм)の支流のこと。[Насонов 2002: С. 202][Зайцев 2009: С. 140]。セイム川流域にあり、ポロヴェツの草原地帯へと続く道中に位置していたと考えられる。

78) ヴィル川の支流の川の名と考えられる。[Насонов 2002: С. 205]。[Зайцев 2009: С. 150-151]

79) この一帯は本来はチェルニゴフの領地だが、ベレヤスラヴリ公のヤロポルク〔D15〕の代官が派遣されていたということは、ヤロポルクによるチェルニゴフ領への勢力進出が進んでいたことを思わせる。そのことは、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事の追加部分の、ヤロポルクが甥の「イジャスラフ・ムスチスラヴィチ〔D112:I〕をセイム川沿いのクルスク(Курск)に代官として置いていた」という記述からも見て取れる。

80) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、ポロヴェツ人が引き返した理由として「不安にかられて逃げ帰った」(сотснувшеси с бѣгом возворотгишася)と、より侮蔑的な表現になっている。

81) 6636年の出来事は、この部分の暦法によれば、1127年の夏を指すことになる。

礼して、懇願して言った。「そなたはわしに対して十字架に接吻して誓ったではないか。フセヴォロド[C41]を討伐せよ」。他方、フセヴォロド[C41]は、よりいっそうの懇願を行った。

その当時の、聖アンデレ修道院の典院グリゴリーイ<sup>82)</sup>は、かつてウラジーミル[D1]に愛された人物で、ムスチスラフ[D11]からも、すべての家来たちからも尊敬されていた。この〔典院〕は、ヤロスラフ[C5]を援助するために討伐を行うことをムスチスラフ[D11]に許さず<sup>83)</sup>、こう言った。「そなたにとって、十字架接吻の誓いを破って討伐を行わないほうが、キリスト教徒の血を流すよりも〔罪が〕少ない」。そして、かれ〔典院〕は主だった聖職者たちを集めた。なぜならその時に府主教はいなかったからである<sup>84)</sup>。かれらは、ムスチスラフ[D11]に言った。「われら〔僧団〕にその罪を負わせるように<sup>85)</sup>」。こうして、ムスチスラフ[D1]は、かれら〔僧団〕の意志を実行して、ヤロスラフ[C5]への十字架の誓いから離反<sup>86)</sup>したのである。このことについては、かれ〔ムスチスラフ〕は毎日泣いて暮らすことになった。ヤロスラフ[C5]は再びムーロムへ引き返した。

同じ年、ムスチスラフ[D11]は自分の兄弟たちとともに、多くのクリヴィチ(кривичи)<sup>87)</sup>討伐の遠征を行った。これには4つの方面から進んだ。ヴァチェスラフ[D16]はトゥーロフから、

---

82) グリゴリーイは1115年にヴィシエゴロドにおける聖ボリスとグレーブの移葬儀礼にも参加しており、ルーシの聖職者の中では重要な地位を占めていたことがわかる。

83) 原文は тогъ бо не владыше Мьстиславу вьстати ратью по Ярославѣ. 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事は「かれはヤロスラフを援助する戦いについて口にするを誰にも許さず」(То же не дад্যাшетъ на рать по Ярославѣ никому же молвити)と、禁止がやや婉曲的な表現になっている。

84) 前年の記事にあるように前府主教ニキータは1126年に逝去しており(本稿注71参照)、1030年に新しい府主教ミハイルー一世がビザンティンから着任するまでキエフの府主教座は空位だった。

85) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「和平をなせ」(створи мирь)という句が加わっている。そのほうが分かりやすい。

86) このような場合に普通想定され、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事でも用いられている「違反する」(переступити)という表現ではなく、ここでは「離反する」(сьступити)という言葉を使って、ムスチスラフのヤロスラフへの誓約違反行為を婉曲に描写している。

87) クリヴィチ(кривичи)は『原初年代記』の冒頭部分で「ヴォルガの上流、ドヴィナのの上流およびドニエプル上流に住んでおり、かれらの城市はスモレンスクである」[ロシア原初年代記: 10頁]と記されている東スラブ族の部族名。ポロツクもその拠点城市のひとつであり、以下の記述にあるように、ここでは実際にはポロツク公領の諸公のことをこう呼んでいる。これは、1116年のモノマフ公によるポロツクのグレーブ[L5]討伐の記事で、モノマフ一族に属する領地を「ドレゴヴィチ人」(дреговичи)と呼んでいるのと同じ用語法である[イパーチイ年代記(1): 260頁(注86)]。

ルーシの古語では кривичи の語には「曲がっている」「不正である」というニュアンスもあり、ここでは一種の蔑称として用いられている可能性もある。『イパーチイ年代記』ではさらに、6648(1140)年(本稿注169参照)と6670(1162)年の記事で、「クリヴィチの諸公」(кривитьстьи князи)という表現でポロツク公領の諸公を呼んでいる。

アンドレイ [D18]はヴラジミルから、フセヴォロドコ [F11]はグロドノ(Городокъ)から<sup>88)</sup>、ヴァチェスラフ・ヤロスラヴィチ<sup>89)</sup> [B322]はクレチェスク(Клечьскъ)から派遣された。〔ムスチスラフは〕かれらに対して、イジャスラヴリ(Изяславль)<sup>90)</sup>へと進軍するようにと命じた。

他方、フセヴォロド・オリゴヴィチ[C41]に対しては、その兄弟たち<sup>91)</sup>とともに、ストレジェフ(Стрѣжевь)に向けて、ボリソフ(Борисовъ)へと進軍するよう命じた<sup>92)</sup>。また、イワン・ヴォイティシチ<sup>93)</sup>には、トルク人を率いさせて〔そこへ〕派遣した。

自身の息子ロスチスラフ [D116:J]には、スモレンスク人を率いさせて、ドルツク(Дрютьскъ)へ向けて派遣した。

〔ムスチスラフは〕かれらにこう言った。「日を決めて全員が一挙に突撃を行おう。8月11日<sup>94)</sup>としよう」。

88) 原文は Всеволод из Городка で (『ラヴレンチイ年代記』並行記事では Всеволодко из Городна) このフセヴォロドコ (もしくはフセヴォロド) 公 [F11] はダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] の息子にあたり、『イパーチイ年代記』1116年の項に、モノマフ公 [D1] が娘のアガフィアをかれに嫁がせたという記事が見える [イパーチイ年代記 (1) : 注 114 を参照]。Городок (Городен) はネマン川河岸に位置する現在のベラルーシの都市フロドナ(Гродна)のこと。リトアニア・ポーランドとの境界地帯に位置するこの城市は、イーゴリ・ヤロスラヴィチ [F] の息子フセヴォロド [F2] 以来この家系の「父の地」(相統領地)となっていた。フセヴォロド [F11] 公は、アガフィアと結婚した 1116~1117年にはすでにこの城市の公座に就いていたと思われる。[Назаренко 2009: C. 124, 127]

89) 伯叔父のブリャチスラフ [B33] がトゥーロフの公位にあったことから、その周辺付属城市であるクレチェスクに居城を構えていたのだろう。[Войтвиич 2006: C. 358]

90) イジャスラヴリ(Изяславль)はミンスク北西約 30km にある現在のザスラヴリ(Заславль)のこと。ウラジーミル聖公 [06] が息子イジャスラフ(Изяславль)[08] に与えたことから、その所有形容詞形が都市名になった。『ラヴレンチイ年代記』の 6636(1128)年の記事に、この城市の縁起譚として、ウラジーミル聖公とポロツクの公女ログネダの婚姻をめぐる物語が再説されているが、『イパーチイ年代記』にはそれはない。

91) 当時現役のフセヴォロドの「兄弟」としては、イーゴリ [C42]、グレーブ [C44]、スヴァトスラフ [C43]、イワン [C45] をあげることができる。記録はないが、かれらはチェルニゴフ公領内の小城市(ノヴゴロド・セヴェルスキイ、プチャーヴリなど)の公座に就いていたはずであり、このうち何人かが兄フセヴォロドとともに遠征に同行したと考えられる。

92) ストレジェフはポロツク東南約 50km に位置し、付属城市として城砦を構えていたと考えられる。ボリソフはその南方 110km のベレジナ(Березина)河岸にあり、チェルニゴフからドニエプル川を使ってポロツクに向かって攻め上るときには中間地点にあたる。このフセヴォロド [C41] とその兄弟たち及び、キエフの軍司令官イワンとトルク人の部隊は首都ポロツクにより近い地点の攻略を目指した別働隊になるが、かれらのその後の動きについては年代記には記録がない。そのことから、城市(ボリソフ、ストレジェフ)攻略に失敗したか、引き返した可能性がある。

93) イワン・ヴォイティシチ(Иван Войтишич)はキエフの貴族で当時はムスチスラフ [D11] に仕える軍司令官。『イパーチイ年代記』1116年の記事 ([イパーチイ年代記 (1) : 注 101]) を参照。

94) 1127年8月11日のこと。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では8月4日、『ラヂヴィール年代記』では8月14日となっているが、文字表記されている『イパーチイ年代記』の日付が事実に近いと考えられる。[Бережков, 1963: C.133-134]

ところが、イジャスラフ[D112:I]<sup>95)</sup>は兄弟たちよりも一日早く行動を起こして、〔ロゴジスクの〕城市から人々を捕まえた。かれらは恐ろしくなって降伏した。

他方、イジャスラヴリの城市の人々は、ヴァチェスラフ[D16]、アンドレイ[D18]と戦闘を始めた。イジャスラフ[D112:I]はロゴジスク(Логожъск)〔の城市〕で二日のあいだぐずぐずしてから、父方の叔父<sup>96)</sup>のところに向かった。〔このときに〕自分の姉妹の夫<sup>97)</sup>であるブリャチスラフ[L41]<sup>98)</sup>を連行していた。〔なぜなら、〕かれ〔ブリャチスラフ〕は自分の父〔ポロツク公のダヴィド[L4]〕のもとへと出発したのだが、道中の半ばで怖くなって、進むことも、戻ることもできなくなってしまい、そのため、かれは妻の兄弟<sup>99)</sup>〔イジャスラフ[D112:I]〕のところへ投降したのだった。また、〔イジャスラフは〕自分がロゴジスクの城市から〔捕虜として獲った〕ロゴジスクの住民をも連れていた。

さて、イジャスラヴリの住民は、自分の公〔ブリャチスラフ[L41]〕とロゴジスクの住民たちが、害されることなく捕虜となっていることを見て、ヴァチェスラフ[D16]に対して、「われわれを捕虜として獲らない<sup>100)</sup>ことを、神の名を呼んで〔誓って〕ください」と言って降伏した。

夕方になった。アンドレイ[D18]の千人長ヴォロチスラフ(Воротиславъ)とヴァチェスラフ[D16]〔の千人長〕イヴァンコ(Иванко)は配下の下級従士たちを、城市内へと〔使者と称して〕派遣した。夜が明けると、軍兵がみな夜のあいだに〔城市を〕占領し掠奪したことを知ったの

---

95) キエフ大公ムスチスラフ[D11]の息子イジャスラフ[D112:I]の名が突然出てくるが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「また息子のイジャスラフをクルスク(Курскъ)から〔遣った〕。自分の軍勢をつけ、ロゴジスクを攻めるために遣ったのである」とムスチスラフがかれを遠征に派遣したことが記されている。このイジャスラフについては、先の1128年の記事でも、その名とクルスクの公であったことが書かれておらず(本稿注97を参照)、『イパーチイ年代記』の記事編者にとって、かれを忌避するなんらかの理由があったことが想定される。

96) ここでは「父方の伯叔父」が、к строеви своемуと単数になっているが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では双数になっている。実際には、ヴァチェスラフ[D16]とアンドレイ[D18]の二人を指すのだろう。

97) 原語はзять свойで、これはロシア古語では「娘の夫」と「姉妹の夫」の両方を指すことができるが、ここでは後者の意味である。以下のイジャスラヴリにある「ムスチスラフの娘の財産」についての記述からもわかるように、当時、ムスチスラフ[D11]の娘がブリャチスラフ[L41]に嫁いでおり妃であったことは確かである。

98) ブリャチスラフ[L41]は、当時イジャスラヴリの公。ムスチスラフによる四方面からの襲撃に恐れをなして居城を放棄し、父ダヴィド[L4]のいるポロツクに逃げのびようとしていた途上のロゴジスクで、この城砦を攻めていたイジャスラフ[D112:I](かれの自分の義理の兄弟にあたる)に投降して、イジャスラヴリに連れ戻されたのである。

99) 原語はшюрин。ここで親族用語を用いて「イジャスラフ」[D112:I]の名を記さないのは、年代記記者の立場の反映と理解できる。本稿注93参照。

100) 原文は「われわれを盾に与える」(нас не даси на щить)という表現で、これは戦いの勝利者が、掠奪した捕虜や戦利品を自由にすることを指している。



だった。こうして、ムスチスラフ [D11] の娘の財産を守ることは辛うじてできたが、それも実力で互いに戦って〔守った〕からだった。こうして、多くの捕虜を獲って帰還した。

その後、ノヴゴロド人がフセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] に率いられてネクロチ (Нѣкlochъ) の城市にやって来た<sup>101)</sup>。ポロツクの住民は不安にかられ<sup>102)</sup>てダヴィド [L4] とその息子たち<sup>103)</sup>を〔城市から〕追放し、ログヴォロド [L1] を連れて、ムスチスラフ [D11] のところにやって来ると<sup>104)</sup>、かれ〔ログヴォロド〕を公にしたいと請願した。ムスチスラフ [D11] はかれらの意志をかなえて、ログヴォロド [L1] を受け入れ、ポロツクに連れて行かせた。

その年、イジャスラフ・スヴァトポルコヴィチ<sup>105)</sup> [B34] が逝去した。12月13日だった。24日に埋葬された<sup>106)</sup>。

---

101) ネクロチはポロツクの北東約 50km にある附属城市で、ポロツク公領とノヴゴロド地方との境界に位置している。ノヴゴロド公フセヴォロド [D111] がノヴゴロド兵を率いて附属都市まで迫り、公領の首都であるポロツクを攻撃する構えを見せたために、イジャスラフ [D112;I] に釈放されてポロツクの父のもとに身を寄せていたブリャチスラフ [L41] ひとりを目指すのだろう。

102) 原語の сътъснутиси は「不安・不満な気持ちを抱くこと」。

103) 「息子たち」と複数形になっているが、ここでは、イジャスラフ [D112;I] に釈放されてポロツクの父のもとに身を寄せていたブリャチスラフ [L41] ひとりを目指すのだろう。

104) アレクセーエフによると、ログヴォロド [L1] は、当時ドゥルツク (Друцк) の公であった [Алексеев 1966: С. 261]。相当な高齢であったはずであり、ポロツクの公座に就けられたのは名目的な措置か、ムスチスラフの指示によったものだろう。追放されたダヴィド [L4] とブリャチスラフ [L41] は、入れ替わりにドゥルツクに移動したか。

105) ヴォイトヴィチによれば、1127年4月に没した兄弟のブリャチスラフ [B33][Никоновская летопись: С. 154] の跡を継いでトゥーロフ (Туров) の公であったと推定される [Войтвиц 2006: С. 358]。

106) 上注のブリャチスラフ公 [B33] と同様に、かれもキエフで埋葬された可能性が高い [Войтвиц 2006: С. 358]。『ラヂヴィール年代記』の並行記事は、逝去の日付が12月23日 (1127年) になっており、逝去と埋葬式の日付が離れすぎていることから、ベレシコフは、逝去23日、埋葬式24日としているが [Бережков, 1963: С. 134]、キエフへ遺体を運んだとするならこの時間差は説明が可能である。

6637 [1129] 年

ポロツクの公ボリスが逝去した<sup>107)</sup>。

その年、洪水があり、人々と穀物を水没させ、家屋を流し去った<sup>108)</sup>。

この年、ムスチスラフ[D11]は聖テオドロス(Федор)の石造りの教会堂を定礎した<sup>109)</sup>。キエフにおいて。かれはウラジーミル[D1]の息子である。

6638 [1130] 年

ロストフの千人長ユーリイ(・シモノヴィチ)(Георгий Шимонович)が<sup>110)</sup>、洞窟修道院典院フオドーシイ<sup>111)</sup>の棺を〔貴金属で〕覆った。

その年、ヴァチェスラフ[D16]の息子ミハイル[D161]が逝去した。ウラジーミル[D1]の孫で

---

107) 突然死亡記事があらわれたこの「ポロツク公ボリス」が、誰であるかについては、研究者の間でも意見が分かれている。総じて、カラムジン、ソロヴィヨフなどの19世紀の歴史家は、この記事をそのまま採用して、「ボリス」という公がログヴォロド[L1]とともに(あるいはその死後に)、短期間ポロツクの公になっていたとする。しかし、現代の歴史家の多くが支持する定説では、17世紀に編まれた『グスティンスク年代記』(Густынская летопись)の並行記事が「ポロツク公のログヴォロド、あるいはボリス」(князь Полоцкий Рогволодъ, или Борисъ)とあることを主な論拠として、これは前年にポロツク市民の手でポロツク公に就位したログヴォロド[L1]のことであり、「ボリス」は洗礼名もしくは誤記としている。ただし、リトヴィナとウスベンスキイは、「ボリス」の名はフセスラーフ一族にとって伝統的な名であり、その名をもつ公がいたことはまったく自然であるとして、年代記をそのまま読むことを主張している。[Литвина, Успенский 2006: С. 594 - 595][スズダリ年代記訳注[I]: 31頁, 注釈94]。

しかしながら、『グスティンスク年代記』記事による論拠の他に、①記事の流れからみて、ポロツク公という重要な人物の名が突然あらわれるのは不自然であること。②次の年(6638 [1130]年)のポロツク諸公のコンスタンティノボリス追放事件の際には、ログヴォロド[L1]はすでに世を去っていたことが強く推定されること(本稿注112参照)。③上の注に述べたように、この時点でログヴォロドは相当に高齢だったこと、などを考えあわせると、やはり現在の定説の確実性が高いと思われる。

108) 『ノヴゴロド第一年代記(古輯)』6636 [1128]年の項に「この年ヴォルホフ川で大水があった。多くの家屋が流された」(вода бысть велика въ волховѣ, и хоромъ много разьноси)[ノヴゴロド第一年代記[I]: 41頁]とある。これは、本文の бысть вода велика потопаи люди и жито и хоромъ внесе と類似点が多いことから、本記事はキエフのことではなく、ノヴゴロドでの出来事である可能性が高い。

109) ムスチスラフ[D11]の守護聖人である、ティロン(もしくは軍司令官)の聖テオドロス(Св. Феодор Тирон или Стратилат)[Литвина, Успенский 2006: С. 581]に奉献された修道院の聖堂で、いわばムスチスラーフ一族の「菩提寺」であった。1133年にはムスチスラフ自身が、1154年には息子のイジャスラフ[D112:I]がここに埋葬されている。

110) ユーリイは、フセヴォロド[D]の軍司令官をつとめたこともある古参の貴族。父親のシモンはヴァリャグ人の出自を持つという。当時は、ロストフの公であったユーリイ[D17]のもとで、軍事の最高司令官である千人長として仕えていた。

111) キエフ洞窟修道院の礎石を築いた修士で、1032年頃洞窟修道院に入り、初代典院アントニイの後継として、1057年以降典院をつとめた。ストゥディオス修道院の規則をルーシに導入し、修道院の制度の運営に努力するとともに、諸公の内紛の仲介者の役割も果たした。1074年に没し、遺骸は洞窟修道院に安置された。『原初年代記』1074年の項に修士たちの生活とかれの臨終の物語が記されている。

ある。7月25日だった。

その年、ムスチスラフ[D11]は、ポロツクの諸公を、妻たち、子供たちとともにギリシア人のもとに流刑に処した。かれらは十字架接吻に違反したのである<sup>112)</sup>。

その年、ヤロスラフ・スヴァトスラヴィチ[C5]がムーロムで逝去した。

#### 6639〔1131〕年

ムスチスラフ[D11]は自分の息子たちをチュヂ人を討伐するため派遣した。フセヴォロド[D111]、イジャスラフ[D112:I]、ロスチスラフ[D116:J]である。そして、かれらから奪い、かれらに貢税を課した<sup>113)</sup>。

その年、府主教ミハイルがやって来た<sup>114)</sup>。

その年、大地が揺れた。7月24日の昼の第3時だった。

---

112) この、ムスチスラフ大公が、ポロツク諸公を帝都（コンスタンティノポリス）に流刑に処した事件は重要であるにもかかわらず記事は短い。『イバーチイ年代記』6648〔1140〕年の項に、流刑された諸公のうち、ログヴォロド[L1]の2人の息子（ヴァシリコ[L11]とイワン[L12]）がコンスタンティノポリスから帰郷した記事があり、そこに、およその経緯が書かれている。それによると、ムスチスラフ大公が対ポロヴェツ遠征を行った際、ポロツク諸公はその参加要請を拒否したばかりか、ポロヴェツ側を助けた。激怒した大公は、ポロヴェツを撃退したあとに、ポロツク諸公である、ダヴィド[L4]、ロスチスラフ[L6]、スヴァトスラフ[L2]、ヴァシリコ[L11]、イワン[L12]とその一族を捕らえるために、家臣を派遣し、3隻の船に乗せてコンスタンティノポリスへと流刑に処したとしている。当該の記事と本稿の注169～173を参照。

ここでいう、「十字架接吻の違反」とは、1127～1128年のムスチスラフ一族によるポロツクの地討伐遠征によって、ポロツク公（ログヴォロド[L1]）をはじめとしてこの地の諸公は、キエフ大公の意志に従うことを十字架接吻によって誓約したにもかかわらず、ポロヴェツ討伐を拒否したことを指している。

113) 『ラヴレンチイ年代記』では6638〔1130〕年に並行記事があり「〔自らの〕従士団とともに」という追加部分がある。また、『ノヴゴロド第一年代記』のやはり6638〔1130〕年の類似記事では「フセヴォロドがノヴゴロドの人々とともに、冬の大齋期にチュヂ人を攻めた。かれらを斬り殺し、一方、家々を焼き、また女子供を連れ来たった」と、遠征したのはノヴゴロド公のフセヴォロド[D111]だけになっており、また大齋期（1130年2月10日～3月29日、但し6638年なので3月1日以降の可能性が高い）と時期が示されている。

114) 1126年5月に没したニキータの跡を襲って、1130年夏頃にコンスタンティノポリスよりキエフに赴任したギリシア人府主教。通常「ミハイル二世」と称される。1130年代後半のモノマフ一族とオレーグ一族の間のキエフ大公位をめぐる争いに積極的に介入したことで知られる。1145年にコンスタンティノポリスに帰省したまま戻らず、同年そこで没した。

その年、ヤンカの修道院の聖アンデレ教会が献堂された<sup>115)</sup>。

6640 [1132] 年

ムスチスラフ[D11]がリトアニア人を討伐するため、自分の息子たちと、オレーグ[C4]の息子たちと、グロドノ(Городеньский)のフセヴォロドコ(Всеволод)[F11]とともに、遠征を行った。そして、かれら〔リトアニア人〕に火をかけた。〔リトアニア人は〕自らいたる所に身を隠してのがれた<sup>116)</sup>。そのとき、多くのキエフ人がリトアニア人に打ち殺された。かれら〔キエフ人〕は、公〔ムスチスラフ[D11]〕と一緒に来るのは間に合わずに、あとからかれを追って、別に来たからである<sup>117)</sup>。

---

115) アンデレ修道院の教会は1086年にフセヴォロド・ヤロスラヴィチ[D]がキエフに定礎したもので、かれの娘で、ムスチスラフ[D11]にとっては伯母にあたるヤンカが典院をつとめていたことから、「ヤンカの修道院」とも通称されていた。定礎から献堂の間が長すぎるのが不思議である。通常、献堂式(освящение)は当該の聖人・祭日の祝祭日に行なわれる慣例に基づけば、これは使徒アンデレの祭日11月30日(1130年)の出来事ということになる。

なお、『ラヴレンチイ年代記』には同様の記事がないことから、モノマフ＝ムスチスラフ一族についての独自資料を使って書かれたと推察される。

116) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事(6639 [1131]年)は「ムスチスラフがリトアニア人を攻めた。そして多くの捕虜を獲って凱旋した」と非常に簡潔である。

これに対して、タティーシチェフは、1130年にムスチスラフはリトアニア遠征を行い「多くの捕虜を獲ってノヴゴロドへ帰還した」としており、さらに6639 [1131]年に「第二の」リトアニア遠征を行ったとしている。そこでは、「リトアニア人は、集合して反撃しようとはせずに、自分たちの家々に火をかけ、家畜ともに森に逃げ込んだ」とやや詳しく叙述している。[Тагищев Т. П., 1995: С. 143]

117) タティーシチェフによれば、「軍司令官たちはリトアニア人を危険とみなさず、警戒せずに進んだ。リトアニア人は分散して進んでいる軍勢を見ると、森から飛び出て、多くの無警戒な兵たちを撃ち殺し、輜重の荷車を何台か奪った」と類似の状況ではあるが、異なった事実を描いている。[Тагищев Т. П., 1995: С. 143]。

その年、ピロゴシチャ (Пирогоща) と呼ばれる、石造りの聖なる聖母の教会が定礎された<sup>118)</sup>。  
その年、ムスチスラフ [D11] に息子が生まれ、ウラジーミル [D115] と名付けた<sup>119)</sup>。

ヤロボルク [D15] のキエフでの公支配のはじまり

6641 [1133] 年

ウラジーミル [D1] の息子で篤信の公ムスチスラフ [D11] が逝去した。公位は自分の兄弟ヤロボルク [D15] に遺し、自らの子供たちも神とともに、かれの手に委ねた。ムスチスラフ [D11]

---

118) 『ラヴレンチイ年代記』『ラヂヴィール年代記』の並行記事 (6639 [1131] 年) では、「ムスチスラフがピロゴシチャの神聖なる聖母の教会を定礎した」として、ムスチスラフ大公 [D11] の事業であることが示されているが、石造りであることは書かれていない。

「ピロゴシチャ」(Пирогоща) の名については、6663 [1154] 年の記事 (同じ内容の『ラヴレンチイ年代記』の並行記事は 6664 [1155] 年 [スズダリ年代記訳注 [III]:32 頁]) に、アンドレイ敬神公 [D173] がヴィシエゴロドの父ユーライ [D17] の元からスズダリに行くときに、「聖なる聖母のイコン [現存する「ウラジーミルの聖母」のこと] を奪っていった。このイコンは、ピロゴシチャとともに (с Пирогощю), 帝都 [コンスタンティノポリス] から同じ船で持参されたものである…」として、イコンの名 (通称) として言及されている。そのことから、この聖堂はこの名で呼ばれたなんらかの聖母イコンに奉獻されたものであることは確かであろう。『イパーチイ年代記』には 6644 [1136] 年の項に、この「ピロゴシチャの教会が完成した」という短い記事があり、この建築には 4 年かかったことになる。

「ピロゴシチャ」はまた、『イーゴリ軍記』の末尾に、捕虜の身からルーシの地に帰還したイーゴリ公が訪問した教会として言及されていることから、研究者の関心を集めてきた。たとえば、D・リハチョフ [Лихачев 1985: 270-287] は、美術史家コンダーコフ等の見解 [Кондаков 1998: С. 72] を発展させて、1129 年にポロツク諸公をコンスタンティノポリスに追放に処したときに同行したムスチスラフ大公の家臣が、その地のヴラケルナイ修道院に所蔵されていた型の異なる二枚の聖母イコンをキエフに持参した (1130 ~ 1131 年) という推論を行っている。さらに、ムスチスラフによる 1131 年のチュヂ遠征、1132 年のリトアニア遠征の勝利は、聖母の助力を得たことによるものとして、そのうち一枚の聖母イコンに献じた教会を 1132 年にキエフに定礎させた、そしてそのイコンは、オディギトリア型の聖母が城塔 (ギリシア語で「ピルゴス」(πύργος)) に囲まれて描かれていたと考えられ、その図像的特徴から Пирогощя と通称され、それが聖堂の通称にもなった、という推定を行っている。

聖堂の所在地については、不明な点もあるが、ほぼ、現在のキエフのアンドレイ坂を下ったところの下町 (Подол) にあったと同定されており [Каргер 1961: С. 438-439]、現在は観光地として、キエフ・ルーシ様式の聖堂が〈再建〉されている。

119) 最初の妻でスウェーデン王女クリスチナの死の直後、6630 [1122] 年に、ムスチスラフはノヴゴロド市長官ドミートリイの娘と再婚しており、このウラジーミル [D115] は彼女との間にできた唯一の息子である。公族の慣習では、祖父が活着しているときにその名を息子につけることはないが [Литвина, Успенский 2006: С. 30]、1125 年のモノマフ公 [D1] の逝去の後のことなので、いわばとっておきの名を命名したということになろうか。

が逝去したのは4月15日であり、〔復活〕祭の週の金曜日であった<sup>120)</sup>。遺体は、かれ自身が創建した聖テオドロスの教会に埋葬された<sup>121)</sup>。ヤロポルク[D15]は〔4月〕17日の日曜日にキエフに入城した<sup>122)</sup>。

その年、ヤロポルク[D15]は、フセヴォロド・ムスチスラヴィチ[D111]をノヴゴロドから連れてきて、かれにペレヤスラヴリを与えた<sup>123)</sup>。かれ〔フセヴォロド[D111]〕は朝から〔ペレヤスラヴリの〕公座に就いたが、昼の食事のときまでに、かれの父方の叔父ユーリイ[D17]がかれを追放した<sup>124)</sup>。

そして、〔ユーリイ[D17]〕は8日間公座に就いていたが、かれの兄弟ヤロポルク[D15]がかれ〔ユーリイ[D17]〕を、十字架接吻の誓いに則ってペレヤスラヴリから追いだした。ヤロポルク[D15]はムスチスラフ[D1]の別の息子であるイジャスラフ[D112:I]を迎えにポロツクに使

---

120) 復活祭の週、すなわち光明週間(Светлая седмица)の金曜日が4月15日にあたるのは1132年であり、ムスチスラフはこの年の4月15日に没したことになる。『ラヴレンチイ年代記』及び『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事はムスチスラフの死について簡潔に書かれており、さらに6640年4月14日と日付が一日異っている。

121) テオドロス教会については1129年の注109を参照。

122) ムスチスラフが没したとき、ヤロポルク[D15]はペレヤスラヴリの公であったため公座を移るのにさほど時間はかからなかったと思われる。『ラヴレンチイ年代記』では「キエフの人々がかれを迎えに使者を送ったのである」と公座就位の主導権を住民に持たせて書いている。

123) 『ラヴレンチイ年代記』並行記事6640〔1132〕年ではここまでは同じ内容だが、ここから「〔フセヴォロド[D111]にペレヤスラヴリを与えたのは〕十字架接吻の宣誓に従ったものである。これは、ムスチスラフ[D11]とかれ(ヤロポルク[D15])の二人にペレヤスラヴリを与えるという父〔モノマフ公[D1]〕の命令に従って、兄のムスチスラフ[D11]と〔相談して〕そのように決めていたのである」と追加の記述がある。これによって、なぜ、短期間にヤロポルク[D15]のキエフの公座就位が実現し、なぜ、その後すぐにかれは自らの旧領地ペレヤスラヴリをフセヴォロド[D111]に譲渡したかが理解できる。すなわち、モノマフ[D1]は「キエフとペレヤスラヴリはムスチスラフとヤロポルクの一族にとって〈父の地〉である」という〈遺言〉を遺したと考えられ、ムスチスラフ[D11]とヤロポルク[D15]はその遵守を十字架接吻ですでに誓い合っていた。ヤロポルクはこれに則って、ムスチスラフの息子たちの抵抗を受けずにすんなりとキエフ大公位に就き、その後すぐに、ムスチスラフの長男であるフセヴォロドに父の地としてのペレヤスラヴリを移譲したのである。

124) このユーリイ[D17]の行為は、前注で想定したモノマフの〈遺言〉への異議申し立てと理解できる。すなわち、ユーリイにとって兄ヤロポルクのキエフ大公就位は年長制の原則から認められても、ペレヤスラヴリはフセヴォロド[D111]よりも年長である自分に当然与えられるべきものと考えたのだろう。キエフとペレヤスラヴリをムスチスラフとヤロポルク一族の〈父の地〉とする二人の間の「誓約」など、ロストフ＝スーズダリの遠方の地にいたかれにとって与り知らなかったことに違いない。

者を遣り、連れてきて、宣誓させて〔ペレヤスラヴリの公座に就かせた〕<sup>125)</sup>。

6642〔1134〕年<sup>126)</sup>

イジャスラフ・グレーボヴィチが逝去した。5月14日だった<sup>127)</sup>。

この年、ディオニシイによって、主の墓の棺の板の欠片がもたらされた。ミロスラフ (Мирославъ) がかれを派遣したのである<sup>128)</sup>。

この年、ペレヤスラヴリの主教マルク (Марко) が逝去した<sup>129)</sup>。

この年の冬、ヴァチェスラフ [D16] がペレヤスラヴリを失った。かれは、自分の兄弟のヤロポルク [D15] の言うことを聞かず、再びトゥーロフに行った<sup>130)</sup>。

---

125) 『イパーチイ年代記』には書かれていないが、『ラヴレンチイ年代記』6640(1132)年の記事によれば、イジャスラフ [D112:I] は聖母就寝祭 (1132年8月15日) にポロツクからペレヤスラヴリに到着し、ポロツクの公座には弟のスヴァトポルク [D114] を据えた。ところが、ポロツクの住民はこの新しい公を追放し、「ヴァシルコ」という公を公座に就けた。このポロツクの騒乱を知ったキエフ大公ヤロスラフ [D15] は方針を転換し、兄弟たちとの合意の上で、イジャスラフ [D112:I] をポロツク地方にもどし、ペレヤスラヴリの公座にはヴァチェスラフ [D16] を据える。しかし、イジャスラフ [D112:I] はポロツクの公座には戻れず、それ以外の旧領だったミンスク、トゥーロフ、ピンスクに戻った。ヤロスラフ [D15] は、その代償であろうか、翌年、イジャスラフ [D112:I] にノヴゴロド地方への徴税遠征を許可している。

126) ベレシコフによれば、『イパーチイ年代記』の記事は、663年から6640年と6641年のムスチスラフ大公死亡記事は「超三月式」の暦法で記されており、6642年からは通常の「三月暦」に戻るといふ。[Бережков 1963: C. 50]

127) 死亡記事が短すぎるため、イジャスラフ・グレーボヴィチ (Изяславъ Глѣбовичъ) が誰であるかについては、当時チェルニゴフの地のいずれかの城市 (クルスク?) の公だったグレーブ・オリゴヴィチ [C44] の息子とする説と、ミンスク公であったグレーブ・フセスラヴィチ [L5] (1119年没) の息子とする説の二つの可能性がある。ゴランニは前者の説をとり [Goranin 1995: 24. n. 124]、ヴォイトヴィチは両説を記載している [Войтович 2006: C. 288, 402]。

128) ミロスラフ (Мирославъ) は、当時プスコフの市長官 (посадник)。1126年からノヴゴロド市長官をつとめており、聖地エルサレムへのディオニシイ派遣は、この頃のことと思われる。『ノヴゴロド第一年代記』の6640〔1132〕年の記事に、かれのプスコフ市長官任命についての記事があるが、同年のフセヴォロド公のノヴゴロド「追放」に連座して、プスコフに職を移されたもので、2年後にはノヴゴロド市長官職に復帰し、翌1135年に没している [СЭ-1: C. 721]。ディオニシイは、おそらくノヴゴロドの高位聖職者で市長官の命を受けた聖地巡礼から帰国したものだが、これについての記録は他にはない。

129) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事 (6642年) では、主教マルクの死去の日付を1月6日としている。これは三月暦では、1135年の1月6日になる。『ラヴレンチイ年代記』の6634〔1126年〕の記事では、ペレヤスラヴリの聖ヨハネ修道院の典院だったマルクは、この年、ペレヤスラヴリ公ヤロポルク [D15] によって、ペレヤスラヴリの主教に任命され、同年10月4日には府主教ニキータによって叙任されている。

130) 『ラヴレンチイ年代記』には、同じ1134年の項にほぼ同じ並行記事がある。ただ、こちらは「ヴァチェスラフはペレヤスラヴリを出た」と自主的な行動のように記しているが、『イパーチイ年代記』では「ペレヤスラヴリを失った」と不本意な書き方をしている。

6643 [1135] 年

ユーリイ [D17] は自分の兄弟ヤロボルク [D15] にペレヤ斯拉ヴリを要求した<sup>131)</sup>。そして〔ユーリイは〕ヤロボルク [D15] にスーズダリおよびロストフ、さらに別に自分の領地を与えたが、すべてではなかった<sup>132)</sup>。

そのためにオレーグ [C4] の息子たちが戦いを仕掛けてきた。ヤロボルク [D15] は自分の兄弟ユーリイ [D17] とアンドレイ [D18] とともに、フセヴォロド・オリゴヴィチ [C41] 討伐の軍を起こし、城市チェルニゴフ周辺の村落を掠奪した。フセヴォロド [C41] は対抗して戦うために城市〔チェルニゴフ〕から出てくることはなかった。ポロヴェツ人はまだ、かれのところ〔援軍として〕来ていなかったからである。ヤロボルク [D15] は数日間チェルニゴフの城下に陣取ってから、キエフに帰還して、兵を解散した。フセヴォロド [C41] とはいかなるかたちでも話を付けることはなく、和議を結ぶこともなかった。

さて、ポエヴェツ人がフセヴォロド [C41] のところにやってくると、フセヴォロド [C41] は自分の兄弟たち及び、ムスチスラフ [D11] の二人の息子イジャスラフ [D112:I] とスヴァトボルク [D114] とともに軍を進め、ペレヤ斯拉ヴリの領地の村々と諸城砦を攻め取り、人々を斬り殺した。そして、キエフ近くまで迫ると、聖アンドレの日にゴロデツ (Гордец) を焼いた<sup>133)</sup>。かれらはドニエプル川の彼岸<sup>134)</sup> を巡って、人々を捕虜に獲り、斬り殺した。〔斬り殺したのは〕重すぎて川を渡せなかったのであり、氷の上を渡すことができなかったからである。獲った家畜が数え切れないほど沢山いたからである。

ヤロボルク [D15] もまた自分の軍隊と共に氷上を渡ることができなかった。かれら〔オレーグの息子たち〕は3日間ゴロデツの向こうの松林に陣を張ってから、チェルニゴフに向けて軍を進めた。そして、そこから、互いに軍使を出して、和議を結んだ。

オレーグ [C4] の息子たちは再び要求をしてこう言った。「そなたたちの父〔モノマフ [D1]〕の時代にわれらの父〔オレーグ [C4]〕が所有していたものを、われらは欲しているのである。

---

131) 1134 年の初めにペレヤ斯拉ヴリ公だったヴァチェスラフ [D16] がトゥーロフに退去したため、公座が空になったペレヤ斯拉ヴリを、この年の3月頃に再度要求したと考えられる。

132) 明確には書かれていないが、この時点でユーリイ [D17] は、兄のヤロボルク [D15] に自領地のスーズダリ、ロストフなどを引き渡すことと引き換えに、ペレヤ斯拉ヴリの公座に就いたと考えられる。

133) 普通名詞としては「城砦」を意味するこの「ゴロデツ」 (Гордец) は、キエフの対岸 (ドニエプル左岸) で中心地から北北東 15km ほどに位置する場所にあった砦で、現在はキエフ市域内のヴィフリフシチナ・トロイエシチナ (Вигурівщина-Троєщина) 区に属している。

『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではやや詳しく「そしてゴロドク〔ゴロデツ〕とネジャチン (Нѣжати́нь) を占領し、村を焼き払い、またバルチ (Баручь) を焼いた」とある。ネジャチン (Неятин) とはキエフの南西約 90km に位置し、バルチはペレヤ斯拉ヴリ領内の城市でキエフからは南東約 50km に位置している。

134) この「彼岸」はキエフの側から見ているので対岸、すなわちドニエプル左岸になる。



もし〔われらに〕与えなければ、これから起こるだろうことを後悔することになるだろう。それは、そなたたちのせいであり、そなたたちに流血〔の罰〕があるだろう」。

やはり、あらゆる事が起こったのだった。すなわち、ユーリイ [D17]がフセヴォロド [D111]をペレヤスラヴリから追放し、その後ヴァチエスラフ [D16]がイジャスラフ [D112:I]を追放し<sup>135)</sup>、その後そのヴァチエスラフがまたイジャスラフ [D112:I]をトゥーロフから追放した<sup>136)</sup>。そして、かれらはオレーグの息子たちを攻撃した。こうして、そこにおいて双方の間には諍いが、大いなる悪が起こった。オレーグの息子たちは「そなたたちは、われらより先に滅びの道に入ったのだ」との言葉とともに、軍を進めたのだった。

その年の冬、〔ヤロポルク [D15]は〕キエフの軍を結集し、ユーリイ [D17]はペレヤスラヴリ人を〔結集した〕。50<sup>137)</sup>日間、キエフの城下で〔敵軍が〕布陣した。ヤロポルク [D15]はフセヴォロド [C41]と和を結んだ。そして、〔ヤロポルク [D15]は〕自分の兄弟のアンドレイ [D18]にペレヤスラヴリを与え、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I]にはヴラジミルを与えた<sup>138)</sup>。

6644〔1136〕年

ヤロポルク [D15]は自分の兄弟アンドレイ [D18]をヴラジミルから連れてきて、かれにペレヤスラヴリを与えた。また、自分の甥であるイジャスラフ [D112:I]にはヴラジミルを与えた<sup>139)</sup>。

その年、フセヴォロド [C41]は自分の兄弟たちとともにペレヤスラヴリに向けて軍を進めた。3日間、〔ペレヤスラヴリ〕城下に布陣して、〈主教門〉と〈公門〉において戦闘を行った。か

135) 『ラヴレンチイ年代記』に書かれている、1132年末～1133年に行われた、ヤロポルク [D15]の命令による、イジャスラフ [D112:I]からヴァチエスラフ [D16]へのペレヤスラヴリの公位交替を指している。

136) ヴァチエスラフ [D16]によってペレヤスラヴリを追われたイジャスラフ [D112:I]は、ミンスク、ピンスクの他にヴァチエスラフ [D16]の旧領トゥーロフを得たが、1134年末～1135年にヴァチエスラフ [D16]がペレヤスラヴリを去ってトゥーロフに移ったため、玉突きのようにしてトゥーロフを失うことになる。

137) 50の数はイパーチイ写本によるが、フレーブニコフ写本は20、ボゴージン写本は30とそれぞれ異なっている。また、この段落のフセヴォロドによるキエフ包囲と和議の物語は『ラヴレンチイ年代記』にほとんど同じ記事があるが、そこでは8日となっている。

138) 「その年の冬…」からここまでの段落はこれまでの事件のまとめであり、1134年の冬（12月頃）のキエフ城下でのヤロポルク＝ユーリイ軍とオレーグの息子たちの対峙、その後の和議、和議後の新秩序を要約して述べている。

139) この段落が、前年の記事の最後の部分とダブっているのは、この年から資料となる年代記記録の記者が交替したことによる可能性が高い。12世紀末の『キエフ年代記』最終編者（モイセイ）はこのダブりを見落としたのだろう。

れらは、ヤロポルク[D15]が進軍していることを知り、スーポイ川を上流へと遡って、そこで部隊を整えて〔敵の〕到来を待った。たちまち、ヤロポルク[D15]は自分の従士および兄弟たちをともなって来たが、自分たちの兵を待たず、軍備を調えることなしに、戦闘に突入した。われらの軍勢に対抗してオレーグ[C4]の息子たちが布陣しているとは考えていなかったのである。

こうして、両軍は会戦した。激しく戦ったが、まもなくオレーグ[C4]の息子たちの〔味方の〕ポロヴェツ人が逃げ出した。ウラジーミル[D1]の息子たちの従士団の精鋭部隊がかれらを追走し、ウラジーミル[D1]の息子たち諸公は、オレーグ[C4]の息子たちと戦った。

その時に、レオン皇子の子ワシリコ<sup>140)</sup>が戦死した。激しい戦闘であり、両軍から多数が斃れた。ヤロポルク[D15]、ヴァチェスラフ[D16]、ユーレイ[D17]、アンドレイ[D18]の兄弟たちはみな、自分たちの部隊が混乱しているのを見て、その場を立ち去って、それぞれが帰郷してしまっただ。千人長は貴族たちとともに先にポロヴェツ人を追いかけて、これを撃ち破り、再び陣営に戻ってみると、自分たちの諸公を見いだすことができず、結局、オレーグ[C4]の息子たちの手中に落ちてしまった。こうして、〔オレーグ[C4]の息子たち〕はかれらを捕獲し、ヤロポルクの軍旗を奪い取り、多くの貴族たちを捕虜とした。それは、千人長のダヴィド・ヤロスラヴィチとスタニスラフ・ドーブルイ・トゥドコヴィチ等の家臣たちである。ウラジーミル[D1]の孫でマリアの息子ワシリコは戦死した<sup>141)</sup>。多くのキエフの貴族たちが捕虜に獲られた。

ヤロポルク[D15]は自分の兄弟たちとともにキエフにやって来た。それは、8月8日のことであつた。アンドレイ[D18]はベレヤスラヴリに戻つた。フセヴォロド[C41]はデスナ川を渡河して、ヴィシェゴロド(Вышьгород)を攻めるべく兵を布陣させた。ヤロポルク[D15]はこれに対抗すべく、兵を結集し始めた。フセヴォロド[C41]は7日間<sup>142)</sup>、陣を張つたが、それからチェルニゴフへと軍を進めた。そして互いに軍使を出したが、合意に達することができなかった。

再び、オレーグ[C4]の息子たちはポロヴェツ人とともにドニエプル川を渡河した。12月29日だつた。そして、トレポリ<sup>143)</sup>(Трьполь)からはじめて、クラスノ<sup>144)</sup>(Красно)、ヴァシレ

---

140) ビザンティンの皇子を僭称したレオン・ディオゲネスに嫁したモノマフの娘マリアの子。1116年の記事の注(『イパーチイ年代記』(1):261頁、注98)を参照。ヴァシリコはレオンの死後、母とともにルーシに帰り、キエフで伯叔父たちに仕えていたと考えられる。

141) 上注140の部分と語句がダブっている。年代記編者が資料の重複に気がつかずに使用したことによるだろう。

142) フレーブニコフ写本では「4日間」になっている。

143) ドニエプル川右岸支流のストゥグナ川河口近くの城砦でキエフの南南東50kmほど。

144) トレポリの南10kmほどにある付属城砦。

フ<sup>145)</sup>(Василев)周辺〔の諸城市〕を、ベルゴロドまで攻略しはじめた。ほとんどキエフに近づき、ジェラニ川(Желань)を渡り、ヴィシエゴロド、デレエヴィ(Дервы)に接近し、ルイベジ(Лыбьдь)川を挟んで射撃を行った。ヤロポルク[D15]は、全土から多くの兵を集めて、かれらに対抗した。しかしながら、心中に思案することがあって、かれらに対抗して〔キエフから〕出撃することはず、流血の事態も起こさなかった。そうではなく、神の裁きを恐れて、かれらに対して自らを低くして、自分の兄弟たちやあらゆる人々からの誹謗や非難を一身に受けとめた。これは「汝の敵を愛せ」<sup>146)</sup>の言葉に従ったのである。

そして、1月12日にかれらと和を結び、互いに十字架に接吻して〔和議遵守の誓いを立てた〕。かれらの間を、尊き府主教ミハイルが十字架を手に巡回した。こうして、ヤロポルク[D15]は、オレーグ[C4]の息子たちに、かれらが要求していた自分の父の地を与えた。こうして、賢明なるヤロポルク公は、苛烈な闘争を鎮めたのである。

その年、ピロゴシチャの教会が完成した<sup>147)</sup>。

#### 6645〔1137〕年

關人のマヌイル(Мануйло)がスモレンスクの主教に叙任された。優れた〔聖歌の〕歌手<sup>148)</sup>で、ギリシアから、正義を愛するムスチスラフ公[D11]のもとにやって来た三人のうちの一人であった。それ以前には、スモレンスクには主教はいなかった。

その年、太陽にしるしがあった。6月9日のことであった<sup>149)</sup>。

その年、ノヴゴロド人はスーズダリ人とジダニャ<sup>150)</sup>(Ждняя)丘で戦った。スーズダリ人はノ

---

145) キエフの附属城市で、キエフの南南西 40km ほどに位置している。

146) 『マタイ福音書』5:44にある有名な聖句。

147) 先の記事に、1132年に定礎されたとあるから、1136年完成とすると完工までに4年かかったことになる。

148) 音楽史家パトリクによれば、中世のコンスタンティノポリスでは、教会人が關人(去勢者)を聖歌歌手として重用する習慣があり、マヌイルもまたそのような職業人のひとり、教会内で出世をとげ、ルーシに派遣された人物であると推定している。なおこのビザンティンの伝統が、中世ヨーロッパに伝わり、高音域を歌う去勢した男性歌手「カストラート」(castrato)の伝統にもつながっているという。[Патрик 2006: С. 15]

149) 1136年6月1日の午後4時前後の時間帯にキエフでは日蝕が起こっており〔日食・月食・星食情報データベース〕、若干の日付のズレはあるものの、これを指している可能性が高い。

150) ジダニャ丘(Ждняя гора)は、スーズダリ公領のヴォルガ川支流クブリ(Кубрь)河畔にあり、現在のベレスラヴリ=ザレスキイ(Переславль-Залесский)から北西約30kmの地点で、スーズダリに通じるネルリ(Нерль)川との連水陸路の途中にあった。後代の年代記によれば、ジダニャ丘での合戦は1135年1月26日に起こっている。

ヴゴロド人に打ち勝った<sup>151)</sup>。そのとき〔年〕, ユーリイ [D17] はロストフに行った<sup>152)</sup>。フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] は自分の娘ヴェルフスラヴァ (Верхслава) をポーランド人 (ляхы) に嫁がせた<sup>153)</sup>。

6646 [1138] 年

ノヴゴロド人は、自分たちの公であるフセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] をノヴゴロドから追放し<sup>154)</sup>、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を〔公として〕自分たちのもつに連れてきた<sup>155)</sup>。フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [D111] はキエフの〔父方の〕叔父ヤロポルク [D15] のところに行った。叔父はかれにヴィシェゴロド<sup>156)</sup>を与えた。

その年、プスコフ人がやって来て、フセヴォロド [D111] を〔プスコフで〕公として支配する

---

151) 『ノヴゴロド第一年代記』では「冬にフセヴォロド [D111] がスーズダリに進攻した。そして、ノヴゴロド地方の人々も全体が進発した。〔1134年〕12月31日のことだった。そして、天候が悪化した。寒くなって、荒れて、極めてすぎまじかった。そして、かれらはジダニャの山で戦った。そして多くの不幸が起こった」と記されている。年紀はノヴゴロドの年代記が正しいと思われるので、本記事が6645年にあるのは、『イパーチ年代記』の編者がノヴゴロド関係の記事を編集したときに、年代を誤ったことによるものだろう。

152) 1134年の12月頃の講和によってペレヤスラヴリを弟のアンドレイ [D18] に譲ったユーリイ [D17] は、旧領のロストフ・スーズダリをヤロポルク大公から取り戻して、再びロストフ公に就いたと考えられる。ユーリイの帰郷が、上記のジダニャ丘の戦いでスーズダリ・ロストフ側の勝利に貢献したことは確かである。

153) フセヴォロド [D111] の娘ヴェルフスラヴァの結婚は、1136年の後半から1137年にかけて行われており、後にポーランド大公になる(在位: 1146～1173年)、ボレスワフ四世(巻毛公)に嫁いだ。この結婚は、ボレスワフ三世の母サロメアが、継子ヴワディスワフに対抗するために、ルーシとの連携によって実子の地位向上を狙った政略結婚の性格が強いとされている。結局、1138年に父ボレスワフ三世が没すると、異母兄のヴワディスワフ二世亡命公はポーランド大公に就き、ボレスワフ三世はマゾフシェ公になっている。

154) 『ノヴゴロド第一年代記』によると、フセヴォロド [D111] は1136年5月28日に家族とともに幽閉され、同年7月15日にノヴゴロドから追放されている。本年代記の年紀のズレについては、やはり、ノヴゴロド関連記事の編集上の誤りによるものだろう。

155) スヴァトスラフ [C43] は1136年8月1日にノヴゴロドに赴任している。それまでかれは、兄のフセヴォロド [C41] の支配地であるチェルニゴフに身を寄せていた(『ノヴゴロド第一年代記』1136年の記事)。

156) ヴィシェゴロド (Вышегород) はキエフ北方約20kmのドニエブル右岸に位置する付属城砦都市で古い歴史を持ち、聖ボリスとグレーブ公が埋葬されている。諸公にとってはいわば聖地であった。

ようにと招請した<sup>157)</sup>。かれらは、ノヴゴロドと袂を分かったのである<sup>158)</sup>。その年、プスコフの公座に就いてから、〔フセヴォロド[D111]〕が逝去した。2月11日の乾酪断ちの週の木曜日<sup>159)</sup>だった。その地の、かれ自身がプスコフに創建した聖三位一体教会に埋葬された<sup>160)</sup>。

6647〔1139〕年

ウラジーミル[D1]の娘エフィミア<sup>161)</sup> (Ефимья)が逝去した。4月4日であった。〔復活〕大祭の週の月曜日だった<sup>162)</sup>。

その年、ノヴゴロド人はスヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]を追放した<sup>163)</sup>。スモレンスク人がかれを受け入れた。ノヴゴロド人はロスチスラフ・ユーリエヴィチ[D171]を自分たちの〔公座に〕就かせた。

その年、フセヴォロド・オリゴヴィチ[C41]はポロヴェツ人をプリルク<sup>164)</sup> (Прилук)に引き入れた。そして、他の城砦も攻略し、スーラ川沿岸地方(Посульское)を掠奪した。ヤロポルク[D15]

157) フセヴォロドはヴィシェゴロドに「一年間座した」と『ラヴレンチイ年代記』にあることから、この招請は、1137年8月～9月頃のことと考えられる。同年代記の6648(1138)年の並行記事では「プスコフの人々はノヴゴロドの人々と協議して、かれ〔フセヴォロド〕を迎えにやって来た。千人長のコスニチャンと、プスコフからは〔貴族〕ジリャタが別の従士団を率いて〔来た〕」とある。

158) 『ノヴゴロド第一年代記』の6645(1137)年の記事には、フセヴォロド[D111]のプスコフ招聘をめぐる、ノヴゴロドの支配層のフセヴォロド(プスコフ)派と反フセヴォロド派の確執が詳細に描写されている。その結果、当時のノヴゴロド公スヴァトスラフ[C43]は、弟のグレーブ[C44]をクルスクから呼び寄せ、ポロヴェツ人も引き入れて、フセヴォロド追放のためにプスコフに攻め込んだが、市民の抵抗にあって失敗したという。

159) 乾酪断ちの週(масленая неделя)とは、сырная неделяとも言い、1138年は2月7日～13日が相当する。フセヴォロドが死んだとする2月11日は金曜日に相当するので、この記事は曜日から日付のどちらかが誤記と思われる。後者が誤記(その可能性が高い)の場合、死亡日は2月10日になる。

160) 『ノヴゴロド第一年代記』の記事によれば、フセヴォロド[D111]の死後、プスコフ人は、フセヴォロドの兄弟であるスヴァトポルク[D114](フセヴォロドが招請されたときに同行していた)をプスコフ公として正式に迎え入れている。ノヴゴロドとの確執は続いていたわけである。

161) エフィミアはウラジーミル・モノマフ公[D1]の娘で、1112年にハンガリー王のカルマン一世に嫁いだが、1116年頃に不貞を理由に離婚されて、ルーシに戻っていた。彼女は故郷で息子ボリスを出産し、かれは後にハンガリー国王の継承を求めて活躍することになる。[Бойтович 2006: С. 459]。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事によれば、キエフ郊外のベレストヴォ(Берестово)の救世主(Спас)教会に埋葬された。

162) 1138年の復活大祭は4月3日の日曜日であり、翌4月4日は大祭の週(光明週間)月曜日にあたることから、エフィミアが死亡した年は明らかに1138年である。

163) 『ノヴゴロド第一年代記』によると、スヴァトスラフ[C43]は、6646(1138)年4月17日にノヴゴロドを追放されて、途中でスモレンスク人に捕えられたとしている。

164) ベレヤスラヴリ地方のスラ川右岸支流ウダイ川河畔の城砦。ベレヤスラヴリの北東約50kmに位置している。

は自分の兄弟たちに呼びかけ、甥たちを糾合して、スーズダリ人、ロストフ人、およびポロツク人、スモレンスク人とともに「集まった」。ハンガリー王は援軍として3万のペレンディ人を派遣した。また、トゥーロフ人もいた。「ヤロポルクたちは」多勢の兵士を集めるとチェルニゴフに向けて軍を進めた。

フセヴォロド[C41]はヤロポルク[D15]の軍が多勢であることを感じ取ると、恐れをなした。チェルニゴフの人々はフセヴォロド[C41]のところに急ぎ「城内に」かけつけて「言った」。「そなたは、ポロヴェツ人のところに逃げ出すことをあてにして、自分の領地を滅ぼそうとしている。「それなのに」そなたはどんな機会に戻ってこようというのか。それよりも、おのれの傲慢を廃して、和を請うたほうがよいのではないか。われらは知っている。ヤロポルク[D15]は慈悲心があり、流血を喜ばず、神のために和平を望むだろう。なぜならルーシの地を守るであろうから」。フセヴォロド[C41]はこれを聞いて、考え直し、請願を行う使者をヤロポルク[D15]に向けて派遣し、ヤロポルク[D15]に和を請うた。善き人物たるヤロポルク[D15]は、その資性において慈悲深く、かれの父が神への畏れを抱いていたと同様に、心に神への畏れを抱く者だった。かれは、すべてを検討して、流血をなすことを望まず、かれ「フセヴォロド[C41]」と和を結んだのだった。すなわち、モリヴェイスク<sup>165)</sup>(Моривѣйск)に陣を置いて、話ををまとめると、尊い十字架に接吻して、それぞれ帰郷したのだった。

その年、ヤロポルク公[D15]が逝去した。2月18日<sup>166)</sup>のことだった。聖アンデレ教会のヤンカの修道院に安置された。

そして、かれの兄弟「弟」のヴァチェスラフ[D16]がキエフに入城した。同じ月〔2月〕24日の肉断ち週の水曜日<sup>167)</sup>だった。

フセヴォロド[C41]はヤロポルク[D15]が死に、ヴァチェスラフ[D16]がキエフで「公座に」就いたことを知ると、小勢の従士たちを集めて、自分の兄弟のスヴァトスラフ[C43]とウラジーミル・ダヴィドヴィチ[C34]とともにヴィシェゴロドに進軍し、そこで布陣して、城内に入った。

#### 6648〔1140〕年

フセヴォロド・オリゴヴィチ[C41]はヴィシェゴロドからキエフに向かい、部隊を整列させ

---

165) モロヴィイスク(Моровийск)とも表記し、デスナ川右岸に位置する城砦で、キエフとチェルニゴフのほぼ中間地点に位置する。

166) 1139年2月18日と推定できる。

167) 1139年の肉断ち週(мясопустная)は2月20日～26日であり、24日は金曜日に相当する。これも、曜日か日付のどちらかが誤記と思われ、後者の可能性が高い。その場合、ヴァチェスラフのキエフ入城は、1139年2月22日の水曜日ということになる。

ると、到着して、城に隣接するコピレフ区<sup>168)</sup>に布陣した。そして、城の前にあるコピレフ区の家屋に火をかけ始めた。3月4日のことだった。

一方、ヴァチエスラフ[D16]は城を出て対抗することはせず、血を流すことを望まなかった。そこで、屈服の意を示して、かれ〔フセヴォロド[C41]〕のところへ使者として府主教を遣り、次のように言わせた。「再度ヴィシエゴロドに戻るがよい。わしは今日、自分の領地へ行く。そうすればキエフはそなたのものだ」。フセヴォロド[C41]はそのようなわけで、再びヴィシエゴロドに戻った。その日に、ヴァチエスラフ[D16]は自らの領地のトゥーロフに向かった。フセヴォロド[C41]は、3月5日に、大いなる栄誉と栄光をもって、キエフに入城した。

かれ〔フセヴォロド〕のところ、イーゴリ[C42]がやって来た。なぜなら、自分のあとにはチェルニゴフを与えると、以前からイーゴリ[C42]に約束していたからである。しかし、〔フセヴォロドは〕かれ〔イーゴリ〕には与えず、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ[C34]に〔チェルニゴフを〕与えた。こうして、〔フセヴォロドは〕兄弟同士の不和を煽り立てて、〔イーゴリを〕帰してしまった。

その頃、公の2人の息子たち〔ヴァシリコ[L11]とイワン[L12]〕が帝都から戻ってきた。キエフの大公だったムスチスラフ[D11]によって流刑に処されたのである<sup>169)</sup>。それは、かれ〔ムスチスラフ〕がルーシの地を助けるためにかれらと呼んだときに、その意志に従わなかったからであった。それどころか、かれらはさらに、疥癬病みのボニャク<sup>170)</sup>の健康を祈願する始末だった。それゆえに、ムスチスラフ[D11]はかれらに怒りを発して、かれらを討伐しようとした。しかし、討伐の遠征をすることはできなかった。なぜなら、その頃、ポロヴェツ人がルーシを襲おうと接近していたからである。そのため、かれらと戦闘をしながら陣を張り、長期戦を続けていた。なぜなら、この偉大なムスチスラフ[D11]は、偉大なウラジーミル・モノマフ[D1]の汗〔労苦〕を継承したのだから。ウラジーミル自身もドン川に陣を張ったことがあった<sup>171)</sup>。そして、ルーシの地のために多くの汗を拭った。他方、ムスチスラフ[D11]は、おのれの家臣を派遣して、ポロヴェツをドン川、ヴォルガ川、ヤイク川の向こうに追いやった。神はこのよ

168) 本稿注 23 を参照。

169) このポロツク諸公のコンスタンティノポリス追放については、6638(1130)年の項に記事がある。ここで言う「公」とはその時追放されたポロツク公ログヴォロド[L1]を指しており、その二人の息子とは、ヴァシリコ[L11]とイワン[L12]である。本稿の注 112 も参照。

170) 「疥癬病みのボニャク」(Боняк шелудивый)は『原初年代記』1096年にルーシの地を襲撃したポロヴェツ人の首長の呼び名とまったく同じであり、おそらくこの事件を参照しているものと思われる。その健康を祈るとは、ポロヴェツ人の侵略を正当化するということだろう。

171) 1111年にキエフ大公スヴァトボルク等とともに行ったドン川河畔へのポロヴェツ討伐遠征を指している。

うにして、ルーシの地を異教徒どもから免れさせたのである<sup>172)</sup>。

そして、戦闘から解放されたムスチスラフ[D11]は、先に述べたように、クリヴィチの諸公<sup>173)</sup>を〔連行する〕ために、〔すなわち〕、ダヴィド[L4]、ロスチスラフ[L6]、スヴァトスラフ[L2]、ログヴォロド[L1]の二人の息子〔ヴァシリコ[L11]とイワン[L12]〕を〔連行する〕ために、〔家臣を〕派遣した。そして、3隻の船に乗せて、かれらを帝都に流刑に処した。かれらの違約ゆえにである。そして、自分の家臣たちをかれらの諸城市に〔代官として〕配したのである。われらは、前の話に戻ろう。

キエフにおけるフセヴォロド[C41]の公としての支配のはじまり。

その年、フセヴォロド[C41]はキエフに座した。その時、ウラジーミル[D1]の二人の息子<sup>174)</sup>とムスチスラフ[D11]の二人の息子<sup>175)</sup>に使者を派遣することを始めた。かれらとの和平を望んだのである。そして、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]をヴラジミルから呼び寄せようとした<sup>176)</sup>。しかし、かれ〔イジャスラフ〕はフセヴォロド[C41]のもとに行き、〔和平を〕結ぶことを望まず、自分たちの間で使者のやり取りをして、かれ〔フセヴォロド〕を討伐するためにキエフに軍を進めることを望んでいた。フセヴォロド[C41]はこれを待たず、みずから自分の兄弟スヴァトスラフ[C43]とともに、アンドレイ[D18]を討つべくベレヤスラヴリに進

---

172) このムスチスラフが家臣を派遣して行ったとするポロヴェツ人討伐については、前の年代の記事にも、他の年代記にも記録がなく、この部分が初出である。重大な出来事であるにもかかわらず同時代(1128～1130年)の記録がないこと、「疥癬病みのボニャク」など時代錯誤的な名が言及されていること、「ドン川、ヴォルガ川、ヤイク川の向こうに追いやる」など地理的に大袈裟な言い方をしていることなどからみて、このような大規模なポロヴェツ人討伐遠征はなかったと考えるべきだろう。ただし、『ラヴレンチイ年代記』の6636(1128)年にログネダ伝説の再話によってポロツクとキエフの確執が強調されていることからみて、1128～1130年頃にポロツク諸公の側に何か「謀反」とされる事件が起こったことは確かであろう(〔Грушевський ІУЛІ-2: С. 220〕も参照)。

173) 「クリヴィチの諸公」の用語法については、本稿注85を参照。

174) 原文は「双数形」が使われており、ロストフ＝スーズダリの公ユーレイ[D17]とベレヤスラヴリ公のアンドレイ[D18]を指している。

175) 原文は「双数形」が使われており、ヴラジミル(ヴォルィンスキイ)公のイジャスラフ[D112:I]とスモレンスク公のロスチスラフ[D116:J]を指している。

176) 1117年に、キエフ大公ウラジーミル・モノマフ[D1]が、ヴラジミルの公だったヤロスラフ[B32]を包圍して降伏させたのちに、「自分が呼び寄せたときにはすぐに来る」ように命じている(〔イパーチイ年代記(1)〕注118も参照)。この事例からみて、フセヴォロド[C41]は、イジャスラフ[D112:I]を呼び寄せることによって、キエフの大公への服従のあかしを求めたのだろう。



軍した。他方、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ<sup>177)</sup> [C35]をポロヴェツ人とともに派遣した<sup>178)</sup>。また、イワン・ヴァシリコヴィチ<sup>179)</sup> [A13]とウラジミルコ・ヴォロダレヴィチ<sup>180)</sup> [A12]をガーリチから、ヴァチェスラフ<sup>181)</sup> [D16]とイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I]を討つべく派遣した。

〔フセヴォロド〕自身は、アンドレイ [D18]を討つべく、みずから自分の兄弟スヴァトスラフ [C43]とともにペレヤスラヴリに向かった<sup>182)</sup>。

かれは自らの力を恃んで、自らすべての地を支配することを望み、ロスチスラフ [D116:J]〔を討伐した〕あとにはスモレンスクを、イジャスラフ [D112:I]〔を討伐した〕あとにはヴラジミルを求めていた。こうして、イジャスラフ [D112:I]を討つべくヴラジミルに軍を差し向けて、「ヴラジミル〔の城市〕から出よ」と〔自らの軍使に〕言わせた。しかし、ゴリンカ (Горинка) 川<sup>183)</sup>まで到達したところで、慌てふためいて<sup>184)</sup>、帰還してしまった。

他方、フセヴォロド [C41]はペレヤスラヴリにやって来ると、アンドレイ [D18]を追放して、

177) フセヴォロド [C41]の従兄弟にあたり、当時は年少公としてラディミチ人の地でソジ川 (Со́жь) 沿岸のゴミイ (Гомий) (現在のホメリ) に座していたか [Войтович 2006: С. 376-378]。

178) 文脈からみて、フセヴォロド [C41]の指示により、イジャスラフ [C35]はポロヴェツ人部隊とともに、イジャスラフ [D112:I]を討伐する遠征のために、ヴラジミルへ向けて進軍をしたのだろう。

179) 当時ガーリチ公で、ヴァシリコ [A13]の息子としてはイーゴリ (Игорь) の名でクティエーシチェフの史料に記されている人物と同じであり、イワン (Иван) は洗礼名と考えられる。同史料では、かれはフセヴォロド [C41]公の娘と結婚しており、フセヴォロドの命令で、ヴァチェスラフとイジャスラフの討伐に参加したのも、姻戚関係によるものだろう [Войтович 2006: С. 338]。本年代記 6649(1141)年にかれが死亡して、その所領をウラジミルコ [A12]が継いだ旨が記されている。なお、ヴァシリコ [A13]の息子イーゴリ=イワンについては、[リューリク王朝系図索引]にはないことから [A13]の番号を付して補った。

180) 父ヴォロダリ [A12]の所領を継いで、1130年頃から当時はペレムィシェリ (さらにはガーリチ)の公座に就いていたと考えられる。

181) ヴァチェスラフ [D16]は当時トゥーロフ公であり、ガーリチからは近い位置にある。

182) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事 (6647(1139)年)には「クルスクから兄弟のスヴァトスラフ [C43]を連れてきて」とある。なお、この段落の内容もおそらく資料の重複によるダブリである。

183) プリビャチ川右岸の支流で、現在のホルィニ川 (Горинь)のこと。キエフからヴラジミルへの遠征の際には渡河しなければならず、両者の中間地点のややヴラジミル寄りに位置していた。古都ドロゴブージュ (Дорогобуж)はこの河岸にある。

184) 「慌てふためいて」と訳した動詞は写本によって異読があるが、フレーブニコフ写本の пополошившесяを採用した。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事も同様の読みである。

フセヴォロドがヴラジミルに向け派遣した、おそらく、イジャスラフ [C35]とポロヴェツ人部隊からなる遠征軍が「慌てふためいた」のは、ヴラジミルに十分な防衛部隊が待機していることを知ったことによると思われる。実際、ヴラジミル公のイジャスラフ [D112:I]は、当時ポーランドとの同盟によって援軍を得る可能性があった。

自分の兄弟<sup>185)</sup>をその公座につけることを望み、アンドレイ[D18]に対して、〔軍使を通じて〕「クルスクに行くがよい<sup>186)</sup>」と言った。するとアンドレイ[D18]は自分の従士団と相談して、こう言った。「クルスクを公として支配するよりは、自分の父の地、祖父の地で従士団とともに死んだほうがましだ。わが父はクルスクに座したことはなく、ペレヤスラヴリに座していたのである<sup>187)</sup>。わしは自分の父の地で死を受けること望む。兄弟よ、そなたは自分の領地で満足せず、ルーシの地全土を支配しようとしている。もしそなたがこの領地〔ペレヤスラヴリ〕を欲しければ、わしを殺すがよい、そうすればそなたの領地になる。わしは、生きてままで自分の領地から出ることはしない。しかしながら、われらの一族にとっては、このようなことは驚くべきことではなく、まえにもこのようなことがあったのだ。スヴァトボルク[07]が領地のために、ボリス[14]とグレーブ[15]を殺したのではなかったか。そして〔スヴァトボルク〕自身はいつか長く生きてだろうか。それどころか、この世での生を失なって、あの世で永遠に苦しみを受けたではないか<sup>188)</sup>」。

そして、フセヴォロド[C41]はドニエプル河岸に布陣し、自らの兄弟スヴァトスラフ[C43]を部隊とともにペレヤスラヴリへと派遣した。そして、アンドレイ[D18]の従士団と遭遇して、これと戦った。神はアンドレイ[D18]の子たち<sup>189)</sup>のスヴァトスラフ[C43]討伐を助け、かれらをコラン<sup>190)</sup>まで(до Коранъ)追撃した。しかし、アンドレイ[D18]は従士団をそれより先に〔追撃して〕行かせることはしなかった。

翌日の朝、フセヴォロド[C41]はアンドレイ[D18]と和議を結んだ。アンドレイは十字架に接吻していた。フセヴォロドはしかし、まだ十字架に接吻していなかった。その日の夜、ペレヤスラヴリが焼けた<sup>191)</sup>。フセヴォロド[C41]は神への畏れに満たされていたので、〔その日には〕

---

185) 一緒に行軍したスヴァトスラフ[C43]のこと。

186) 『ラヴレンチイ年代記』(本稿注182参照)にあるように、スヴァトスラフ[C43]はそれまでクルスクの公だったことから、キエフに近く、都市としての格も高いペレヤスラヴリを求めて、公座の交換を迫ったのである。

187) アンドレイの父ウラジーミル・モノマフ[D1]が、1094～1113年にペレヤスラヴリで公支配を行っていたことを指している。その後かれはキエフ大公位に就いた。

188) この段落のスヴァトボルク邪悪公[07]の故事と教訓については、『原初年代記』の1015年の末尾と1019年の項に同様の記述が見える。

189) 原文は Андрѣвичемъ (『ラヴレンチイ年代記』並行記事も同じ)。アンドレイ[D18]にはウラジーミル[D181]、ヤロボルク[D182]の二人の息子がいたが、ここでは、配下の従士団のことを「アンドレイの子たち」と呼んでいる可能性もある。

190) コランまたはコラニはペレヤスラヴリ近郊の森や湖沼に付けられた地名と考えられるが特定はできない。

191) この火事については『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「次の日、和が結ばれた。そしてその夜、城市〔ペレヤスラヴリ〕から火が出た。9月1日のことだったが、軍勢によるものではなかった」として、神罰の解釈は下していない。なお、これは1139年9月1日のことである。

この城市へ誰も〔兵を〕送るようなことはしなかった〔のにこのようなことが起こった〕。

翌日、ようやくフセヴォロド[C41]はアンドレイ[D18]に〔使者を遣って〕、次のように申し開きをした。「見よ、わしがそなたに対してまだ十字架接吻を行っていないのだが、そのことに対して、神はわしにこのような〔懲罰を〕与えたのである。すなわち、そなたたちのところが自ずから焼けてしまうということ。わしが、このような悪行〔放火〕を望んでいたとでも言うのか。わしがこんなことをしたところで、自分にどんな利得があるわけでもあるまい。今では、そなたはすでにわしに対して十字架接吻をしており、そなたがその誓約を守れば、それは善いことになるだろう。もし、そなたが誓約をまもらなければ、それは神がすべてを見そなわす<sup>192)</sup> ことになるう」。

こうして、フセヴォロド[C41]は、かれ〔アンドレイ〕に対して十字架接吻を行い、かれと和を結んで、キエフへ戻った。

他方、〔イワン・〕ヴァシリコヴィチ[A131]とガーリチの公〔ウラジミルコ・〕ヴォロダレヴィチ[A121]は、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]を自分たちのところに呼び寄せたが、合意に達することなく、〔イジャスラフは〕引き返した。

イジャスラフ[C35]は、ふたりの息子<sup>193)</sup>とともに軍を進め、ヴァチェスラフ[D16]の領地の掠奪を行い、再び引き返した。他方、ポーランド人たちは、フセヴォロド[C41]を支援して、ウラジミルの領地の掠奪を行った。

ヴァチェスラフ[D16]とイジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]は自分たちの使者をフセヴォロド[C41]へと派遣して、言葉を伝え、合意を結ぼうとした。フセヴォロド[C41]はかれらの意向を行うことを望まなかったが、後になって、かれら〔ヴァチェスラフとイジャスラフ〕抜きでは立ちゆかないと協議して考え、かれらに赦免を与え、かれらに対して十字架接吻を行った。

その年、フセヴォロド[C41]に息子が生まれ、ヤロスラフ[C412]と命名した。

その年、ノヴゴロド人はユーレイ[D17]の子ロスチスラフ[D171]を追放した<sup>194)</sup>。そして、フセヴォロド[C41]に請願して、弟のスヴァトスラフ[C43]をノヴゴロド〔の公として〕求めた。

192) 「神がすべてを見そなわす」(Бог за всимъ)とは、違反に対しては神が懲罰を下すという意味の、誓約で用いられる「懲罰条項」(sanctio)の定型句。本稿注285参照。

193) 確認できないが、「ダヴィド(C3)のふたりの息子」という意味か？

194) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事によれば、1139年の9月1日にロスチスラフ[D171]はノヴゴロドを追放されて、スモレンスクに逃れている。

こうして、かれら〔ノヴゴロド人〕はかれ〔スヴァトスラフ〕をノヴゴロドに据えた<sup>195)</sup>。

しばらくしてから、ノヴゴロド人は民会でスヴァトスラフ[C43]に対してその悪行ゆえに決起した。かれ〔スヴァトスラフ〕はノヴゴロド人たちが自分に対して決起していることを見ると、兄弟のフセヴォロド[C41]に使者を遣って、かれに言った。「兄弟よ、ここの人々には重圧がある。わしはかれらの中にはいたくない。そなたが望む者を、そこに派遣するがよい」。こうして、〔フセヴォロドは〕かれら〔ノヴゴロド人たち〕のもとに、イワン・ヴォイティシチ<sup>196)</sup>を派遣して、かれらの中の要人たちに懇請して〔集め〕、捕虜にすると、フセヴォロド[C41]のもとに引き連れていった<sup>197)</sup>。

さて、〔フセヴォロドは〕自分の息子のスヴァトスラフ[C411:G]を〔ノヴゴロドへ公として〕派遣したいと望んだ。ノヴゴロド人たちが民会で決起して、スヴァトスラフ[C43]の支持者たちを、かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕の弾圧ゆえに、打ち殺しているということを聞いたからである。かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕の後見人である千人長<sup>198)</sup>は、かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕に同情して〔こう言った〕。「公よ、かれらはそなたを捕らえようとしています」。かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕は恐れをなして、妻と自分の従士団を連れて、ポロツクからスモレンスクへと逃げ出した<sup>199)</sup>。

フセヴォロド[C41]はこのことを聞くと、自分の息子のスヴァトスラフ[C411:G]を〔ノヴゴロドへ〕行かせることも、自分の所に引き連れてきたノヴゴロドの要人たちを解放することもしなかった。

---

195) 『ノヴゴロド第一年代記』によると、1139年12月25日に交渉の末、ようやくスヴァトスラフ[C43]はノヴゴロドに公として赴任している。『ラヴレンチイ年代記』によればノヴゴロド人は「子供たち」の人質を出してまでスヴァトスラフの公座就位を請願している。なお、この部分の年紀は『ノヴゴロド第一年代記』『ラヴレンチイ年代記』のほうが正しい。

196) イワン・ヴォイティシチ(Иван Войтищич)は、キエフの在地貴族・軍司令官でウラジーミル・モノマフ[D1]、ムスチスラフ[D11]等に仕え、当時はキエフ公フセヴォロド[C41]によって派遣されている。『イパーチイ年代記』1116年の記事(『イパーチイ年代記(1)』注101)及び1128年の記事(本稿注91)を参照。なお、これについては、『ノヴゴロド第一年代記』の1141年の項に「キエフのフセヴォロド[C41]から、兄弟のスヴァトスラフ[C43]をキエフへ連れ帰るために人がやって来た」とある。

197) このノヴゴロド要人たちの人質としての連行は、次にくるスヴァトスラフ[C411:G]のノヴゴロドへの派遣と並行して行われており、おそらく、息子スヴァトスラフ[C411:G]のノヴゴロドでの安全を保証するためにフセヴォロド[C41]が取った措置であろう。

198) キエフからノヴゴロドに派遣されて来たイワン・ヴォイティシチのこと。かれはキエフでは千人長として公フセヴォロド[C41]に仕え、息子のスヴァトスラフ[C411:G]の後見人的な存在であったことがわかる。

199) スヴァトスラフ[C43]は使者によって平和的に連れ帰られるのではなく、1141年4月頃にノヴゴロドを逃亡することになる。『ノヴゴロド第一年代記』ではその理由を「ノヴゴロド人たちが自分を欺くのではないかと恐れて、夜ひそかに逃げた」とある。

すると、ノヴゴロド人たちは主教<sup>200)</sup>と代表者たちを派遣して、次のように言った。「われらにそなたの息子〔スヴァトスラフ[C411:G]〕を与えよ。そなたの兄弟のスヴァトスラフ[C43]は望まない」。そのようなわけで、〔フセヴォロドは〕かれら〔ノヴゴロド人たち〕のもとへ自分の息子スヴァトスラフ[C411:G]を遣ることにした。

かれ〔スヴァトスラフ[C411:G]〕がチェルニゴフに滞在していたときに<sup>201)</sup>、ノヴゴロド人たちは協議して、フセヴォロド[C41]に〔使者を通じて〕こう言った。「われらは、そなたの息子も、兄弟も、そなたたちの一族も望まない。われらはウラジーミル[D1]の一族を望んでいる<sup>202)</sup>」。

フセヴォロド[C41]はこれを聞くと、かれらを追う〔部隊を〕派遣し、主教と代表者たちを引き返させ、かれらを主教とともに拘留した<sup>203)</sup>。それは、かれらが「そなたの妻の兄弟であるムスチスラフ[D11]の息子<sup>204)</sup>を与えよ」と言ったからである。フセヴォロド[C41]は、ノヴゴロドにウラジーミル[D1]の一族の者を送り出すことを望まず、自分の妻の二人の兄弟たち<sup>205)</sup>を呼び寄せると、かれら二人にベレスチエ<sup>206)</sup> (Берести)の城市を与えて、こう言った。「ノヴゴロドのことはかまうな。かれら〔ノヴゴロド人たち〕がどこで公を得たとしても、公は自らその力に応じて座して〔支配〕するだけだから<sup>207)</sup>」。他方、〔フセヴォロド[C41]〕はノヴゴロド人たちをその冬と夏のあいだ留め置いた<sup>208)</sup>。主教も一緒だった。

200) 当時のノヴゴロド主教はニフォント(Нифонт)。かれは1149年には大主教になる。

201) キエフに拘留されていたノヴゴロド大主教と使節団の一行が、新たにノヴゴロド公となるスヴァトスラフ[C411:G]を伴って帰郷の途に就き、その道中、チェルニゴフに滞在していたときのことである。当時チェルニゴフはウラジーミル・ダヴィドヴィチ[C34]の支配下にあった。

202) このノヴゴロド使節の発言は、フレーブニコフ写本の読みを採用した。

203) フセヴォロド[C41]によるノヴゴロド主教・使節団拘留の理由について、『ノヴゴロド第一年代記』では、スヴァトスラフ[C43]と一緒に逃亡しようとしたスヴァトスラフ派の市長官等(ヤクンとプロコピー)が取り押さえられ、過酷な取扱いを受けたからだとしている。

204) ここでは誰を要請したのかは特定できない。当時存命の「ムスチスラフの息子」はイジャスラフ[D112:J]、スヴァトボルク[D114]、ロスチスラフ[D116:J]、ウラジーミル[D115]がいるが、その後の事態の進展から見て、第一候補のスヴァトボルク[D114]とウラジーミル[D115]の二人を指していると考えられる。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事も同様の発言がある。

205) 原文では「妻の兄弟たち」(шюринь)は双数形になっており二人であることがわかる。これに続く年代記記事を総合すると、やはり、スヴァトボルク[D114]とウラジーミル[D115]を指していることは疑いない。スヴァトボルクは兄のフセヴォロド[D111]と行動を共にして、当時はプスコフの公座に就いていたのだろう。ウラジーミル[D115]は1132年生まれで当時まだ10歳であることから、名目的な存在だったのか。

206) 現在のベラルーシのポーランド国境近くの都市プレストのこと。当時の勢力図から見ると辺境の城市であった。

207) つまり、力のない公がノヴゴロドに座しても、ノヴゴロド人の思うがままにされてしまうという警告を与えたのである。

208) キエフ公フセヴォロド[C41]がノヴゴロドの主教と代表団を留置したのは、1141年夏から冬にかけてのことだろう。

その年、全土のポロヴェツ人とポロヴェツの諸公が、和議のためにやって来た。フセヴォロド[C41]はキエフから、アンドレイ[D18]はペレヤスラヴリからマロチン<sup>209)</sup>(Малотинь)に出向き、かれらと和を結んだ<sup>210)</sup>。

#### 6649〔1141〕年

フセヴォロド[C41]の娘がポーランド人のもとに〔婚礼のために〕連れられて行った<sup>211)</sup>。

その年、エウフィミイがペレヤスラヴリの主教に叙任された。

この年、ガーリチでイワン・ヴァシリコヴィチ[A131]が逝去した。ウラジミルコ・ヴォロダレヴィチ[A121]がかれの領地を獲得し、二つの領地に座して、ガーリチの公として支配を行った。

この年、ノヴゴロド人たちは、フセヴォロド[C41]がかれの兄弟たち<sup>212)</sup>を留置したことを聞いて、公座に公がいないことに耐えられなくなった。またどこからも穀物がかれらのところに来なくなったので<sup>213)</sup>、ユーリイ[D17]のもとに自分たちの代表者たちを派遣して、ロスチスラフ・ユーリエヴィチ[D171]を引き取った。ノヴゴロド人たちは大いなる榮譽をもって、ノヴゴロドの、その父親の公座にかれ〔ロスチスラフ〕を就けた<sup>214)</sup>。

これについて、フセヴォロド[C41]は怒りを発して、オステルスキイ・ゴロデツ<sup>215)</sup>を占領した。

スヴァトスラフ[C43]は、ノヴゴロドから逃げ出して、ルーシの兄弟のところに来ていたの

---

209) ペレヤスラヴリから北東約 50km に位置する城市。キエフからも東に 130km 程度で近い。

210) ポロヴェツとの講和の記事は『ラヴレンチイ年代記』6647(1139)年の項にはほぼ同じ記述があり、それから見て、これは 1139 年夏～秋の出来事と考えられる。

211) フセヴォロド[C41]の娘ズヴェニスラーヴァ(Звенислава)(洗礼名アナスタシア)がシレジア大公のボレスワフ一世(長身公)(在位:1163-1201年)に嫁ぐために、クラコフに興入れたことを指している。興入れは 1141 年後半のことと考えられる。この結婚はボレスワフの父親ヴワディスワフ二世と異母兄弟との間の権力闘争から要請されたものだが、ヴワディスワフは闘争に敗れ、家族は神聖ローマ領内に亡命している。本稿注 241 も参照。

なお、この結婚に関する記事は次の年(1142年)の項にも同じ内容が繰り返されている。

212) 「兄弟たち」とはノヴゴロド主教をはじめとするノヴゴロドの使節団のことを指している。

213) ノヴゴロドとユーリイ[D17]との不和によって、ユーリイがスーズダリ地方からノヴゴロド地方への穀物取引を禁止したことによるものだろう。

214) 『ノヴゴロド第一年代記』によると、ロスチスラフがノヴゴロドの公座に就いたのは、1141年11月26日である。

215) 原文は Городецъ Въстрьскый で、デсна川の左岸支流オステル川河口の城市。キエフから北東約 60km と近く、チェルニゴフ領とペレヤスラヴリ領境界のペレヤスラヴリ側に当たる地にあった。ペレヤスラヴリがユーリイ[D17]の弟アンドレイ[D18]の支配下にあったことから、この城市にはなんらかのかたちでユーリイ[D17]の利権が及んでいたのかもしれない。

で、フセヴォロド[C41]はかれに対して使者を遣りこう言った。「兄弟よ、ここに来たれ」。スヴァトスラフ[C43]はスタロドゥーブ(Стародуб)<sup>216)</sup>からかれ〔フセヴォロド〕のところへやって来たが、領地についてかれと合意することができなかった。スヴァトスラフ[C43]はクルスクへ行った。それは、ノヴゴロド・セヴェルスキイに座していたからである。その時、フセヴォロド[C41]は、自分の兄弟〔スヴァトスラフ[C43]〕と別れるにあたって、かれにベルゴロドを与えた。

その冬に、篤信の公アンドレイ・ウラジーミロヴィチ[D18]がペレヤスラヴリで逝去した。1月22日<sup>217)</sup>だった。23日には聖ミハイル<sup>218)</sup>〔の聖堂〕に埋葬された。かれが棺のところに運ばれて行ったときに、いとも不思議なしるしが天空にあらわれた。太陽が三つ互いに輝き、三本の柱が地上から天に向かって立ち、万人の上方に虹のような特別の月が昇り、このしるしはかれの埋葬が終わるまで続いた。

その時、フセヴォロド[C41]は、ユーリイ[D17]の諸城市の掠奪をおこない、馬、家畜、羊、そこにあったあらゆる物品を手当たり次第に奪った<sup>219)</sup>。

その年、イーゴリ[C42]はチェルニゴフへ向けて、〔ウラジーミル・〕ダヴィドヴィチ[C34]討伐の遠征を行い、和議を結んだ<sup>220)</sup>。

この年、グロドノ(Городеньский)のフセヴォロドコ(Всеволодь)[F11]が逝去した。

その年、イジャスラフ[D112:I]は自分の姉妹<sup>221)</sup>へ使者を遣ってこう言った。「われらの兄弟スヴァトボルク[D114]に大ノヴゴロドを〔与えるよう〕、そなたの夫に頼んでくれ」。かの女はそのようにした。

---

216) スヴァトスラフ[C43]はノヴゴロドからポロツク経由でスモレンスクに逃れ、さらにスタロドゥーブに達していたことが分かる。この城市は、チェルニゴフ領内の北方にあり、キエフとスモレンスクのほぼ中間地点に位置している。

217) 1142年1月22日に相当する。

218) ペレヤスラヴリの首座教会。

219) 『ラヴレンチイ年代記』の6649(1141)年の項に並行記事があるが、掠奪を行ったのは「オレーグの子」(Олговичь)となっている。これは、アンドレイ[D18]の死によりペレヤスラヴリ地方にモノマフ一族の力が及ばなくなったため、この地方のそれまでユーリイの利権が及んでいた城市や村を掠奪したものであろう。

220) 1139年3月にフセヴォロド[C41]がキエフ公位に就いた直後に、弟のイーゴリ[C42]はかれにチェルニゴフを領地として求め断られている。アンドレイが没した領地再編期に再度、実力によるチェルニゴフ領有を図ったものであろう。

221) ムスチスラフ[D11]の娘マリア(エフロシニヤ)のこと。かの女は1120年以前にフセヴォロド[C41]に嫁いでおり、当時はキエフにいた。

6650 [1142] 年

チェルニゴフの主教、福者パンテレイモン<sup>222)</sup>が逝去した。

この年、フセヴォロド[C41]は、自分の妻の兄弟スヴァトボルク[D114]をノヴゴロドへ〔公として〕派遣した。それは、かれが拘留していたノヴゴロド人たち<sup>223)</sup>と約定した上のことであった。ノヴゴロド人たちはかれ〔スヴァトボルク[D114]〕を受け入れた<sup>224)</sup>。かれ〔スヴァトボルク[D114]〕は〔ノヴゴロドの〕公座に就き<sup>225)</sup>、ユーリイ[D17]の子で自分の父方の伯叔父の息子〔ロスチスラフ[D171]〕を、ノヴゴロドから、父のいるスーズダリへと退去させた<sup>226)</sup>。

この年、フセヴォロド[C41]はキエフからヴァチェスラフ[D16]へ使者を遣って、こう言った。「そなたは、キエフの領地に座しているではないか。それは、わし〔が領有する〕に相応しい<sup>227)</sup>。そなたは、自分の父の地ペレヤスラヴリに行くがよい」<sup>228)</sup>。

他方で、かれ〔ヴァチェスラフ[D16]〕の兄弟の息子イジャスラフ[D112:I]にはヴラジミルを、自分の息子スヴァトスラフ[C411:G]にはトゥーロフを〔与えた〕。

これ〔の措置〕に、かれ〔フセヴォロド[C41]〕の兄弟であるイーゴリ[C42]とスヴァトスラフ[C43]の心は重くなった。なぜならば、息子に領地を与えておきながら、兄弟にはなに

---

222) 1123年に死去したフェオクティストのあとを襲ってチェルニゴフ主教に就任した。「福者」(блаженный)は聖人の呼称の一つで、本年代記の編集の時点(12世紀末)でかれが教会で聖人として扱われていた可能性がある。

223) フセヴォロド[C41]は、1140～1141年に千人長を派遣して、息子スヴァトスラフ[C411]の公座就任の保証(人質)としてノヴゴロドの要人たちをキエフに連行し、また、1141年には息子スヴァトスラフ[C411]のノヴゴロド公座就任を請願し、連れ帰りにきたノヴゴロド主教と使節団を、帰路に捕まえてキエフで留置していた。これらのノヴゴロド人たちのことを言っている。

224) 『ノヴゴロド第一年代記』には、キエフで拘留されていた主教をはじめとする使節団はスヴァトボルク[D114]とともにノヴゴロドに帰国したこと、スヴァトボルク到来を知ったノヴゴロド人はロスチスラフ[D171]を大主教庁に監禁し、スヴァトボルクの到着後にスーズダリに追放したことが記されている。

225) 『ノヴゴロド第一年代記』によると、スヴァトボルク[D114]がノヴゴロドに到着したのは、1142年の4月19日である。

226) 『ノヴゴロド第一年代記』では、ノヴゴロド人から見たこの公座交替の理由として「ユーリイ[D17]は自分の息子をノヴゴロドへ遣わすことによって背反した」(воротивъся Юргю, яко пустиль сынъ свои Новугороду)からとなっている。つまり、1141年夏～秋にキエフ公フセヴォロド[C41]は息子スヴァトスラフ[C411:G]をノヴゴロドの公座に就けようとして代表団と交渉したが最終的に決裂、その間にユーリイ[D17]は穀物禁輸などの手段でノヴゴロドに圧力をかけ、同年11月26日に自分の息子のロスチスラフ[D171]をノヴゴロドの公座に就けてしまった。フセヴォロド[C41]はこの抜け駆けに激怒して、妥協策として義弟スヴァトボルク[D114]の受け入れをノヴゴロドにのませ、早速かれをノヴゴロドに派遣して、ロスチスラフ[D171]を追放させたのである。

227) トゥーロフは従来「キエフの領地」(Киевская волость)に属し、キエフ大公が代官を置いたり、その一族が公座についていたことを踏まえている。

228) この段落の記事は『ラヴレンチイ年代記』6649(1141)年の項に全く同じ記述がある。



も分け与えなかったからである。フセヴォロド[C41]は兄弟たちを自分のところに呼び寄せた。スヴァトスラフ[C43], ウラジーミル[C34], イジャスラフ[C35]はやって来て、オリジチエ<sup>229)</sup>(Ольжичие)に陣を張り、他方、イーゴリ[C42]はゴロデチ(Городьчъ)<sup>230)</sup>周辺に陣を張っていた。スヴァトスラフ[C43]は自らイーゴリ[C42]のところに行って来たと言った。「年長の兄弟〔フセヴォロド[C41]〕はそなたに何を与えるのか」。イーゴリ[C42]は言った。「われらに与えるのは、ベレスチエ(Берестий), ドロギチン(Дорогычинъ), チェルトリュスク(Чергорыускъ), クリチェスク(Кльчеськъ)である。自分の父の地であるヴァティチ(Вятичь)地方は与えない」。そして、スヴァトスラフ[C43]は自分の兄弟であるイーゴリ[C42]と十字架接吻によって〔合意遵守の〕誓約を行い、すべて合意してからこう言った。「この十字架接吻を違えた者には、この十字架が報復を行うであろう」。

さて、フセヴォロド[C41]は使者を遣って、かれらを昼食に招待した<sup>231)</sup>が、かれらは出けなかった。そして、この兄弟たちはフセヴォロド[C41]に使者を遣ってこう言った。「そなたはキエフに座している。われらはそなたにチェルニゴフの領地とノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕の領地を要求する。キエフの領地は望まない」。

かれ〔フセヴォロド[C41]〕はヴァティチ(Вятичь)地方<sup>232)</sup>を譲歩することはなく、かれらには、前述した4つの城市を与えようとした。かれらは言った。「そなたはわれわれにとって年長の兄弟である。もし〔ヴァティチを〕与えないのなら、われらは自ら自力でこれを奪取することになるだろう」。こうして、かれらはフセヴォロド[C41]と言い争い、それからキエフを発って、ペレヤスラヴリへ向けて、ヴァチェスラフ[D16]討伐のために軍を進めた。かれらはペレヤスラヴリ近郊で戦闘を行った。

フセヴォロド[C41]は、ラザリ・サコフスキイ<sup>233)</sup>(Лазорь Саковський)にペチェネグ人と軍兵を率いさせて、ヴァチェスラフ[D16]のもとに援軍を派遣した。

他方、イジャスラフ<sup>234)</sup>[D112:I]は、自分の父方の伯叔父〔ヴァチェスラフ[D16]〕を討伐する軍がやって来ることを聞くと、速やかに自らの部隊を率いてペレヤスラヴリに向けて出撃し

229) オリジチエ(Ольжичие)は『原初年代記』6455(947)年の項に「オリガの村」として記されており、ドニエプル川とデスナ(Десна)川の合流地点近くであり、キエフの丘から北東に9kmほどの対岸に位置している。

230) オリジチエから1kmほど南にある村。

231) 「昼食に招待」(звать на обѣд)の表現は、復活祭の祝宴に招待する場合に用いられることが多い。これもその意味であれば、1142年4月19日の出来事ということになる。

232) ヴァティチ(Вятичь)地方とは、オカ(Ока)川の上流域一帯のヴァティチ人の居留地を指す。

233) このラザリ(Лазорь)はキエフの在地の軍司令官(千人長)と考えられる。6655(1147)年の記事でも言及されている。

234) 当時イジャスラフ[D112:I]は、ヴラジミル=ヴォルィンスキイの公座に就いていた。

た。そして、かれらと戦った。神はイジャスラフ[D112:I]を助けたので、かれらは陣を守ることができず、自分たちのそれぞれの城市へと逃げ帰っていった。

その時、ロスチスラフ<sup>235)</sup>[D116:J]はスモレンスク人の部隊を率いてキエフの自分の姉妹の夫<sup>236)</sup>〔フセヴォロド[C41]〕のもとに向かった。それは、オレーグ[C4]の息子たちがペレヤスラヴリ近郊でかれの父方の伯叔父ヴァチェスラフ[D16]及び兄弟のイジャスラフ[D112:I]と戦っていると聞いたからである。そして、かれら〔オレーグの息子たち〕の領地内に進攻し、ゴミイ(Гомий)近くのかれらの領地をすべて占領した。イジャスラフ[D112:I]は、自分の兄弟〔ロスチスラフ〕がかれらの領地を攻め取っていることを聞いて、たちまちペレヤスラヴリから出撃して、チェルニゴフの地へと進攻し、デスナ川周辺、チェルニゴフ周辺のかれらの村々を掠奪した。こうして、かれらの領地の掠奪を行うと、大いなる栄誉とともに帰国した。

イーゴリ[C42]は自分の兄弟たちと協議して、これに対して自ら復讐しようと望み、再度、ペレヤスラヴリへと軍を進めた。そして、ペレヤスラヴリ付近に陣を構え、3日間戦ったが、なんの成果も得られず、帰国した。フセヴォロド[C41]はかれらに対して、自分の兄弟〔従兄弟〕スヴァトーシャ(Святоша)[C31]を〔使者として〕派遣して、かれらにこう言った。「わが兄弟たちよ、わしがそなたたちに与えるゴロデチ(Городечь)、ロガチョフ(Рогачевь)、ベレスチエ(Берестий)、ドロギチン(Дорогичинь)、クリチェスク(Клическъ)を受け取って和解せよ」。また、こうも言った。「これ以上ムスチスラフ[D11]の息子たちと戦うことはするな」。

かれらは、かれ〔フセヴォロド[C41]〕の意向に従った。〔フセヴォロドは〕かれらをみずからのキエフに呼び招いた。かれらは、かれ〔フセヴォロド〕のもとに一斉にやって来た。フセヴォロド[C41]は、兄弟たちの意志が一つになることを望まず、ダヴィド[C3]の二人の息子〔イジャスラフ[C35]とウラジーミル[C34]〕のもとに使者を遣って、こう言った。「そなたたち二人はわが兄弟たちと離れて行動せよ。〔そうすれば〕わしはそなたたちに〔領地を〕分与しよう」。かれら二人は十字架接吻〔の誓い〕に違反して、イーゴリ[C42]やスヴァトスラフ[C43]と離れて、兄弟〔従兄弟〕のフセヴォロド[C41]のもとに赴いた。フセヴォロド[C41]はかれらが分離したことを喜び、領地について合意をして、〔かれらに〕ベレスチエ、ドロギチン<sup>237)</sup>、ヴォシチジ(Въщижь)、オルミナ(Ормина)<sup>238)</sup>を与えた。また二人の兄弟には使者を遣って、イーゴリ[C42]にはゴロデチ、ギュルコフ(Гюрковь)、ロガチェフを与え、スヴァトスラフ[C43]には

235) ロスチスラフ[D116:J]は1127年よりスモレンスクの公座に就いていた。

236) 「姉妹の夫」の原文は зять。フセヴォロド[C41]は1120年以前にムスチスラフ[D11]の娘マリア(エフロシニヤ)と結婚しており、ロスチスラフとは義理の兄弟の姻戚関係にあった。本稿注216も参照。

237) ベレスチエとドロギチンはおそらくイジャスラフ[C35]に与えられたのだろう。

238) ヴォシチジとオルミナはデスナ川上流域のチェルニゴフ領にある。おそらくウラジーミル[C34]に与えられたのだろう。

クレチェスク、チェルトリスクを与えた。こうして、それぞれ解散して〔帰国して行った〕。

その年にヴァチエスラフ[D16]はフセヴォロド[C41]と合意して、自分の甥のイジャスラフ[D112:I]にペレヤスラヴリを与え、ヴァチエスラフ[D16]はトゥーロフへと向かった。フセヴォロド[C41]は自分の息子スヴァトスラフ[C411:G]にヴラジミルを与えた<sup>239)</sup>。

ところが、オレーグ[C4]の息子たち、すなわちフセヴォロド[C41]の兄弟たちはこのことに好感を持たず、かれ〔フセヴォロド〕に対して不満を言った。すなわち、かれ〔フセヴォロド〕はムスチスラフ[D11]の息子たち、すなわち妻の兄弟たちが「われらの敵どもに好意を持っており、かれらを自分のまわりに近づけているが、われらには悲惨と貧乏<sup>240)</sup>ばかりであり、自分にとってもそうではないか」と言うのである。

このようにして兄弟たちはかれ〔フセヴォロド[C41]〕に意見を言い、かれに対して、ムスチスラフ[D11]の息子たちを討つべく軍を起こすよう強く迫った。しかし、かれ〔フセヴォロド〕はかれらの意向に従うことはなかった。

その年〔の夏〕フセヴォロド[C41]は自分の娘のスヴェニスラヴァ(Звънислава)をポーランド人のボレスワフのもとに嫁がせた<sup>241)</sup>。

その年の冬、フセヴォロド[C41]は自分の息子スヴァトスラフ[C411:G]とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]を、ガーリチ公ウラジミルコ(Володимерь)[A121]とともに、自分の姉妹の兄弟のヴワディスワフを支援するために派遣した。〔ヴワディスワフ〕は年下の兄弟である〈ボレスワフの子〉と戦っていたのである。かれらはチェルンスク<sup>242)</sup>(Черньск)で全員が合流して、掠奪を行い、帰国した。捕虜としたのは、軍人よりも民間人が多かった<sup>243)</sup>。

## 6651〔1143〕年

チェルニゴフの主教にオヌフリイが叙任された。

その年、フセヴォロド[C41]は、自らの息子スヴァトスラフ[C411:G]に、ポロツクの公ヴァ

239) この段落の記事については『ラヴレンチイ年代記』1142年の項に同様の記述があるが、ペレヤスラヴリとトゥーロフの公座就位については「1月1日〔1143年〕のことであった」と補足の文言がある。

240) 「悲惨と貧乏」の原文は безголовие и безъмѣстѣ で文字通りは「頭を置く場所も身を置く場所もない」ということ。

241) この結婚に関する記事は前年(1141年)の項にもある。同じ出来事についての由来が異なり年代に1年のズレがある二本の記事をともに採用してしまった、編集上の不注意によるものだろう。結婚の時期については、1141年か1142年かは定めがたい。本稿注211を参照。

242) チェルンスク(『ラヴレンチイ年代記』では Черньск、ポーランド語で Czernieck (Czernieczk, Czerniczsk))は現在のワルシャワから約40km南方に位置するマゾフシエ地方ヴィスワ川沿岸の古い集落で、現在のチェルスク(Czersk na Wisła)を指すと考えられる。[Goranin 1995: S. 38]

243) この段落の、フセヴォロド[C41]が派遣したポーランド遠征軍については『ラヴレンチイ年代記』に並行記事があり、捕虜にしたのは「ポーランド人の民間人たち」(ляховь)という補足がある。

シリコ<sup>244)</sup> [L11]の娘を娶せた。こうして、兄弟たちはみな集まり、神を恐れぬポーランド人<sup>245)</sup>たちも〔集まり〕、フセヴォロド[C41]のもとで酒を酌み交わすと<sup>246)</sup>、解散していった。

その年の冬、イジャスラフ[D112:I]はおのれの城市<sup>247)</sup>を出発して、スーズダリの自分の叔父ユーリイ[D17]のところに向かった。そして、かれとは合意することなく<sup>248)</sup>、スモレンスクの自分の兄弟ロスチスラフ[D116:J]のところに向かい、そこから、もう一人の自分の兄弟であるノヴゴロドのスヴァトボルク[D114]のところに向かって、そこで冬を越した<sup>249)</sup>。そして、イジャスラフ[D112:I]はノヴゴロドを出ると、自分のベレヤスラヴリへと行った。こうして、自分の兄弟たちのところに滞在したのである。

その年、イジャスラフ[D112:I]は自分の娘をポロツクのログヴォロド・ポリソヴィチ[L71]に娶せた。キエフ公のフセヴォロド[C41]は、妻とすべての貴族たちとともに結婚式にやって

---

244) この記事によって、6648(1140)年の項にある帝都から帰還した「公の2人の息子たち」のひとりヴァシリコ[L11]は、父(ログヴォロド[L1])の旧領であったポロツクの座に就いていたことがわかる。

245) 「ポーランド人」(ляховъ)とは、フセヴォロド[C41]の婿にあたるボレスワフ長身公(前年にフセヴォロドの娘と結婚)とその父大公ヴワディスワフ二世がキエフに招かれたと考えられる[Goranin 1995: S. 38, n. 251]。「神を恐れぬ」(безбожни)の強い調子の形容語は、この記事の編者の評価のあらわれだろう。

246) 当時、新郎のスヴァトスラフ[C411:G]はヴラジミルの支配公だったが、結婚式は父親フセヴォロド[C41]が座すキエフで行われており、伯叔父たち(イーゴリ[C42]、スヴァトスラフ[C43])も招かれている。フセヴォロド[C41]にとってこの結婚は、ポロツク公一族との和解と弟たちとの和解の両方を策する機会だったと考えられる。スヴァトスラフ[C411:G]は、ヴラジミルでの支配基盤が弱かったため、近隣のポロツクの諸公の支援を期待していたのではないか。

247) ベレヤスラヴリのこと。イジャスラフ[D112:I]は1142年春ころからヴラジミルの公座に就いていたが、1143年1月1日の講和によってベレヤスラヴリの公座に移っている。

248) キエフ公フセヴォロド[C41]と姻戚関係にあったイジャスラフ[D112:I]は、フセヴォロドと叔父のユーリイ[D17]との和議を仲介するために、スーズダリに赴いたが、ユーリイに拒否されたために、かえってイジャスラフとユーリイの間の不和が広がり、これがその後の両者の敵対とルーシの混乱の発端になったという。[Карамзин 1991: С. 121]

249) 『ノヴゴロド第一年代記』によればノヴゴロド公スヴァトボルク[D114]は1143年に「ノヴゴロドで結婚し、モラヴィアのロジェストフとクレシエニの間から妻を連れてきた」とある。これは、モラヴィア地方中部のオロモウツの(Olomouc)の支配公であったオタ二世(Ota II. Olomoucký)〈黒公〉(在位1113～1126)の公女(エウフェミエ(Eufemie)もしくはその逸名の妹)との結婚を指している。ロシアの風習では結婚式は通常収穫が終わった晩秋から冬にかけて行われることから、イジャスラフ[D112:I]のノヴゴロド訪問はこの時と一致しており、ノヴゴロド訪問は仲の良い兄弟(1137年のプスコフ行きなどで共に行動している)の結婚式に出席するのが目的としてよいだろう。([Карамзин 1991: С. 121]も参照)

きた<sup>250)</sup>。

その年、ポロツクの主教にコジマが叙任された。

その年、大きな嵐が吹いた。未だかつてなかったほどで、コテルニチ<sup>251)</sup> (Котелничь) 付近で発生した。屋敷、商品、納屋、倉庫の穀物が吹き飛ばされ、簡単に言えば、軍隊に掠奪された跡のようになり、納屋には何も残っていなかった。ある者たちは嵐で散らされた武具を沼地で見つけたという。

6652〔1144〕年

キエフの領地内のドニエプル対岸でしるしがあった。何か火の輪のようなものが天空を飛んで地上まで降り、その痕跡として巨大な蛇の形をしたしるしが残った。それは、昼の一時間ほど天空にとどまってから消えてしまった。

その年、大雪がキエフの側に降り、馬の腹の高さまで積もった。復活祭の日のことだった<sup>252)</sup>。

その年、ベルゴロドで聖使徒教会<sup>253)</sup>が献堂された。

その年、トゥーロフの主教にヨアヒム (Акимъ) が叙任された。

その年、フセヴォロド [C41] とウラジミルコ [A121] とのあいだに、息子<sup>254)</sup>を巡って諍いが起こった。かれの息子〔スヴァトスラフ [C411: G]〕がウラジミルに座していたことが原因で、二人は互い相手に罪があると責め始めた。ウラジミルコ [A121] はかれ〔フセヴォロド〕に対する十字架接吻文書を破棄した。フセヴォロド [C41] は兄弟たちを引き連れて、かれ〔ウラジミルコ〕を討つべく軍を進めた。

その年、オレーグ [C4] の息子たちは、ウラジミルコ [A121] 討伐に出かけた。フセヴォロド [C41] は二人の兄弟、イーゴリ [C42] とスヴァトスラフ [C43]、さらにウラジミル<sup>255)</sup>・ダヴィ

---

250) イジャスラフ [D112: I] の娘とログヴォロド [L71] の結婚については『ラヴレンチイ年代記』6652(1144)年の項に並行記事がある。ただし、『ラヴレンチイ年代記』には、結婚式が新婦の父の支配城市である「ペレヤスラヴリ」で行われたことが記されている。この記事にキエフ公フセヴォロド [C41] の出席が言及されていることから見ても、この結婚はすぐ前のフセヴォロドの息子スヴァトスラフ [C411: G] の結婚と同様に、ポロツク諸公との和解・連携を狙ったものと考えられる。

251) Котельница とも表記し、キエフから約 120km 南西に位置するキエフ領内の城市。

252) 1144 年の復活祭 (Великъ день) は 3 月 26 日に相当する。

253) 「聖使徒教会」(церковь Святых Апостол) とは、6 月 30 日を祝祭日とする「12 使徒の集会」(Собор 12 апостолов) の祭日に献じられた教会のこと。

254) フセヴォロド [C41] の息子スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411: G] は、1143 年 1 月 1 日の和議によってウラジミル・ヴォルィンスキイの公座に就いていた。

255) 当時は、ヴォシチジ (Въщижь) 及びオルミナ (Ормина) の公。

ドヴィチ[C34], ヴァチェスラフ<sup>256)</sup>・ウラジーミロヴィチ[D16], ムスチスラフ[D11]の二人の息子イジャスラフ<sup>257)</sup>[D112:I]とロスチスラフ<sup>258)</sup>[D116:J], スヴァトスラフ<sup>259)</sup>・フセヴォロドヴィチ[C411:G], フセヴォロドコ[F11]の二人の息子ボリス<sup>260)</sup>[F111]とグレーブ[F112], ロスチスラフ・グレーボヴィチ<sup>261)</sup>[L52], ポーランドの公ヴワディスワフ<sup>262)</sup>( Володиславъ)が, 大口たたきのウラジミルコ[A121]の討伐に向かった。そして, かれ〔ウラジミルコ[A121]〕が自らフセヴォロド[C41]のもとに〔使節団を組んで〕やって来て, 拝礼〔降伏〕するよう迫った。しかし, かれ〔ウラジミルコ[A121]〕はかれの言うことを聞くことも, 会見することも望まず, やって来て拝礼することも望まなかった。それどころか, ハンガリー人たちを援軍として引き入れた。かれには何らかの利益があったからである。

フセヴォロド[C41]は<sup>263)</sup> 城市<sup>264)</sup>のこちら側に陣取り, ウラジミルコ[A121]はあちらの側に陣取って, 丘から降った。二人の間にはベルカ(Бълка)川<sup>265)</sup>があった。フセヴォロド[C41]は, それぞれの自分の部隊の〔兵たち〕に, 〔川を渡る〕堰を築くように命じて, 翌日には, 渡河すると, ウラジミルコ[A121]の背後の丘を占領した。ウラジミルコ[A121]は, 〔敵軍が〕自分に向かってやって来ると思い, 城市の前の低地で隊列を整え始めた。この軍隊は, 狭すぎるために, かれらと戦うことは出来なかった。なぜなら, やって来ると沼地があり, ようやく丘の

---

256) 当時はトゥーロフの公。

257) 当時はベレヤスラヴリの公。

258) 当時はスモレンスクの公。

259) 当時はウラジミル・ヴォルィンスキイの公。

260) 当時, ボリス[F111]とグレーブ[F112]の両公は, 兄弟でグロドノの支配公だった。

261) ロスチスラフは当時ミンスク公だったと想定される。1119年にウラジーミル・モノマフ[D1]の手でキエフに連行され謀殺されたミンスク公グレーブ[L5]の息子。ただし, ここでは直前に書かれているグレーブ[F112]の息子[F1121]である可能性もある。

262) スヴァトスラフ[C411:G]の岳父にあたるポーランド大公ヴワディスワフ二世のこと。

263) このパラグラフから続く, 戦闘, 和議, 賠償金支払い, その同盟者への分与のエピソードは, 同年の『ラヴレンチイ年代記』に並行記事が存在する。ただし, 戦闘の始まりの描写は『ラヴレンチイ年代記』が詳しく, 本記事の戦闘の前の次の事態が記されている。①イジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]を派遣してポロヴェツ人に援軍を要請。②フセヴォロド[C41]軍はまず, おそらくガーリチの附属都市だったテレボリ(Тереболь)を攻撃し, ウラジミルコ[A121]も防衛のため進軍した。③ウラジミルの援軍のハンガリー人を指揮していたのはかれの義理の兄弟であること。④両軍はテレボリからズヴェニゴロドへ移動したこと。⑤イジャスラフ[C35]はポロヴェツ人の援軍とともにウシツァとミクーリンを占領したこと。

264) これがどの城市(град)であるかの記載はないが, 『ラヴレンチイ年代記』並行記事には直前に「フセヴォロドはズヴェニゴロドにやってきて」との文言があることから, 「ズヴェニゴロド」(Звенигородъ)であることがわかる。この城市は現在のリヴィウ(Львів)から南東約20kmに位置し, 当時のガーリチからみると北北西約85kmの遠方であった。

265) ベルカ川はズヴェニゴロド近郊を流れる小さな川で, ポルトヴァ川⇒ブク川の支流にあたる。

麓のところまで来たところ、その間にルーシの部隊は丘に登ってしまい、ペレムィシェリとガーリチから離れていったからである。これを見たガーリチ人たちは〔追撃を〕断念して、言った。「われらはここにとどまろう。かれらはそこに行ってわれらの女たちを捕獲するだろうから」。

そして、ウラジミルコ[A121]は、さっそく、イーゴリ[C42]に使者を遣って言った。「わしと〔そなたの〕兄〔フセヴォロド[C41]〕との和議の仲介をしてほしい。そうすれば、わしはフセヴォロド[C41]の死後には、そなたがキエフを得られるよう助けよう」。このように〔ウラジミルコは〕イーゴリ[C42]を騙したのである。イーゴリ[C42]はフセヴォロド[C41]にこれについて請願し始め、請願に際して怒ってこう言った。「そなたはわしに善きことを望まないのか。何のために、そなたはキエフをわしに定めたのか。わしに味方を受け入れることもさせてくれないのか」。フセヴォロド[C41]はこれを聞き入れて、その日の夕方には和を結んだ。

こうして、ウラジミルコ[A121]は城市から出て、フセヴォロド[C41]に拝礼した。フセヴォロドは自分の兄弟たちとともに、かれを迎接した。ウラジミルコ[A121]はフセヴォロド[C41]に、相手に苦勞を与えたことに対して、銀1400グリヴナ<sup>266</sup>を支払った。かれ〔ウラジミルコ〕は以前は大口をたたいていたが、最後は大金を払うことになった。これ〔支払い〕によって、〔フセヴォロドは〕納得したのである。フセヴォロド[C41]は兄弟たちとともに、かれへの十字架接吻〔の誓い〕をなし、かれと和を結ぶと、かれに対してこう言った。「これで、そなたは〔十字架〕接吻<sup>267</sup>〔の誓い〕をなした。これ以上、罪を犯すな」。フセヴォロド[C41]はかれ〔ウラジミルコ〕にウシツァ<sup>268</sup>(Ушиця)、ミクーリン<sup>269</sup>(Микулинъ)を返還すると、帰国した。フセヴォロド[C41]は銀を独り占めすることなく、兄弟たちに分け与えた。すなわち、ヴァチェスラフ[D16]、ロスチスラフ[D116:J]、イジャスラフ[D112:I]及び、かれとともにいた〔従軍した〕すべての兄弟たちに〔分け与えた〕。

その年の冬、ウラジミルコ[A121]がチスマニチャ<sup>270</sup>(Тисмянича)に狩りに出かけたとき、その時〔を狙って〕ガーリチ人たちは、ズヴェニゴロド(Звенигородъ)のイワン・ロスチスラヴィ

266) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「銀1200グリヴナ」となっている。

267) イパーチイ写本は *цѣль еси* (そなたは無傷である) となっているが、ここはフレープニコフ写本の読み *цѣловаль еси* (そなたは接吻した) を採用した。

268) ウシツァはドニエストル左岸支流のウシツァ川河口に位置する城砦。

269) ミクーリンは、ドニエストル川左岸支流セルト川河岸に位置し、テレボリから10kmほど上流(北)にある。『ラヴレンチイ年代記』によれば、ズヴェニゴロドで両軍が対峙する前に、フセヴォロド[C41]軍はウシツァとミクーリンを占領しているので、これを返還したことになる。

270) ガーリチから南東30kmほどに位置する村の名。

チ<sup>271)</sup> [A1221]のもとに使者を遣って、かれをガーリチに〔公として〕連れて来た。

ウラジミルコ[A121]はこれを聞くと、従士団を集めて、かれ〔イワン〕を討伐すべくガーリチに向かった。そして、城市の周囲を取り囲んだ<sup>272)</sup>。〔ガーリチ人たちは〕城市から出撃して激しく戦い、両軍の多くの者たちが斃れ、戦いはほとんど3週間続いた。

肉断ちの日曜日<sup>273)</sup>の夜、イワン[A1221]はガーリチ人たちを率いて、敵に向けて出撃を試み、大きな戦闘になった。イワン[A1221]の側の多くの従士が撃ち倒され、城市との間に障害が作られて、〔イワンは〕城内に帰還することができず、〔敵の〕部隊を突破してドナウ川の方<sup>274)</sup>へと逃走し、そこから平原を経由して、キエフのフセヴォロド[C41]のもとへとやって来た。ガーリチ人たちはイワン[A1221]の側について、ウラジミルコ[A121]とまる一週間戦ったが、乾酪断ちの日曜日<sup>275)</sup>にはやむなく開城せざるを得なかった。ウラジミルコ[A121]はガーリチに入城すると、多くの人々を斬り殺し、他の者たちには残酷な処刑を行った。

その年の冬<sup>276)</sup>、フセヴォロド[C41]は、ウラジミル[D]の孫娘であるフセヴォロドコ[F11]の二人の娘<sup>277)</sup>を嫁がせた。ひとりにはウラジミル・ダヴィドヴィチ<sup>278)</sup>[C34]に、ふたり目はユーリイ(Дюрь)・ヤロスラヴィチ<sup>279)</sup>[B321]に嫁がせた。二人とも同じ週に〔婚礼をあげた〕。

その年の夏、カーネフ(Канѣвъ)の聖ゲオルギイ(святой Георгий)教会がフセヴォロド公[C41]

---

271) ウラジミルコ[A121]の兄弟ロスチスラフ[A122]の息子のこと。通称イワン・ベルラドニク(Берладник)。

272) 以下に続く記述から換算するとガーリチ包囲は1145年1月28日頃である。

273) 1145年2月18日に相当する。

274) これは「ドナウ川の河口の方向へ」と解釈でき、実際はドネストル川沿いに東進し、途中で北に向けて平地帯を通過してキエフにたどり着いたのだろう。

275) 1145年2月25日に相当する。

276) 1144/1145年の冬季の出来事と考えることができる。

277) 1141年に死去したフセヴォロドコ[F11]の所領地グロドノは、それ以降キエフ公であったフセヴォロド[C41]の管理下に置かれていたと考えられ、フセヴォロド[C41]がフセヴォロドコ[F11]の遺児である二人の娘の結婚の世話をしたということだろう。また、この二人が「ウラジミルの孫」であるとは、フセヴォロドコ[F11]が1116年にウラジミル・モノマフ[D1]の娘アガーフィア(Агафия)と結婚しており、女系からみてモノマフの孫にあたることを指している。〔イパーチイ年代記(1): 263頁注114〕も参照。

278) ウラジミル・ダヴィドヴィチ[C34]は、1140年に伯父フセヴォロド[C41]のキエフ大公位就位に直接加勢しており、その功勞によりチェルニゴフ及びその付屬都市の公位に就いていた。

279) ユーリイ・ヤロスラヴィチ[B321]の父ヤロスラフ[B32]は1123年にウラジミルでの戦闘で殺害されている。その遺児ユーリイ(Дюрь)の所在や活動についての記録は年代記にはなく、突然ここで結婚の記事があらわれる。かなり後のことになるがユーリイは1157年にフセヴォロド[C41]の長子スヴァトスラフ[G]の後任としてトゥーロフ公になっていることから、当時はフセヴォロド大公の庇護下にあった可能性がある。



によって定礎された。6月9日のことであった<sup>280)</sup>。

6653〔1145〕年

フセヴォロド[C41]は自らのふたりの兄弟イーゴリ[C42]とスヴァトスラフ[C43]、さらにウラジーミル・ダヴィドヴィチ[C34]とイジャスラフ<sup>281)</sup>[C35]を〔召喚するための〕使者を派遣した。かれらはキエフにやって来た。そのとき、西方に非常に大きな星が出現し、光線を発していた<sup>282)</sup>。

<sup>283)</sup>「……ウラジーミル[D1]はその息子ムスチスラフ[D11]を自らの後にキエフ〔の公座〕に就かせ、さらにムスチスラフ[D11]は自らの兄弟ヤロボルク[D15]を〔キエフの公座に〕就かせたではないか。そこで、わたしはここに宣言する。もし神がわしを御許に召すことになったら、わたしは自分の後に、自分の兄弟イーゴリ[C42]にキエフを与えることにする」。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]はいろいろと策を巡らせたが、十字架接吻〔の誓い〕をせざるを得なかった。他方、〔フセヴォロドの〕すべての兄弟たちがフセヴォロド[C41]の屋敷の広間に座したとき、フセヴォロドはかれらにこう言った。「イーゴリ[C42]よ。兄弟たちとともに和してあることを、十字架接吻〔の誓いを〕せよ。ウラジーミル[C34]よ、スヴァトスラフ[C43]よ、イジャスラフ[C35]よ。そなたたちは、イーゴリ[C42]へ服従すること<sup>284)</sup>を十字架接吻〔の誓いを〕せよ。それも、強いられてではなく、自らの意志によって〔服従することを〕」。こうしてかれらは、一つに和して十字架接吻を行った。

〔そのときまた〕フセヴォロド[C41]はかれらに言った。「ポーランド(лядьский)の公ヴワディ

280) カーネフ(Канев)はキエフ南東約90kmのドニエプル川右岸のキエフ公領とステップの境界地帯に建てられた城市で、年代記では本記事がはじめての言及である。同年の『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ゲオルギオス」教会との言及はなく、『ラヂヴィール年代記』では「石造りの」(каменная)の語が補われ、定礎の日付は「7月9日」になっている。なお、この出来事は直前の記事と時系列が逆であるが、1144年の出来事と取るべきであろう。

281) すぐ下でイジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]に言及されるが、ここは文脈から見て、フセヴォロド[C41]にとって「兄弟」(従兄弟)にあたるイジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]を指している。

282) 記述からみて「彗星」の出現についてのものであり、実際、1145年にハレー彗星が到来していることから、これを指していることは確実である。ウィキペディア(ロシア語版)などによるとこの年の地球への最接近は1145年4月20日前後であり、フセヴォロド[C41]の兄弟諸公召集もこの頃になされたことがわかる。

283) 主要写本ではすべて、この個所に7行分の空白が認められる。これらに共通の祖本(写本)にページの欠損もしくは欠落・削除等があったのだろう。この個所は、フセヴォロド[C41]がキエフに召集した諸公への言葉の途中から始まっている。

284) 原語は даяти だが、ся を補って даяти ся (服従する、臣従する) と理解した。

スワフ<sup>285)</sup>(Володиславъ)はわしに対して、〔自分の〕兄弟たちに敵対するために〔援軍を〕要請している<sup>286)</sup>。すると、イーゴリ[C42]は言った。「そなたは行ってはいけません。わたしどもが〔ポーランドへ〕行きましょう」。こうして、イーゴリ[C42]は、自らの兄弟スヴァトスラフ[C43]およびウラジーミル[C34]とともに出発した<sup>287)</sup>。一方、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]は病気になって、〔ヴォルニニの〕ヴラジミルから<sup>288)</sup>出ることはなかった<sup>289)</sup>。スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]は出発した。

こうしてかれらはポーランドの地(лядская земля)のただ中を行き、ヴワディスワフの二人の兄弟、ボレスワフ(Болеслав)とミェシコ(Мъжек)が沼の向こうに陣を張っているところに遭遇した。この二人は〔沼を越えて〕こちら側にやって来ると、イーゴリ[C42]とその兄弟たちに〔降伏の〕拜礼をして、〔和議をなしてから〕互いに十字架に接吻して〔その遵守を誓った〕。かれらは「もし十字架接吻〔の誓いに〕違反する者があれば、その者に対しては〔神が〕すべてを見そなわすであろう<sup>290)</sup>」と言った。こうして、二人〔ボレスワフとミェシコ〕は自らの兄弟ヴワディスワフに4つの城市<sup>291)</sup>を譲渡し、イーゴリ[C42]とその兄弟たちにはヴィズナ<sup>292)</sup>(Визна)を譲渡した。こうして、かれらは、多くの捕虜を獲得して、帰還を果たした。

---

285) ヴワディスワフ(二世、亡命公)(Władysław II Wygnaniec)は、フセヴォロドの娘を妻としていた息子のボレスワフ(一世、長身公)を、1144年にキエフに派遣して、弟たちとの領土を巡る闘争への援軍を要請していた。

286) ヴワディスワフの息子でシレジア大公のボレスワフ(1141年にフセヴォロド[C41]の娘を娶っている)は、異母弟のボレスワフ(四世)及びミェシコ(三世)と不和にあったが、継母サロメアの死後にかの女の所領であったウエンチツァをめぐる内紛がこの二人の兄弟間で生じた。ヴワディスワフはボレスワフ(四世)側について、嫁の父親に援軍を要請したのである。

287) 同年の『ラヴレンチイ年代記』には「その年の夏、イーゴリが別の兄弟たちを助けるために、自分の兄弟たちとポーランドへ(на ляхы)討伐に行った」と非常に短い記事があるだけである。

288) ヴラジミルは当時スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]の所領だった。このときイジャスラフ[D112:I]は、一時的に、甥(姉妹マリア=エフロシニヤの息子)であるスヴァトスラフのもとに滞在していたということか。

289) イジャスラフ[D112:I]は、ヴワディスワフ亡命公と敵対している陣営と婚姻同盟を持っていたことから、仮病をつかった可能性も考えられる[Goranin 1995:41. n. 282]。

290) この文言は本来なら на того быти(Бог за) всимъ となるところで、この宣誓の形式は、1140年のフセヴォロド[C41]とアンドレイ[D18]との十字架接吻の誓いの記事にも見ることができる。本稿注187参照。

291) パシュートによれば、ヴワディスワフが受け取った4つの城市は、シエラジ(Sieradz)、ウエジツェ(Łęczycę)、カリジ(Kalisz)、グニェズノ(Gniezno)と推定されている。[Пашут 1968: C. 154] [Goranin 1995:42. n. 284]。

292) ヴィズナ(Визна: Wizna)は、グロドノから西南110kmほどのマゾフシェ地方に位置する城市。

その年の冬、ヤロスラフ [C5] の息子スヴァトスラフ<sup>293)</sup> [C51] がムーロムで死んだ。その兄弟のロスチスラフ<sup>294)</sup> [C54] が公位を継いだ。リャザンにはロスチスラフ [C54] の下の息子のグレーブ [C542] が派遣された。

その年の冬、ポーランドの公ヴワディスワフは、自らの高官ピヨトル<sup>295)</sup> を捕らえてその眼を潰し、その舌を切り取り、その屋敷を強奪し、その妻と子供のみを伴わせてその領地から追放した。〔かれピヨトルは〕ルーシにやって来た。これは福音書の句「あなたは、自分の量る秤で量り与えられる<sup>296)</sup>」が言っている通りである。かれ〔ピヨトル〕はルーシの公ヴォロダリ [A12] を騙して捕らえ、かれを苛み苦しめ、その財産をすべて取り上げたが、神は数日のあいだかれ〔ヴォロダリ〕を顧みることはなかった。かれについては、前の時代の〔記事に〕記されている<sup>297)</sup>。

その年の夏、ヤース人の篤信のオレーナ (Олена) 公妃<sup>298)</sup> が、自らの〔夫〕ヤロポルク [D15] 公〔の遺骸を〕棺からアンドレ教会へ移し、ヤンカの隣に埋葬した<sup>299)</sup>。

293) このスヴァトスラフ [C51] は、1129 年に父ヤロスラフ [C5] がムーロムで没した後、この年 (1145 年) に没するまでムーロムの地の公位に就いていたと考えられるが、年代記にはその活動についての記録はない。

294) ロスチスラフ・ヤロスラフヴィチ [C54] は父が没した 1129 年からリャザンの公位に就いていた。

295) ピヨトル・ヴォストヴィチ (Piotr Włostowic) は、ポーランド宮廷の高官でボレスワフ三世 (曲唇公) に仕えていたが、その息子ヴワディスワフ二世 (亡命公) と兄弟との抗争に際しては中立的な立場を取り、とくにヴワディスワフの妻アグネスとは敵対関係にあった。そして、1146 年、ピヨトルはヴワディスワフの手の者によって目潰し・舌切りという残忍な刑を受け、その後ルーシに逃れた。ルーシでは、諸公に対してはヴワディスワフとの関係を断つように進言し、結果的にヴワディスワフも抗争に敗れて亡命を余儀なくされた。

296) 『マルコ福音書』4:24 (並行『マタイ福音書』7:2) からの引用。

297) 6630(1122) 年の項に「ポーランド人たちが計略によって、ヴァシリコの兄ヴォロダリを捕らえた」という短い記事があり (本稿注 26 参照)、これを指しているものと考えられる。ドイツ・ポーランド側の史料によれば、当時、ピヨトルはオレーグ公 [C4] の娘マリアを妻としており、このヴォロダリ捕縛事件に際して遠征に参加したものの、あまり大きな役割は担わなかったという [Літопис руський, 1989: C. 198]。1122 年の事件の責任をピヨトルに帰し、1146 年にかれが受けた惨事に神の懲罰を見るのは、年代記記者の独自の立場から来るものだろう。

298) 6624(1116) 年の記事に、「ヤロポルクはヤース人の公族の娘を捕虜にして、この非常に美貌の乙女を連れ帰って妻とした」とある。「オレーナ」は「エレーナ」(Елена) の民間的な通称で、公妃の洗礼名である。[イパーチイ年代記 (1): 注 105,106] を参照。

299) 6647(1139) 年の記事に、「ヤロポルク公は逝去して、聖アンデレ教会のヤンカの修道院に安置された」とあることから、遺体は修道院内の棺に安置されたままで、埋葬式は行われていなかったのだろう。モノマフの姉妹の名で呼ばれる「ヤンカの修道院」の聖アンデレ教会は、6639 [1131] 年に建設 (献堂) されたモノマフ一族のいわば菩提寺である。本稿注 113 を参照。『ラヴレンチイ年代記』にも並行記事がある。なお、これは 1145 年夏の出来事であり、時系列から言えば前に置かれるべき記事である。

6654〔1146〕年

フセヴォロド[C41]は自らの兄弟イーゴリ[C42]とスヴァトスラフ[C43]を糾合した。そして、〔スヴァトスラフを〕キエフに残して、イーゴリ[C42]とともにガーリチに向かった<sup>300)</sup>。ダヴィド[C3]の二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕、ウラジーミル<sup>301)</sup> [C34]、ヴァチェスラフ・ウラジーミロヴィチ[D16]も率いていた。また、ムスチスラフ[D11]の二人の息子で、かれ〔フセヴォロド[C41]〕の又従兄弟の息子たち<sup>302)</sup>にあたるイジャスラフ[D112:I]とロスチスラフ[D116:J]を、さらに、自分の息子スヴァトスラフ[C411:G]、ポーランドの公で自分の婿であるボレスワフ<sup>303)</sup>、そして原野のポロヴェツ人<sup>304)</sup>たちを、みな引き連れていた。このように非常に多数の兵を擁して、ウラジミルコ[A121]討伐のためにガーリチへと向かったのである。

雨が降り、霽(みぞれ)が滴り落ちてきた。これは神意によるものだった<sup>305)</sup>。それゆえに、馬と橇で行軍した。

<sup>306)</sup> ……城市〔スヴェニゴロド〕に到った<sup>307)</sup>。最初の日には、城市にめぐらされている木柵を焼き払った。二日目には、〔城市を〕引き渡すこと〔降伏〕を望むズヴェニゴロドの人たち

---

300) この諸公のガーリチ遠征の原因について、『ラヴレンチイ年代記』6654(1146)年の記事には「ウラジーミル[A121]がやって来て、プリルク(Прилук)を占領した」と説明している。プリルクはウラジミル・ヴォルィンスキイ公領とキエフ公領にまたがる位置にあり、フセヴォロド[C41]はこれを領土侵犯行為として、懲罰遠征を決意したのだらう。

301) ここは諸公の言及がダブっているように見えるが、直前の「ダヴィドの二人の息子」(ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]のこと)の一人を、繰り返すことで明示したものだらう。

302) 「又従兄弟の息子たち」は原文では сыновья。二人は、フセヴォロド[C41]にとって、曾祖父ヤロスラフ[13]を共通の祖とする又従兄弟(はとこ)ムスチスラフ[D11]の息子たちにあたる。古語では兄弟・従兄弟・又従兄弟など広い意味での「兄弟」(брат)の子供はすべて сыневец と呼んでいた。この個所では、この語によって、二人が親族関係においてもフセヴォロドの下位にあり、かれに服従すべきことが強調されているのだらう。

303) フセヴォロド[C41]の娘ズヴェニスラーヴァ(Звенислава)(洗礼名アナスタシア)の結婚相手(1141年頃結婚)であるポーランド人のボレスワフ(一世、長身公)は、当時、父のヴワディスワフ二世の命令によって、援軍要請のためにキエフに派遣されていた。本稿注 285 参照。

304) 「原野のポロヴェツ人たち」(половцы дикие)とは、ドン川とドニエステル川に挟まれたステップ地帯に展開し、ルーシに服属していたポロヴェツの集団を指している[Goranin 1995:43. n. 296]。

305) 『ラヴレンチイ年代記』によると、フセヴォロド[C41]によるガーリチへの遠征部隊は、「ボリスの日」(с Бориша дни)(すなわち、ボリス＝グレーブ移葬の記念日である5月2日のこと。ベレシコフ[Berezkov 1963: C.60]や『ラヴレンチイ年代記』の邦訳[スーズダリ年代記訳注II]:23頁、注53]はこれを7月24日としているが、長途の遠征をこのような短期間に終わらせることは不可能である)にキエフを出発して、7月28日頃には帰還している。春の雪は珍しかったので、年代記記者はとくに「神意によるもの」と付記したのだらう。

306) この個所でも、主要写本では、7と3分の1行分の欠落が認められる。

307) 欠落のあとには、討伐遠征軍によるズヴェニゴロド包囲戦の描写が続いている。

(звенигородьчи)が民会を開いた。その中にウラジミルコ[A121]の側近でイワン・ハルデエヴィチ(Иванъ Халдѣевичъ)という男がいた。かれはかれら〔住民〕の中から三人の有力者を捕らえ、これを打ち殺し、一人ずつ床に斬り伏せると、〔その死体を〕城壁から投げ落とした。このようにして、かれら〔住民〕を威嚇したのである。その時から、正攻法でのズヴェニゴロド人ととの戦闘が始まった。フセヴォロド[C41]はこれを見て、城市〔ズヴェニゴロド〕の占拠を急ぎ始めた。

三日目に全軍が城市に突撃を開始し、早暁から夕方遅くまで戦いが繰り広げられ、城内の3箇所が炎上した。城市の住民たちは、神の助けによってこれを鎮火した。神と聖なる聖母は凶暴な軍勢<sup>308)</sup>から城市を救ったのである。〔人々は〕「主よ憐れみ給え<sup>309)</sup>」の祈りを唱え、大いなる歓喜とともに、神といとも浄きその母を賛美した。これをもって、〔包圍軍側は〕それぞれに帰還した<sup>310)</sup>。

フセヴォロド[C41]はキエフに戻ると病みついた。そして、かれは遣いをやって自らの兄弟のイーゴリ[C42]とスヴァトスラフ[C43]を呼び寄せた。病は重篤だった。〔フセヴォロドは〕ヴィシェゴロド郊外の中州に滞在した<sup>311)</sup>。そして、フセヴォロド[C41]はキエフの民を呼び寄せて、こう宣言した。「わしはひどく病んでいる。そなたたちは、ここにいるわが兄弟のイーゴリ[C42]に服従するがよい」。かれらは言った。「公よ。喜んで従います」。こうして、人々はイーゴリ[C42]を受け入れて、ともにキエフへ向かった。

〔イーゴリは〕かれらとともに〔キエフの〕ウゴルスコエ〔丘〕<sup>312)</sup>のところまで来ると、キエフの民をみな呼び寄せた。かれらはみな、かれ〔イーゴリ〕に〔忠誠を誓う〕十字架接吻を行って、「そなたはわれらの公です」と言った。こうして、まやかしをもってかれに服従した

308) キエフ大公フセヴォロド[C41]が指揮する遠征軍を「凶暴な軍勢」(от лютыя рати)と呼んでいるのは奇妙な感じがするが、これは神意による城市防衛の場面で敵について使われる定型句であり、『原初年代記』988年の記事の皇女アンナ婚約のエピソードでも使われている。

309) 原文は курии елисонъ で、これは典礼で繰り返し唱和されるギリシア語の祈捧句 Κύριε ἐλέησον (主よ、憐れみ給え) 音写したもので、ズヴェニゴロドの住民による教会での典礼の祈りを指している。

310) 遠征軍の撤退は、聖母の奇蹟(鎮火)に恐れをなしたことが原因のような書き方がなされている。この『イパーチイ年代記』の遠征に関する記事は、遠征の妨害になる雨や霽を「神意による」とするなど、籠城側の、フセヴォロド大公に好意的ではない資料がそのまま利用されているようである。

311) ドニエプル川の中州に大公の離宮が建てられていたということだろう。

312) 「ウゴルスコエ」(Угорское)はキエフの丘から南へ5kmほどの丘の地名。『原初年代記』6406(898)年の記事に「ウグリがいまウゴルスコエと呼ばれる丘を通してキエフの傍を通過し、ドニエプルについて幕舎を張りどどまった」という記事があり、この地名はマジャール=ハンガリー人(угры)の移動の記憶と結びついている。

のである<sup>313)</sup>。

翌日<sup>314)</sup>、イーゴリ[C42]は馬でヴィシェゴロドに行った。ヴィシェゴロドの民も、十字架接吻をして、かれに〔服従を誓った〕。フセヴォロド[C41]はまだ生きていた。かれは、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ<sup>315)</sup> [D112:I]に対して、自らの女婿であるヴワディスワフ<sup>316)</sup> (Володислав)を派遣した。また、ダヴィド[C3]の二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕に対しては、ミロスラフ・アンドレヴィチ<sup>317)</sup>を派遣した。〔使者たちは〕こう言った。「そなたたちは、十字架接吻によるわが兄弟のイーゴリ[C42]を守るつもりはあるか<sup>318)</sup>」。すると、「守ります」という回答があった。

その翌日、フセヴォロド[C41]は逝去した。8月1日だった<sup>319)</sup>。その遺骸は布に包まれて、二人の殉教者〔ボリスとグレーブ〕の教会<sup>320)</sup>に安置された。イーゴリ[C42]はキエフにやってくると、キエフ人<sup>321)</sup>をみな丘の上のヤロスラフ宮殿に呼び集めた。〔キエフ人は〕かれ〔イーゴリ〕に対する十字架接吻〔の誓い〕を行った。

再び、キエフ人はみな、トゥールの御堂<sup>322)</sup>のところに集まった。そしてイーゴリ〔C42〕を呼ぶための使者を遣って、「公よ、われらのところに來たれ」言った。イーゴリは自らの兄弟スヴァトスラフ[C43]を連れて出発し、自らの従士団とともに幕営を張った。そして、自分の

---

313) この文言は、イーゴリ[C42]のキエフ大公就位直後に勃発したキエフ住民のイーゴリへの反乱をふまえたものである。

314) 1146年7月30日に当たる。

315) 当時はヴラジミル・ヴォルィンスキイの公だった。

316) ここは年代記記者の明らかな誤記で、フセヴォロド大公の婿は「ボレスワフ」(Болеслав)である。本稿注211, 241を参照。

317) この「ミロスラフ」(Мирослав)はフセヴォロドの側近貴族と考えられる。

318) 6653(1145)年記事の冒頭で、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I]、ウラジーミル [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] はそれぞれにイーゴリ [C42] に服従することを誓っており、ここではそのことを指している。

319) 1146年8月1日に当たる。ただし『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、フセヴォロドの死の日付は7月30日になっている。

320) ヴィシェゴロドのボリス＝グレーブ教会のことで、1115年には石造に改築され、移葬の儀式が諸公によって執り行われている。

321) 以下も含めて、この場面で「キエフ人」(княне)と言うときには、民会で評議をするような有力者たちを指している。

322) キエフの民会の開催場所である「トゥールの御堂」(Туровская Божница)の名の由来はボチャイ川に注ぐトゥーレツ川(речка Турец)によっており、「御堂」(божница)はキリスト教聖堂の民衆的呼称と考えられる。ザクレフスキイの考察 [Закревский 1858: С. 846-851] 以来、これは、当時下町のポドール地区に存在した「ボリス＝グレーブ教会」の別称であるというのが定説になっている。このことは、戦後の考古学的発掘によって、遺構が確認されている [Goranin 1995: S.43, k 314][Kaprep 1961: С. 464]。

兄弟スヴァトスラフ[C43]を、使者として民会の〔キエフの〕人々のもとに派遣した。キエフ人は、罪状を並べ立てて、フセヴォロド[C41]の代行官<sup>323)</sup> ラトシャ<sup>324)</sup> (Ратьша)とヴィシエゴロドにおけるもうひとりの代行官トゥードル(Тудор)を非難し始めた。かれらは言った。「ラトシャはわれらをキエフで破滅させた。トゥードルはヴィシエゴロドでだ。スヴァトスラフ公[C43]よ、われらに対して、そなたの兄弟に代わって、十字架接吻〔の誓い〕をせよ。もし、われらに害をなす者があれば、そなたはこれを償え」。スヴァトスラフ[C43]はかれらに言った。「わしは兄弟にかわって、そなたたちにかなる実力行使もしないという十字架接吻〔の誓い〕をしよう。また、そなたたちと代行官の問題に関しては、そなたたちの好きなようにするがよい」。こうして、スヴァトスラフ[C43]は馬から降りて、その場の民会でかれらに対して十字架接吻〔の誓い〕をした。

キエフ人たちもみな馬から降りると、「そなたの兄弟とそなたに」と言って、宣誓を始め、その場で、キエフ人は身分の低い者たちともども、イーゴリ[C42]に対してまやかしではない、スヴァトスラフ[C43]に対しても〔同様の〕十字架接吻を行った。

そして、スヴァトスラフ[C43]はキエフの最有力者たちを連れて、ともに自らの兄弟イーゴリ[C42]のもとへと向かった。そしてかれは言った。「兄弟よ。わしはその場で、この者たちに対して十字架接吻をして、わしはそなたに対して嘘偽りなく、そなたと和してあること〔を誓った〕」。イーゴリ[C42]は馬から降りると、かれらに対して、かれらの意志、兄弟の意志を〔尊ぶことを〕十字架接吻〔で誓った〕。そして、〔自分は〕馬で聖体拝領<sup>325)</sup>へと向かった。

かれら〔キエフ人〕はラトシャの屋敷と執行官<sup>326)</sup>たち〔の財産〕を掠奪するために殺到した。イーゴリ[C42]は自分の兄弟スヴァトスラフ[C43]に従士団を率いさせて派遣し、ようやくこれを鎮静させた。

この時、イーゴリ[C42]はイジャスラフ[D112:I]に使者を遣ってこう言った。「神はわれらが兄弟〔フセヴォロド[C41]〕を御許に召した。そなたは十字架接吻を守るか」。かれ〔イジャスラフ〕はこの言葉に対して返答を与えず、〔自らの〕使者をかれ〔イーゴリ〕に遣うこともしなかった。

323) 「代行官」(тиун)は、古ノルド語で「使用人」を意味し、キエフ・ルーシ時代のノヴゴロドやキエフでは、公や貴族のための徴税などの経済活動を代行する上級の役人を指していた。[C9-1 C. 400]

324) フセヴォロドの代行官を勤めていた「ラトシャ」の洗礼名は「ステパン」(Степан)でキエフの有力貴族。民衆の恨みをかかって襲撃されたときには、息子のミハイル(ヤクーン)をキエフに残して、ノヴゴロドに逃亡したとされている[C9-1 C. 400]。

325) 8月6日の「主の変容祭」(Преображение Господне)の聖体礼儀の儀式で聖体拝領に与ることを指すと考えられる。大きな祭日において聖体儀礼に臨むことは、キエフ公にとっては重要な儀式だった。

326) 「執行官」(мечники)とは、公や貴族の命令によって、裁判や強制取り立てなどの執行にあたる宮廷の下級役人のこと[C9-1 C. 400]。

キエフ人にとってイーゴリ[C42]は〔公として〕意に適う者ではなかった。かれらは、ペレヤスラヴリのイジャスラフ[D112:I]に使者を遣って言った。「公よ。われらのもとに来たれ。われらはそなたを〔公として〕望んでいる」。イジャスラフ[D112:I]はこれを聞き入れて、自らの軍勢を集めると、かれ[イーゴリ]を討つべくペレヤスラヴリを出発しようとした。かれは、〔ペレヤスラヴリの〕〔大天使〕聖ミハイル〔首座〕教会で主教エフィーミーイ<sup>327)</sup>の祈禱を受けた。

そして、ザループ<sup>328)</sup>(Заруб)のところでドニエプル川を渡河した。そのときかれ〔イジャスラフ〕の〔援軍として〕黒頭巾族<sup>329)</sup>とロシ川<sup>330)</sup>の民がみな派遣されていた。かれら〔の使者〕は言った。「そなたはわれらの公である。われらはオレーグ[C4]の一族を〔公として〕望まない。速やかに来たれ。われらは、そなたとともにある」。

イジャスラフ[D112:I]はデルノヴォイ(Дерновой)に向けて出発し、そこですべての黒頭巾族とロシ川の民と合流した。その場にはかれ〔イジャスラフ〕のところにベルゴロド<sup>331)</sup>人、ヴァシレフ<sup>332)</sup>人も派遣されてきて、やはりこう言った。「行かれよ。そなたはわれらの公である。われらはオレーグ[C4]の一族を望まない」。その場にはまた、キエフ人の中から有力者がやって来て、こう言った。「そなたはわれらの公である。行くがよい。われらは、かつてのようにオレーグ一族を望んではない」。われらがそなたの軍旗を目にする場所では、われらとそなたはいつでもともに〔戦おう〕ではないか」。

イジャスラフ[D112:I]は、キリスト教徒、異教徒ともども、全軍を平原に集めると、かれらに対して言った。「兄弟たちよ。フセヴォロド[C41]は確かにわれわれの〈年長の兄弟〉だった。なぜなら、かれはわしにとって兄弟であり年長の姉妹の夫<sup>333)</sup>で、父のような存在だったのだから。これについては、神と生命を与える十字架の力の御心にまかせよう。わしは、そなたた

---

327) エフィーミーイ(Евфимий)は、1141年にペレヤスラヴリ主教に叙任され、1155年に没している。

328) 「ザループ」(Заруб)はドニエプル川をはさんでペレヤスラヴリの対岸(右岸)にある渡河地点のこと。

329) 「黒頭巾族」(чернии клобуци)は、チュルク語の「カラ・バルパク」(qaraqalpaq)の翻訳借用語で、11世紀末から、ポロヴェツ人に圧迫を受けたチュルク系諸族(トルク人、ベチェネグ人、ベレンデイ人など)がキエフ公領の南境界のロシ川(Рось)沿岸地帯に定住し、部族連合集団を形成したものの。12世紀には諸公の傭兵として内争戦にも加わっており、騎兵の外見からこのように呼ばれたのだろう。この語は年代記ではここが初出である。

330) 「ロシ川の民」(поросье, поршане)は、ロシ川(Рось)沿岸の住民のことで、この一帯に住む定住遊牧民を指している。前にある「黒頭巾族」の説明的な言い換えの言葉である可能性もある。

331) 「ベルゴロド」(Белгород)はキエフの北方10kmほどにある付属城市。[イパーチイ年代記(1):注116]を参照。

332) 「ヴァシレフ」(Василев)はキエフの付属城市。本稿注142を参照。

333) 「わしにとって兄弟であり年長の姉妹の夫」の原文は ми братъ и зять старъй мене。イジャスラフ[D112:I]にとってフセヴォロド[C41]は、諸公の年長序列(старшинство)において年長の「兄弟」であるだけでなく、自分の姉妹(エフロシニヤ)の夫であり、実年齢も上であることを指している。本稿注216及び231も参照。



ちの前で屍をさらすか、そうでなければ、祖父と父の公位を手に入れるかのどちらかである」。こう言うと、〔イジャスラフは〕かれ〔イーゴリ〕を討つべく出発した。

イーゴリ[C42]は自分の二人の兄弟、ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]に使者を遣って言った。「兄弟たちよ、そなたたちはわしへの十字架接吻〔の誓いを〕守るか」。二人は、かれに多くの領地を要求した。イーゴリ[C42]はかれらに〔領地を〕与え、自分のもとに〔援軍に〕来るよう命じた。二人はやって来た。イーゴリ[C42]はまた、ウレブ<sup>334)</sup>(Ульб)とイワン・ヴォイティシチ<sup>335)</sup>(Иван Воитишич)を呼び出すと、二人に言った。「そなたたちが、わが兄弟〔フセヴォロド〕のもとに〔仕えて〕いたときと同様に、わがもともども〔仕える〕ように」。また、ウレブに対してこう言った。「わが兄弟〔フセヴォロド〕のもとで〔千人隊〕を指揮していたように、千人隊を指揮せよ」。

狡猾きわまりない悪魔は、兄弟のあいだの和を望まず、千人隊長ウレブとイワン・ヴォイティシチの心に悪しき助言の種を植え付けた。そのため、二人は、自らの公に敵対するキエフ人に対して悪しき助言をなしたのである。そして二人は、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]に向けて使者を遣って言った。「公よ。速やかに来たれ。ダヴィドの二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕がイーゴリ[C42]の援軍に向かっている」。この二人〔ウレブとイワン〕は、かつてフセヴォロド[C41]とその兄弟〔イーゴリ[C42]〕から高い敬意を払われていたにもかかわらず、自分の公〔イーゴリ[C42]〕をあざむき始めたのである。

さて、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]は速駆けして、〔チェルニゴフに到着し、そのの〕聖救世主教会<sup>336)</sup>において、〔チェルニゴフ公である〕兄弟のウラジーミル[C34]とともに、イーゴリ[C42]およびその兄弟スヴァトスラフ[C43]へ〔忠誠を誓う〕十字架接吻をすませた<sup>337)</sup>。チェルニゴフの主教オヌーフリイ<sup>338)</sup>(Онофрий)は、自らの配下の司祭たちに向かって言った。「もし、この十字架接吻〔による誓い〕に違反する者があれば、その者は主の十二の祭日をもって呪詛

334) ウレブ(おそらく「グレーブ」(Глеб)の民衆的呼称)は、キエフ人の千人隊を率いる在地の有力者(貴族)。これ以降、イジャスラフ[D112:I]の有力な側近として活躍することになる。1147年に千人長の任を拒んだのちに没している。

335) イワン・ヴォイティシチは、代々キエフ大公に仕えてきた、おそらくキエフの在地貴族で、1116年にはモノマフ公によりドナウ川沿岸の城砦都市に派遣されている。この頃はかなり年配だったはずである。〔イパーチイ年代記(1): 262頁, 注101〕を参照。

336) 「聖救世主教会」(святой Спас)はチェルニゴフの首座教会で、1034年頃にムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ[18]によって定礎された。

337) このチェルニゴフでの十字架接吻は、あとの記述によると8月5日に行われている。

338) オヌーフリイは1143年に、府主教ミハイルの手でチェルニゴフ主教に叙任され、1145年にミハイルが諸公の内争によってキエフを去ると、1147年にクリメントが府主教座に就くまでのあいだ、実質的に府主教の職務を代行した。同1147年に没している。

されるであろう<sup>339)</sup>。実際には、何日もたたないうちに、ダヴィド[C3]の二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕は十字架接吻に違反することになる。

われわれが先に述べたような悪しき助言に、〔キエフの〕指導者たちは荷担していった。すなわち、千人隊長ウレブ、イワン・ヴォイティシチ、ラザリ・サコフスキイ<sup>340)</sup>(Лазорь Соковський)たちである。また、スヴァトスラフ[C43]の部隊においては、ポロツク人のヴァシーリイとヒリクの子孫ミロスラフ<sup>341)</sup>が、自分たちのまわりにキエフ人を集めて、いかにしたら自分たちの公をあざむくことが出来るかについて話し合いをしていた。そして、かれらはイジャスラフ[D112:I]に使者を遣って言った。「公よ。行かれよ。われらはキエフ人とすでに話し合った。われらは軍旗を棄て、部隊を率いてキエフへと転じて進むことを望む」。そして、かれらはイーゴリ[C42]とその兄弟スヴァトスラフ[C43]に対しては、あざむきの言を弄して「イジャスラフ[D112:I]に対抗せよ」と言い始めた。イーゴリ[C42]とその兄弟スヴァトスラフ[C43]は、天を仰いで言った。「イジャスラフ[D112:I]はわれらに対して、キエフ〔の公位を〕密かに狙うことはしないと〔誓う〕十字架接吻をなしたのに」。

イジャスラフ[D112:I]は、ナドヴォ湖<sup>342)</sup>(Надво озеро)のシェルヴォフの森(Шелвов борок)の土塁<sup>343)</sup>のところまでやって来た。そして、そこで部隊は陣を張った<sup>344)</sup>。土塁の傍らであり、自らの息子のムスチスラフ[I1]と一緒にだった。

〔他方〕、キエフ人たちは、別個に、オレーグの墓(Олгови могилы)<sup>345)</sup>のところ布陣した。非常な大軍だった。まだ、双方の部隊が対峙しているとき、イーゴリ[C42]と配下の全軍を見た。

---

339) 十字架接吻による宣誓違反の懲罰規定(sanctia)として、教会の罰則(епитемия)が言及されている興味深い例である。「主の12の祭日をもつての呪詛」とは、復活祭を始めとするキリストに関係の深い12の正教の祭日に行われる聖体拝領などを禁ずることを指しているのだろう。これは、教会による最高級の懲罰を意味していた。

340) 本稿注233を参照。

341) 6654〔1146〕年記事にあるフセヴォロド側近貴族ミロスラフと同一人物の可能性もある。本稿注311を参照。

342) 「ナドヴェ湖」(Надове озеро)とも呼ばれ、ソフィア聖堂から約2.5km南西、現在のキエフ鉄道駅西側あたりに20世紀初めころまで存在し、リュベジ川の水源になっていた湖。

343) 「シェルヴォヴェ」(Шелво́ве)はナドヴェ湖近くの村の名前。ベルゴロドに続く西からの攻撃に備えるために、ナドヴェ湖の南西の岸に沿って土塁が築かれていた。

344) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、イジャスラフ軍は「そして、やって来てジェリヤニ川(Желяни)に陣を張った」とある。ジェリヤニ川はキエフの中心地からは南西に8kmほど離れており、記述に異同がある。

345) 「オレーグの墓」(Ольгова могила)はキエフの丘の北西に隣接するシチェコヴィツァの丘(Щековица)にあったと推定されている。『原初年代記』の6420(912)年の記事に「オレーグを運んで、シチェコヴィツァと呼ばれる山にかれを埋葬した、いまに至るまでそこに墓があり、オレーグの墓と呼ばれる」〔ロシア原初年代記42頁〕という記事がある。

キエフ人たちが使者を〔イジャスラフの部隊へと〕派遣し、イジャスラフ[D112:I]のもとから、一人の千人長を軍旗とともに引き取ると、自分たちの陣営へと連れて行ったのを<sup>346)</sup>。さらにまた、ベレンディ(берендичи)人たちがルイベジ川を渡り、金門<sup>347)</sup>の前の囲いのところに置いてあったイーゴリ[C42]〔軍〕の物資を奪い取ったのを<sup>348)</sup>。

これを見たイーゴリ[C42]は、自分の兄弟のスヴァトスラフ[C43]と、自分の甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]に向かって言った。「兄弟たちよ、自分の部隊へと行くがよい。われらとかれらについては、神の裁きにまかせよう<sup>349)</sup>」。また、自らの千人長ウレブとイワン・ヴォイティシチに向かって同様に言った。「そなたたちは自分の部隊へと行くがよい」。

ウレブは自分の部隊のところに到着した。イワンも同様〔に到着した〕。二人は、軍旗を投げ捨てると、ユダヤ門<sup>350)</sup>へ向かって奔走した。

イーゴリ[C42]、スヴァトスラフ[C43]、甥のフセヴォロドの子[C411:G]はこれを見たが、慌てふためくことなく、イジャスラフ[D112:I]に対して軍を進めた。しかし、ナドヴォ湖を渡って近づくことはできなかったので、湖の上流<sup>351)</sup>に向けて進んだ。そこには、湖に流れ込む小川とスハ・ルイベジ<sup>352)</sup>(Су́ха Лыбе́дь)川が合流する支流があり、部隊はその場所にはまりこんだ。その場でかれらは災難に遭った。そのとき、ベレンディ人たちが、刀剣(サーベル)を手には部隊を制圧すべく襲撃し、かれらを斬り始めた。イーゴリ[C42]とスヴァトスラフ[C43]は、

346) この段落は、キエフの住民の、イーゴリ[C42]からの離反・十字架接吻違反の裏切りについて述べている。キエフ人の大軍は、シチェコヴィツァの丘にイーゴリ軍とは別個に陣取り、イジャスラフ[D112:I]軍と対峙すると見せかけていたが、実際は内通して、イジャスラフ側の軍司令官(「千人長」)を部隊ごと受け入れて寝返った(「軍旗とともに」)のである。

347) 「金門」(Золоты́я вору́га)は、キエフ城(ヤロスラフ城区)の南に位置し、南のトレポリヤヴァシレフへと向かう街道に通じる主要な城門。『原初年代記』によれば1037年にヤロスラフ賢公の手で建設されている。

348) このベレンディ(берендичи)人については、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事に「〔イジャスラフ[D112:I]〕のところで、幾人かのベレンジェイの人々がやってきた」[スーズダリ年代記訳注[II]:24頁]とある、イジャスラフ軍に合流した少数のベレンディ人部隊を指している。かれらは途中からイジャスラフの本隊から離れて、別個にキエフ城に迫り(「ルイベジ川を渡り」)、金門を襲撃したのだろう。本稿注13も参照。

349) 十字架接吻の誓いを破ったイジャスラフ[D112:I]やキエフ人たちには、神の懲罰が下るだろうという意味。

350) ユダヤ門(жидовскы́я вору́га)は、主要地区であるヤロスラフ城区とコピレフ区を結ぶ門で、ウレブ等はコピレフ区を経由して坂を降り、その隣のシチェコヴィツァの丘に陣取って、すでに寝返っていたキエフ人の部隊への合流を図ったと考えられる。本稿注23も参照。

351) 湖の南にあるルイベジ川の源流の水門とは反対側、湖の北へと迂回したということ。

352) 「スハ・ルイベジ」(Су́ха Лыбе́дь)は、北からナドヴェ湖へ流れ込む小川で、文字通りでは「涸れた川」であることから、夏場は水流が少なく、部隊が通り抜けるほどの空間があったのだろう。

ドロゴジチェ (Дорогожьчеськия)の崖<sup>353)</sup> へ向かって逃げ出した。

イジャスラフ [D112:I]とその息子ムスチスラフ [I1]は、自らの従士団とともに、側面からかれらを襲撃し、斬り始めた。〔イーゴリ等の部隊は〕四散した。イーゴリ [C42]には同行するものは誰もいなくなった。イーゴリ [C42]はドロゴジチの沼へと逃げ込んだが、かれの馬ははまり込んでしまい、抜け出すことができなかった。脚に怪我をしていたのである。かれの兄弟スヴァトスラフ [C43]は、ドニエプル川を渡ってデスナ川河口まで逃げた。他方、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]は、キエフ城内の聖イリーナ (святая Ориня)修道院<sup>354)</sup>に逃げ込んだ。そこでかれは捕えられた。

〔キエフの人々は〕かれらを追って、ドニエプル川のデスナ川の河口にあるヴィシェゴロドのキエフ側の渡し場まで到達すると、かれらを斬り殺し、また、水中に突き落とした。多くの者が斃れた。

ムスチスラフ [D11]の子イジャスラフ [D112:I]の、キエフにおける公支配のはじまり。

イジャスラフ [D112:I]は天を見上げ、神と生命を与える十字架の力が、このように助けたことを称賛した。そして、大いなる栄光と栄誉とともにキエフに入城した。多くの民衆、典院と修道士たち、祭服を着たキエフ中の司祭たちが城門を出てかれを迎えた。〔イジャスラフは〕聖ソフィア聖堂に到着して、聖なる聖母に拝礼した。かれは自らの祖父、自らの父の〔公〕座に就いた。そして、スヴァトスラフ [C411:G]を連れてこさせると、かれに言った。「そなたはわしにとって身内である姉妹の子〔甥〕ではないか<sup>355)</sup>」。こうしてかれを自分のそばにおくようになった。そして、多くの貴族を逮捕した。それは、ダニール・ヴェリーキイ、ユーリイ・プロコーピチ、イヴォル・ユーリエヴィチ、ミロスラフの孫などだった。キエフの城内の他の多くの者も逮捕した。そして、身代金を払った者は釈放した。

これはまさに、神の助け、尊い十字架の力、〔大天使〕聖ミハイルの助力、聖なる聖母の祈りによるものである。この戦闘があったのは、8月13日火曜日のことだった。

イーゴリは4日目に沼で捕まり、イジャスラフ [D112:I]のもとに連行された。〔イジャスラフ

---

353) 「ドロゴジチェ」(Дорогожище)はキエフの北に面して広がる沼沢を含む一帯の名称。北方に向かう街道がここを通過しており、ヴィシェゴロドに行くことができた。隆起の激しい地形で崖も多かったか。ただし、「崖」と訳した Слудов は固有の地名の可能性もある。

354) ヤロスラフ賢公がその妃(インゲルダ)(1050年没)の守護聖人聖イリーナ(Св. Ирина)を祀って、ソフィア聖堂の近くに建てたとされる修道院のこと。

355) 「わしにとって身内である姉妹の子ではないか」(свой ми еси сестричичь)は、スヴァトスラフ [C411:G]が、イジャスラフ [D112:I]の姉妹マリア(エフロシニヤ)とフセヴォロド [C41]の息子であることを指している。本稿注 327 も参照。

は] かれをヴィドヴィチの修道院<sup>356)</sup>に送り、鎖をかけると、さらにペレヤスラヴリへと送り、聖ヨハネ修道院<sup>357)</sup>の土牢に投じた<sup>358)</sup>。

キエフ人たちはイジャスラフ [D112:I]とともに、イーゴリ [C42]とフセヴォロド [C41]の従士たちの屋敷を掠奪した。また、村、家畜、屋敷や修道院の財産を強奪した。

さて、スヴァトスラフ [C43]は小勢の従士たちとともにチェルニゴフへと逃亡し<sup>359)</sup>、二人の従兄弟ウラジーミル [C34]とイジャスラフ [C35]に使者を遣ってこう言った。「兄弟よ。そなたたちは、十字架接吻を守るか。〔8月〕5日に接吻した誓いのことである<sup>360)</sup>」。二人は〔使者を通じて〕言った。「われらは守る」。スヴァトスラフ [C43]はかれらに言った。「そなたたちが密議をなさないために、わが家臣のコスチャシコ<sup>361)</sup> (Къстяжко)をそなたたちのもとに留め置こう」。そして、〔スヴァトスラフ〕自身は民を保安する<sup>362)</sup>ためにクルスクへと向かい、そこからノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へ来た<sup>363)</sup>。

ポロヴェツの諸侯はイーゴリ [C42]の身の上で起こったことを聞いて、イジャスラフ [D112:I]へ使者を遣って和議を請うた。

そして、ダヴィド [C3]の二人の息子〔ウラジーミル [C34]とイジャスラフ [C35]〕はこのスヴァトスラフ [C43]の家臣にかくれて密かに企みを始めた。

スヴァトスラフ [C43]の家臣のコスチャシコ (Ксвятко)へ通報があった。ダヴィド [C3]の二人の息子〔ウラジーミル [C34]とイジャスラフ [C35]〕が、その〔従〕兄弟スヴァトスラフ [C43]を捕らえようと企んでいるというのである。コスチャシコは自分の公〔スヴァトスラフ [C43]〕

356) 大天使ミハイルに献堂された「ミハイル＝ヴィドゥビツキイ修道院」(Михайло-Выдубицкий монастырь)のことで、キエフの丘から南東に5.5kmのドニエプル川河岸に現存している。代々モノマフ一族の庇護下にあった。〔イパーチイ年代記(1):237頁〕参照。

357) ペレヤスラヴリの郊外にある小修道院と思われるが所在は不明。

358) ここまでのイーゴリの逮捕・投獄については『ラヴレンチイ年代記』に同一の並行記事があるが、ここでは「かれ〔イーゴリ〕に見張りがつけられた。こうして、イーゴリの治世が終わった」という追加の文言がある。

359) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、スヴァトスラフ [C43]はキエフからすぐに、ノヴゴロド・セヴェルスキイへと逃れたことになっている。当時、チェルニゴフはウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]の所領だったことから、ノヴゴロド・セヴェルスキイへ逃げる途中でチェルニゴフの付近に幕営して、そこからチェルニゴフのウラジーミルへ使者を送ったということか。

360) チェルニゴフの聖救世主教会で行った十字架接吻のことを指している。本稿注331を参照。

361) コンスタンチン (Константин)の通俗的な表記。スヴァトスラフ [C43]配下の貴族で、使者として(もしくは使者に同行して)チェルニゴフのウラジーミル [C34]のもとに行き、そこに留まったと考えられる。

362) 「民を保安する」と訳した *устанавливать людей* は、ソロヴィヨフによれば、都市の住民から公としての自分への忠誠を誓わせる行為を指すという [Соловьев 1988: С. 430]。

363) 当時、ノヴゴロド・セヴェルスキイは、スヴァトスラフ [C43]の支配領地の中心城市だった。

へ使いを遣って、こう言った。「公よ、そなたについて謀議がなされ、そなたを捕らえようとしています。もし、二人の〔従〕兄弟がそなたを呼び出すための使者を送ってきても、かれらのところへは行かないように」。

人を惑わす狡猾な悪魔は、兄弟の間に善き事を望まず、悪に悪を重ねることを望み、二人にはかりごとを吹き込んだのだった。すなわち、〔従〕兄弟のイーゴリ[C42]を探しだすことはせず、〔イーゴリが〕父にあたる者であることも、十字架の約束を思い出させることもせず、「兄弟たちは、父たる者に従って、仲良く共に暮らすのが美しい<sup>364)</sup>」という神の愛を思うこともないよう、二人に仕向けたのである。その反対に、〔二人は〕十字架の約束を破って、神への畏れを忘れたのだった。

かれら〔二人は〕イジャスラフ[D112:I]に使者を遣ってこう言った。「イーゴリ[C42]はそなたに対して悪意を持っていたが、同様にわれらにも悪意を持っていた。かれ〔イーゴリ〕をしつかりと監禁せよ」。他方、〔二人は〕スヴァトスラフ[C43]に使者を遣ってこう言った。「ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕からプチャーヴリ<sup>365)</sup>(Путивль)へ行け。兄弟のイーゴリ[C42]のことは放っておけ」。〔これに対して〕スヴァトスラフ[C43]は言った。「わしは領地<sup>366)</sup>は望まない、兄弟〔イーゴリ[C42]〕をわしのもとに返してくれれば、他にはなにも望まない」。二人はこう言い返した。「十字架接吻によって、兄弟〔イーゴリ[C42]〕の返還を求めないこと、かれの探索をしないことをわれらに誓え。そうすれば、領地は保持してよい」。

スヴァトスラフ[C43]は涙を流して、スーズダリのユーリイ[D17]のもと<sup>367)</sup>に使者を遣って言った。「神はわが兄弟フセヴォロド[C41]を御許に召された。また、イーゴリ[C42]はイジャスラフ[D112:I]に捕らえられた。ルーシの地、キエフへと来たれ。どうか、わしを憐れんで、兄弟〔イーゴリ[C42]〕を探し求めてほしい。わしはここで、神と命を与える十字架の力をより頼んで、そなたに助力を与えることができるだろう」。

その頃、神の憐れみによって、ヤロスラフ[C5]の孫であるウラジーミル・スヴァトスラヴィチ[C511]が伯父〔ロスチスラフ[C54]〕のもと<sup>368)</sup>から逃げ出してノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕のスヴァトスラフ[C43]のところに身を寄せていた。そのとき、イワン・ベルラドニ

---

364) 『詩編』132:1(邦訳133:1)「見よ、兄弟がともに座っている。なんという恵み、なんという喜び」あるいは『シラ書(集会の書)』25:1「主にも人にも美しい、仲良く暮らしている兄弟」の部分をもふまえたもの。

365) デスナ川の支流セイム(Сейм)川右岸の城市。ダヴィドの二人の息子たちは、スヴァトスラフ[C43]にノヴゴロド・セヴェルスキイの明け渡しを要求したのである。

366) この使者を通じての会話での「領地」(волость)はノヴゴロド・セヴェルスキイの城市とその周辺地を指している。

367) ユーリイは当時はスーズダリ公だった。

368) ロスチスラフ[C54]は1145年末からムーロムの公位に就いていた。

ク<sup>369)</sup> [A1221]も部隊を離れて、かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕のところにやって来ていた。

その頃、スヴァトスラフ[C43]は ポロヴェツ人の〔首長である〕母方の伯叔父たち<sup>370)</sup>のところに使者を遣った。そして、かれら〔ポロヴェツ人〕300人が急いでかれ〔スヴァトスラフ[C43]〕のもとにやって来た。

さて、イジャスラフ[D112:I]は、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]に十字架接物の誓いをさせたあとで、かれにブジスキイ<sup>371)</sup> (Бужьскій)とメジボジエ<sup>372)</sup> (Межибожье)などの5つの城市を与えた。そして、ヴラジミルからは、かれ〔スヴァトスラフ[C411:G]〕を呼び戻した。

ヴァチェスラフ[D16]はこのことを耳にすると、〔自分が〕最年長であることに望みをかけて、自らの貴族たちの進言を容れて、イジャスラフ[D112:I]には敬意を払わず、かつてフセヴォロド[C41]がかれから取り上げた諸城市を再び取り返した。さらには、それだけにとどまらず、ヴラジミルの城市を占拠し、そこにアンドレイ[D18]の息子〔ウラジーミル[D181]〕を公座に据えた。

イジャスラフ[D112:I]はこれを聞くと、〔父方の〕叔父ヴァチェスラフ[D16]に対抗するために、自らの兄弟ロスチスラフ[D116:J]とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]を派遣した。そして、かれ〔ヴァチェスラフ[D16]〕からトゥーロフの城市をとりあげ、トゥーロフの主教ヨアキム(Акима)、〔ヴァチェスラフ[D16]〕の代官ジロスラフ・ヤヴァンコヴィチ(Жирослав Яванкович)を追放して、トゥーロフには自分の息子のヤロスラフ[I2]を公座に据えた<sup>373)</sup>。

ダヴィド[C3]の二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕は言った。「われら

369) イワン [A1221] は 1144 年に伯叔父のウラジミルコ [A121] から一時的にガーリチを奪取したが、戦いに敗れてキエフに逃げのび、フセヴォロド [C41] のもとに身を寄せていた。キエフ攻防戦では、イーゴリ [C42] について防衛戦を戦ったと思われるが、敗戦後はキエフに在ることができなくなり、スヴァトスラフを頼ってノヴゴロド・セヴェルスキイに來たのだろう。

370) 『原初年代記』6615(1107)年の記事に「オレーグ [C4] がアエパおよびもう一人のアエパのもとに行き、和を結んだ。そこでウラジーミル [D1] アエパの娘でオセニの孫娘である女をユーリイ [D17] の嫁にとり、また、オレーグ [C4] 自身はアエパの娘でギルゲニの孫にあたる女を嫁に取った」とある。これがスヴァトスラフ [C43] の母親であり、かれはポロヴェツの首長をしていたアエパの息子たち（自分にとっては伯叔父）に救援を要請したことになる。

371) 「ブジスキイ」は「ボシスキイ」(Божский)とも表記され、ブク川 (р. Буг) 上流左岸にある城市。キエフ公領とヴォルィニ公領の境界付近の位置している。

372) 「メジボジエ」はボシスキイから西 60km ほどに位置する、やはりブク川 (р. Буг) 上流左岸にある城市。

373) ここまでの、ヴァチェスラフ [D16] の動きとイジャスラフ [D112:I] の反撃については、『ラヴレンチイ年代記』に並行記事がある。

は事を悪く始めてしまったので、最終的には兄弟殺しを行おう。さあ、出かけて行って、スヴァトスラフ[C43]を排除し、かれの領地を取り上げてしまおう」。かれらはこのようなはかりごとをなすと、イジャスラフ[D112:I]に対して、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕のスヴァトスラフ[C43]を討伐するよう頼み込んだ。

その年、イジャスラフ[D112:I]はダヴィド[C3]の二人の息子〔ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]〕のところに、評議のために赴いた<sup>374)</sup>。かれは、二人に対して「スヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]の討伐に行け」と言って、二人と一緒に自分の息子ムスチスラフ[I1]を派遣し、かれ〔ムスチスラフ〕にはペレヤスラヴリ人及びベレンディ人たちを同行させた。そして、〔イジャスラフは〕かれら〔ペレヤスラヴリ人及びベレンディ人たち〕に向かって言った。「かれ〔スヴァトスラフ[C43]〕を討伐に行け。かれがお前たちの前で〔城を抜け出して〕逃げぬようにせよ。かれの近くに布陣して待機せよ。もし、お前たちが疲労困憊したら、わしは損傷のない部隊とともにおまえたちのところに駆けつけ、かれの近くに布陣しよう。そのときには、おまえ達は帰郷するがよい」。

こうして、かれらは、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと遠征に向かった。到着すると、土塁のところに陣を張った。射手たちは本営から出て、城市のチェルニゴフ門<sup>375)</sup>へと向かった。そして、そこで激しい戦闘があった。翌朝には部隊を編成して、クルスク門<sup>376)</sup>へ向かって攻めた。ムスチスラフ・イジャスラヴィチ[I1]は、二人のダヴィド[C3]の子、ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]たちのところに使者を遣って、こう言った。「そなたたちの〔従〕兄弟、つまりわが父〔イジャスラフ〕は、『自分が来るまでは、城市へ突撃してはいけない』と言った。その取り決めのとおりにしようではないか。二人はこう言った。「もし、〔われらの〕〔従〕兄弟がそう言ったのなら、われらはそのようにしよう」。こうして、もう城壁へは近づこうとせず、近くに陣を張った。

二人のダヴィド[C3]の息子ウラジーミル[C34]とイジャスラフ[C35]、及びムスチスラフ・イジャスラヴィチ[I1]たちは集合した。全員が揃った。かれらは、自分たちの射手を城市へと向かわせ、またキリスト教徒とベレンディ人たちも派遣した。本隊の部隊は待機していた。戦闘が始まった。城内の人々はひどく圧迫されて、城郭門<sup>377)</sup>のところに押し出され、多くの者はそこで殺されたり負傷したりした。この競り合いでドミトル・ジロスラヴィチとアンドレ

---

374) ウラジーミル [C34] の所領チェルニゴフに行った可能性が高い。

375) ノヴゴロド・セヴェルスキイ城の南側の城門。

376) ノヴゴロド・セヴェルスキイ城の東側の城門。

377) 「城郭門」(Острожная ворота) は南側のチェルニゴフ門の別称。防壁を設けた城郭が設けられていた。



イ・ラゾレヴィチ<sup>378)</sup>が殺された。かれらは夕方まで戦闘を続け、そこから軍を進めて、メルテコヴォ村<sup>379)</sup> (Мелтеково село)に陣取った。そして、そこから軍を遣って、ラフニャ<sup>380)</sup> (Рахня)の森の中で、イーゴリ [C42]とスヴァトスラフ [C43]が所有していた家畜を掠奪した。それは、3000頭の雌馬の馬群と1000頭の雄馬だった。かれらは近辺の村々へ軍を遣って、穀物や家屋を焼いた。

---

378) ドミトル・ジロスラヴィチ (Дмитро Жирославич) とアンドレイ・ラゾレヴィチ (Андрій Лазоревич) はともに、攻城軍として戦っていたキエフの軍司令官。

379) 所在地は不明だが、ナソーフはノヴゴロド・セヴェルスキイからチェルニゴフに向かう街道沿いの、マロテチカ川 (река Малгечка) 付近にあったと推定している [Насонов 2002: С. 205]。

380) ウクライナ語訳の索引 [ПОКАЖЧИК] では、現在のレヴナ川 (река Ревна) 近辺の森と推定している。

## 参考文献

『キエフ年代記集成』の現代語訳には、ポーランド語訳 [Goranin 1994, 1995], ウクライナ語訳 [Літопис руський, 1989] (ウェブ版は [ІЗБОРНИК]), ロシア語訳 (抄訳) [Древнерусские летописи, 1936], 日本語訳 (ロシア語訳の邦訳) [除村] がある。翻訳の作業において、適宜これらの現代語訳を参照した。

地名、人名、事項名の注解に際しては、各種年代記テキストや現代語訳の索引 ([ПОКАЖЧИК] [Русские летописи] など)、現代語訳に付された注釈、歴史百科事典 ([СЭ-1][СЭ-2] など) やウィキペディアの関連項目、ヴォイトヴィチのルーシ公族レファレンス・ブック [Войтович 2006], Christian Raffensperger と David J. Birnbaum が運営するルーシ公族の系譜に関するサイト [Rusian genealogy] など広く参照した。煩瑣を避けるため、基本的事項については注釈で典拠を付していないものもある。

Алексеев 1966 — Алексеев Л. В. Полоцкая земля (Очерки истории Северной Белоруссии XI-XIII вв.). М., 1966.

Бережков 1963 — Бережков Н.Г. Хронология русского летописания. М., 1963. 376 с.

Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.

Воронцов-Вельяминов Б. А. К истории ростово-суздальских и московских тысяцких // История и генеалогия. — М., 1977. — С. 124—139.

Грушевський ІУЛ-2 — Грушевський М. С. Історія української літератури: В 6 т. Т. 2. Київ, 1993.

Грушевський 1992 — Грушевський Михайло Історія України-Руси. Том II: XI-XIII вік. Київ, 1992.

Довнар-Запольский М. В. Очерк истории кривичской и дреговичской земель до конца XII столетия. М., 2011.

Древнерусские летописи, 1936 — Древнерусские летописи. / Перевод и комм. В. Панова. Ред. В. Лебедева. Статьи В. Лебедева и В. Панова. М.;Л., 1936. (Серия «Рус. мемуары, дневники, письма и материалы»).

Зайцев 2009 — Зайцев А. К. Черниговское княжество X - XIII в.: избранные труды. М., 2009.

Закревский 1858 — Закревский Н. Летопись и описание города Киева. Ч.2. М., 1858.

ІЗБОРНИК — ІЗБОРНИК: ЛІТОПИС РУСЬКИЙ за Іпатським списком (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)

Карамзин 1991 — Карамзин Н. М. История государства Российского в 12-ти томах. Т. II - III. М., 1991.

Каргер 1961 — Каргер М. К. Древний Киев: очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 2: Памятники Киевского зодчества X - XIII вв. М.; Л., 1961.

Комарович 1960 — Комарович В. Л. Культ рода и земли в княжеской среде XI-XIII вв. // Труды Отдела древнерусской литературы / Академия наук СССР. Институт русской литературы (Пушкинский Дом); Отв. ред. Д. С. Лихачев. — М.; Л. 1960. Т. 16. С. 85-104.

Кондаков 1998 — Кондаков Н. П. Иконография Богоматери. Том 2. М., 1998 (репринтное изд. Пг., 1915).

Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.

Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)

Лихачев 1985 — Лихачев Д. С. "Пирогощая" "Слова о полку Игореве" // "Слова о полку Игореве" и культура его времени. Л., 1985. С. 270 - 287.

Малишевский 1891 — Малишевский И. И. О церкви и иконе св. Богородицы под названием

- «Пирогощи», упоминаемых в летописях и в слове о Полку Игореве // Чтения в историческом обществе Нестора Летописца. К., 1891. Кн. 5. Отд. 2. С. 113-133. (<http://litopys.org.ua/rizne/chion102.htm>)
- Назаренко 2009 — Назаренко А. В. Городенское княжество и городенские князья в XII в. // Древняя Русь и славяне (Древнейшие государства Восточной Европы, 2007 год) М., 2009. С. 124 - 161.
- Насонов 1969 — Насонов А. Н. История русского летописания XI - начала XVIII века: очерки и исследования. М., 1969.
- Насонов 2002 — Поселения, урочища и реки Черниговской земли (Приложение к очерку)// Насонов А. Н. "Русская земля" и образование территорий русского государства. СПб., 2002.
- Никитин 2007 — Никитин А. Л. Текстология русских летописей (XI - начала XIV вв.). Выпуск 2. Южно-русское и владимирское и владими́ро-суздальское летописание XII в. М., 2007.
- Никоновская летопись — Полное собрание русских летописей: Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью. Т. 9. М., 2000.
- Новгородская первая летопись — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Пашут 1968 — Пашут В. Т. Внешняя политика Древней Руси. М., 1968.
- Патрик 2006 — Барбье Патрик. История кастратов / Пер. с фр. Е. Рабинович. СПб., 2006. (<http://es-dejavu.ru/c/Castrated.html>)
- ПОКАЖЧИК — ГЕОГРАФІЧНО-АРХЕОЛОГІЧНО-ЕТНОГРАФІЧНИЙ <http://litopys.org.ua/litop/lit31.htm>
- Русские летописи — РУССКИЕ ЛЕТОПИСИ Грамматический анализ КИЕВСКОЙ ЛЕТОПИСИ ([http://www.lrc-lib.ru/rus\\_letopisi/Kiev/index.php](http://www.lrc-lib.ru/rus_letopisi/Kiev/index.php))
- СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
- Словарь книжников Вып. 1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вып. 1 (XI — первая половина XIV в.). Л., 1987. (Ипатьевская летопись С. 235 — 241)
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.
- СЭ-1 — Славянская энциклопедия: Киевская Русь — Московия. Том. 1. М., 2001.
- СЭ-2 — Славянская энциклопедия: Киевская Русь — Московия. Том. 2. М., 2001.
- Татищев Т. II, 1995 — Татищев В. Н. Собрание сочинений Тома II и III: История российская. Ч. II. М., 1995.
- Толочко 2003 — Толочко П. П. Русские летописи и летописцы X - XIII вв. СПб., 2003.
- Толочко 2014 — Толочко П. П. Династические браки на Руси XII - XIII вв. СПб., 2014.
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I-VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- Baumgarten 1927 — Baumgarten, N. de, Généalogies et mariages Occidentaux des Rurikides Russes du X-e au XIII-e siècle, *Orientalia Christiana* 9, no. 25, 1927.
- Goranin 1994 — Goranin E. *Latopis kijowski 1159-1198. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 40)*. 1994, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
- Goranin 1995 — Goranin E. *Latopis kijowski 1118-1158. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 86)*. 1995, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.

Rusian genealogy — Rusian genealogy: Maintained by: Christian Raffensperger and David J. Birnbaum  
(<http://genealogy.obdurodon.org/about.php>)

イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』61号, 2014年8月。

スズダリ年代記訳注 [I] — 「スズダリ年代記訳注」『古代ロシア研究』20号, 2000年。11～52頁。

スズダリ年代記訳注 [II] — 「スズダリ年代記訳注 [II]」『古代ロシア研究』21号, 2003年。13～44頁。

スズダリ年代記訳注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」『古代ロシア研究』22号, 2010年。13～37頁。

ノヴゴロド第一年代記 [I] — 「ノヴゴロド第一年代記古輯(シノド本)訳・注」『古代ロシア研究』12号, 1978年。

日食・月食・星食情報データベース — 「地球上どこでも 日食・月食・星食情報データベース」(<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>)

除村 — 除村吉太郎『ロシア年代記』(ユーラシア叢書30, 原書房, 1979年)

ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年

リューリク王朝系図索引 — 「リューリク王朝系図索引」『古代ロシア研究』第14号(1981年11月), 35～57頁

〔後記〕本稿は2014年度に行われた共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤田英実香は富山大学人文学部研究生である。